IS使いの剣舞 Re.make

剣舞士

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私の作品《ＩＳ使いの剣舞》のリメイク版です！

キャラや物語の設定などを変えて、書いてみました。

目次

第1話　剣と火猫と妹と　1
第2話　黄昏の魔女　31
第3話　それぞれの始まり　58
第4話　猫と狼と騎士　87
第5話　少女の願い　108
第6話　真夜中の剣舞　130
第7話　精霊魔装　153

第1話　剣と火猫と妹と

大歓声が轟く会場。
コロッセオのような決闘会場には、たくさんの人たちが詰めかけた。
大人から子供、男女問わずある精霊使いを見ていた。
若干13歳にして、無所属で登場した若き精霊使い。
誰もが見ても息を呑むような美しさと、しかしそれとは裏腹に、左手には漆黒の剣が握られている……。
相手は、オルデシア帝国代表《静寂の要塞》という異名を持つヴェルサリア・イーヴァ・ファーレンガルト。
方や、無所属の少女の名は、レン・アッシュベル。
ヴェルサリアは優勝候補の一角として言われている……無所属の少女が勝つのは、正直難しいものだと誰もが思った……だが……

「ッーーーーーー」
「っ……っ!?」

一瞬の交錯。
《城砦精霊》を使役するヴェルサリアが、圧倒的物量で砲撃する。
一瞬で消し飛んだと思った。
だが、次の瞬間には、ヴェルサリアの胸を剣が貫いていた。

『勝者！　レン・アッシュベル!!?』

アナウンスの宣言とともに、再び大歓声が轟いた。
この瞬間、この大陸に、新たな伝説が誕生したのだ……。
しかし、それももう、3年も前のことになる……。

「っ……!!?」
「あーー、えっと……」

豊かな緑が生い茂る、広大な森の中を、ある一人の少年が歩き回っていた。
その服装は、いかにも旅人のような格好だ。
動きやすそうな灰色のズボンに、両肩のあたりで裾の切れた黒いシャツ。
それを覆い隠すように、黒いローブを纏った少年。
何故か左手にだけ、黒い革製の手袋をはめている。
年齢的には、十代半ばあたりの年齢に見えるが、その雰囲気は、どこか大人びて見えた。
さて、ここで一つ、問題が発生した。
森の中を散策しながら歩き回っていた少年、名を『織斑　一夏』と言う。
旅を続けてきたと言わんばかりの服装と、その腰には、鞘に収まった、細長い直剣がぶら下がっていた。
そんな彼が、今目の前で起きている現状を理解するのに、少々時間を要している。
数日前、ある知人から手紙をもらった。
その手紙には、ある場所に来いと書いてあった。
その場所は、深い森の中にあるため、こうして森の中を散策していたわけなのだが……。
今、一夏の目の前には、信じられない光景が写っていた。

「ひっ……!」

短く悲鳴をあげる少女。
そう、水音が聞こえると思い、休息を兼ねて水場があるところに向かったところ、そこには、燃え上がるような炎を連想させる真っ赤な髪を濡らした、全裸の少女がいたのだ……。
そう、全裸なのだ。
一部の狂いもなく、素っ裸なのだ。
予期せぬ光景に、一夏は黙ったまま固まってしまったが、ようやく正気に戻り、まず弁解を述べた。

「まっ、待ってくれ！　これは不幸な事故っていうか、決して、わざとではない！
そ、それにーーーー」

ここで明確な答えを出して、きっちり誤解を解いておかなければ……。

「俺は、健全な男子だ！　子供の体になんか興味はないから、安心してくれ！」
「っ……!?」
「今見たのは忘れる！　だから、どうか許してほしい……！」

あまり見続けるのも失礼にあたると思い、一夏は少女から背を向けた。
そして、精一杯の謝罪の気持ちと、許しを懇願した。
さて、少女の返答やいかに……。

「じゅ……くさい」
「えっ？　な、なんだって？」
「あたしはっ！　１６歳！」
「え……？　えええええっ!?」

１６歳……同い年だ。
しかし、あまりにも小柄で、幼い体つきから察するに、歳下だと思っていたため、驚きを隠せない。

「嘘だろっ!?　１６歳でその残念な胸ってーーーーあ……!」
「っ～～～～!!!!!」

やばい、今のは失言だったと思い、もう一度弁解しようとしたのだが、さすがにこれだけやられては、許してくれなかった。

「い、いい度胸……本当にいい度胸ね……!　このクレア・ルージュの水浴びを見た挙句、あ、ああ、あたしの体を～～～～っ!!」
「わああっ!?　待て待て!　ごめんって!」
「うるさい!　この覗き魔!　変態!　淫獣うううう～～～ッ!!!!!」

なんで『淫獣』なんて言葉を知っているんだろう……?
そんなことを頭の片隅で考えていたが、それすらも吹っ飛ぶくらいの現象を、一夏はその目で見た。

「っ!?」

周りの大気が、少女、『クレア・ルージュ』に呼応したかのように、激しく吹き荒れる。

「紅き焔の守護者よ、眠らぬ炉の番人よ!　今こそ血の契約に従い、我が下に馳せ参じ給え!!!!」
「これは、《召喚式―サモルナ》っ!?　ってことは、お前、精霊使いかっ!?」

《召喚式》
精霊と契約を交わす時や、力を行使する時に発する精霊語。
その言葉通り、クレアの右手には漆黒の鞭が顕現し、その鞭から、灼熱の焔が吹き荒れる。

「《精霊魔装―エレメンタルヴァッフェ》までっ?!　こいつ、できるな……っ！」

この世界には、人間や亜人種……その他にも、様々な生物が生きている。
この世とは違う全く別の異世界《元素精霊界―アストラル・ゼロ》と呼ばれるところに存在する生命体……。
それが、《精霊》と呼ばれる存在だ。
そして、その精霊と契約を結び、その力を自在に使いこなす存在……それが、純潔の姫巫女にのみ与えられた特権である《精霊契約》であり、それを使う者を《精霊使い》と呼ぶ。

「この変態！　消し炭になりなさい！」
「うおっ!?　ちょ、まっ！」

炎の鞭が一夏の横を通り過ぎる。
一夏の周りには、立派に育った樹木などがたくさんあるのだが、クレアの鞭は、それをいとも簡単に溶断した。
これはさすがに……死ぬ。

「待てって！　落ち着け！」
「うっさい！　避けるな！　さっさと消し炭になりなさい！」
「あっぶねぇ……っ！」

クレアは今、自身の体を覆い隠すような姿勢になっているため、鞭を自由自在に動かせているわけではない様子だ。

それゆえに、攻撃の手は緩く、一夏はなんとか動き回って、その攻撃を躱し続ける。
だが、どうにも先ほどから気になって仕方がない事があったので、それをクレアに対して言い放つ。

「あのさー！　どうでもいいんだけどよー！」
「何よっ！」
「隠すならちゃんと隠してくれ！　指の隙間とか！　微妙に隠しきれてないんだよ！」
「ッ!!!!?　ひゃんッ！」
!!

一夏は注意のつもりで言ったのだが、クレアはまた見られたのだと思い、即座に《炎の鞭―フレイムタン》を投げ捨てて、両腕で胸を隠し、その場にうずくまってしまった。
だが、最悪なことに、その鞭が、クレアの背後にあった巨木までも溶断してしまった。

「っ!?　クソッタレがッ！」
「はっ……!?」

近づいてくる一夏に気づき、そして、自分の頭上に落ちてくる巨木にも気がついた。
死ぬ……。
そう思った瞬間、一夏の顔が、自分の目と鼻の先にあった……。

「間に合えぇぇぇッ!!!!
!!」

水場に飛び込み、クレアを抱きしめるようにして倒れ込む。
間一髪で、巨木の下敷きを免れた二人。
その二人の顔は、今にも触れ合いそうなほど近く、互いに見つめ合うようにして硬直していた。

「あ……えっとその……大丈夫か？」
「へぇ？」
「その……怪我とかは？」
「あ……うん……」

なんとか気を取り戻して、一夏はクレアに尋ねた。
クレアも少々気が動転しているらしく、曖昧な返事しかしないが、見たところ怪我をしている様子もないようで、一夏は安心して、クレアから離れようとした。
だが……。

むにゅ。

「ひゃん！」
「ん？　なんだ……？」

むにゅむにゅ。

「これは……？」
「ひゃあああっ!?」

右手に伝わってくる感触。
少々硬いが、程よい弾力のある物体。
それが何なのかは、言うまでもなかった。

「な、何すんよーッ!!!」
「うわあっ!?　ご、ごめーーーー」

スパァーーーン!!!!

「うおっ!?」

謝るよりも先に、炎の鞭が飛んできた。

鞭の触れた水面が、一気に蒸発する。

「ま、待てっ！　それは本当に死ぬって！」

「消し炭になりなさぁぁぁぁいッ!!!!!」

「ぐおおおおおッ!!!!!??」

勢いよく振り上げられた鞭が、容赦なく一夏の頭上から降ろされる。

とてつもない衝撃と反動で、一夏はその場で気を失った。

「三春……本当に受験する気なのか?」

「うん……もちろん。私の意志は変わらないよ」

とある家の一室で、顔立ちの似た二人の女性が話し合っていた。

一人はレディーススーツに身を包み、ロングヘアーを毛先近くで結んだ成人の女性。そしてもう一人は中学校の制服だろうか、紺色のセーラー服を着て、肩あたりまで伸ばした黒髪の少女。

「三春……お前の気持ちもわからなくはないが……」

「お姉ちゃんは信じてるわけ？　兄さんが死んだって……」
「それは……」
「だって確証がないじゃん！　死んだという痕跡がなかったんでしょう？　なら、生きてる可能性は十分にあるよ！」
「だが、あれからもう何年経っていると思っているんだ……五年以上は前の話だぞ？
その間に、世界各地で一夏の捜索が行われたんだ……。なのに、見つかっていないというのは……」
「見つけられなかったってだけかもしれないし！　それに、五年以上経ってるって言うなら、兄さんの風貌が変わってる可能性だって……！」
「……」

妹、織斑　三春の言葉に、姉である織斑　千冬は、頭を悩ませていた。
今から五年以上は前のことになるだろうか……。
ここ、織斑家には、もう一人の兄妹がいた。
名を『織斑　一夏』と言う……。
しかし、ある日、三春にとっての兄である一夏は、姿を消した。

「あの時は、私に責任がある……。お前が気に病む必要はない」
「別に病んでなんかないよ……。ただ、世界が兄さんのことを忘れてるって言うなら、私が探せばいいだけのことだよ」
「お前は自分のやりたい事をすればいいんだ！　なにも、ＩＳ学園に入る必要はーーーー」
「それが私のやりたいことなのッ！」
「っ!?　三春……」
「……じゃあ、私……勉強しなくちゃいけないから……」

そう言って、三春は千冬に背を向けて、リビングを出て、二階にある自分の部屋へと戻っていった。
取り残された千冬は、盛大なため息をついた後、ソファーに飛び込んで、深々と座った。
目尻を押さえ、天井の方へと顔を向ける。
そして目を開いて、テレビの横に置いてある戸棚の上の写真に視線を送った。
そこには、家族三人で撮った写真があり、そこに写る三人は、まっすぐ前を向き、満面の笑みで写真に写っていた。
「一夏……。今お前は、どこにいるんだ……？」
消えた弟の事を思い、千冬はそのまま、ソファーに横になった……。
その千冬の問いかけに答える者など、誰もいなかった。

ーーーーごめんなさい。
ーーーー待ってくれ！　行っちゃダメだ！
ーーーー本当に、ごめんなさい。
ーーーー待って！　待ってくれッ！
ーーーーさようなら……。
ーーーーレスティアアアアッ!!!!!

「はっ……!?」

嫌な夢を見たような……そんな気がした。
闇色のドレスに、漆黒の長い髪と翼を持った少女。
ずっと一緒にいると約束した、大切な少女だ。
だが、その少女は、何処かへと消えてしまった……どこに行ったのか、なにをしているのか……。
それを探るために、今まで旅を続けてきたというのに……。
また、同じ夢を見ては、取り戻せずにいる。
自分は一体……なにをしているのだろうか……。

「んっ？　なんだぁ……これ？」

と、そこで一夏はある事に気がつく。
なぜか息苦しいと思っていたが……なにやら黒い何かが首に巻きついている。
手を首まで持って行き、首に巻きついている物の正体を確かめる。
だが、それよりも早く、巻きついた物がより首を絞める。

「ぐえっ!?」
「やっと起きたのね……覗き魔の変態！」
「ん？」

地面に横たわっている状態であるのはわかっていた。
そして、自分の視界上方から、あの時助けた少女……クレアの声が聞こえた。

今回は全裸ではなく、ちゃんと服を着ていたが……。

「お前……」

「ふんっ……感謝しなさいよね。私が手加減していなかったら、今頃あんたは消し炭よ」

「あのなぁ……俺、一応お前のこと助けたんだけど？」

「まぁその事に関しては、私は公平な貴族だから、一定の評価を下してあげるわ。あんたは普通の変態よりもちょっとグレードの高い『ハイグレード変態』よ」

「それ！　余計に悪くなってるからなっ！」

なんだよ、ハイグレード変態って……。

一夏のツッコミが出たところで、クレアはどこかもじもじとし始めた。

一体どうしたのだろうと考えていたが、顔を赤くしている事から、なにやら恥ずかしがっているのか……？

と考えつく。

「な、なによ……！　どさくさに紛れて、わ、私の胸揉んだくせに……っ！」

「ん？……はは～ん」

「な、なによ！」

一夏は、クレアについて、ある一つのことがわかってしまった。

（こいつ、初心だな……）

そもそも、『精霊使い』と呼ばれる姫巫女の少女たちは、清らかな乙女でなくてはならない。

そのため、その大半は、男慣れしていない超がつくほどの箱入りお

嬢様たちが多いと聞く。
現に、クレアが今身につけている服……白を基調とし、レースのフリルなどをあしらった独特の制服は、精霊を使役する姫巫女たちを育成する機関……《アレイシア精霊学院》の制服だ。
学院に所属する生徒は、その大半が名家のお嬢様たちだという……。
ならば、クレア同様に、学院の生徒たちもまた、男に対しての免疫がない初心な者たちが多いはずだ。
（どうりでこんな初心っぽそうな反応をするわけだな……）
「な、なんとか言いなさいよっ！」
「えっ？」
『えっ？』じゃないわよ！　なにをニヤニヤ笑ってるのかって聞いてるのよ！」
「いや……今お前が来ているその制服を見てな。お前、《アレイシア精霊学院》の生徒なんだよな？」
「そ、それが何よ……！」
「あの学院に通っているのは、清らかな乙女のみ……。男を知らない、超箱入りお嬢様ってところか」
「何よ！　バカにしてるわけっ?!」
「別にしてないよ……ただ、ちょっと意外だなぁ～って思っただけだよ」
「ん？」
「……いや、その大胆だなぁ～って……髪の色と同じとはな」
「？……ひゃんっ！」
なんの事を言っているのか分かってしまったクレアは、また鞭を放り捨てて、両手でスカートの裾を押さえる。
「み、見たっ!?」

「見たっていうか……見えたというか……」
「あ、赤なんて履いてないわよッ！　白よ、白ッ！」
「へぇ～……白なんだ」
「なっ?!」

嵌められた事に気付き、怒りをあらわにするかと思いきや……。

「う、うううっ～～～～!!!!」
「う……っ!?」

涙目になり、その場でシクシクの泣き始めた。
これはやり過ぎたと思い、一夏はすぐさまクレアを慰める。

「うわぁぁ、ごめんって！　ほんの冗談のつもりだったんだよ……だから、泣くなって！　な？」
「ひっ、ぐぅ……！」
「その……水浴びを見てしまったのも、胸を触ったのも、ほんとっ、悪かった！　だけど、決して悪気は無かったんだ！
だから、その、ごめんな……」

ぽん、とクレアの頭に手を乗せて撫でる。
クレアは涙を拭い、元に戻った強気の瞳で、一夏を見返した。

「なによ……。大体、なんで男のあんたが、こんな所にいるのよ」
「あー……えっとだな。俺は、グレイワースに呼ばれて、ここに来たんだよ」
「グレイワース……？　学院長に？」
「そ。ここで学院長やってるって書いてあったから、ここまで来たんだけど……ほら、これが証拠」

そう言って、一夏はクレアにグレイワースから一夏宛に届いた手紙

を見せた。
クレアら訝しそうにそれを受け取り、手紙の包みを念入りに調べる。

「うーん……確かに、これは学院長の名前に、『帝国第一級紋章印』ね……。それに、神威に偽装は施されてないみたいだし……。まぁ、この事に関しては信じてあげるわ。
にしても、なんだって学院長は、あんたを呼んだの？」
「さぁな……それは、グレイワースの婆さんに聞いてくれ。俺だって戸惑ってるんだ」
「ば、婆さんですってっ!?　精霊騎士を目指す姫巫女たちが、最も憧れる御方を、婆さんって……っ！」
「まぁ、グレイワースとはちょっとした知り合いでな……。それで、こんなところまで呼ばれたはいいんだが……ここの敷地が広すぎてな……」

アレイシア精霊学院の敷地は、信じられないほど広大だ。
あたり一面が全て森。
何しろ、山の麓にある学院都市を包括し、さらにその周囲に広がる《精霊の森》を丸ごと所有しているというのだから……。

「もしかして、森の精霊に惑わされたの？」
「うーん……」
「……ぷっ」
「……笑うなよ……しょうがないだろ？」
「まぁ、そうよね。男のあんたなら、迷っても仕方ないわね」
「まぁ、とにかく人に会えてよかったよ。精霊の森で迷子とか、マジで死ねるからな……。
それで、学院には、ここからどこに向かえばいいんだ？」
「どこにって……あのね、言っとくけど、学院は今いるここから徒歩で二時間はかかるわよ？」

「なにっ!?　そんなに遠いのかっ?!」

そんなに歩いていると、また森の精霊に惑わされかねない。
てっきり、クレアがいたので、かなり近くまで来ていたのだと思っていた。
「じゃあ、あたしは行くところがあるから、あとは自力で脱出してね」
「えっ?　ちょっ、おい!」

そう言って、クレアはそそくさと全く別の方角へと向かっていく。
せっかく見つけた学院の場所を知る者を、ここで失うわけにはいかないと、一夏もクレアのあとを追っていく。

「なんで付いてくるのよ」
「お前がいないと、学院までの道がわからないだろ?」
「なによそれ……。まぁ、別に付いて来てもいいけど、死ぬかもしれないわよ」
「……お前、一体なにするつもりなんだよ……?　っていうか、あんなところで、なにしてたんだ?」

あんなところ……と言うのは、当然先ほどクレアが水浴びをしていた場所のことだ。

「《精霊契約》のための禊をしてたに決まってるじゃない」
「《精霊契約》……ん?　でもお前、さっき炎の精霊使ってなかったけ?」
「まぁね。でも、あたしには、もっと力がいるのよ……!」

そう言ったクレアの言葉は、どこか重みを感じた。
そうやって会話をしながらの徒歩行軍。
二人は、ようやく目的の場所へとたどり着いた。

そこにあったのは、なにやら、祠のような場所だった。

「これは……結界か？」

入り口には、誰も入れないように結界が施されていた。

という事は、ここにいる精霊は、少々厄介なものだというのが見てとれる。

「ここには、かの聖剣……《魔王殺しの聖剣―デモン・スレイヤー》が封印されているらしいわ」

「デモン・スレイヤー……魔王《スライマン》を討ち滅ぼしたっていう、あの《セヴァリアンの聖剣》が、ここに封印されてるのかっ……!?」

「馬鹿ね、本物なわけないでしょ？　そうやって祀っているところなんて、大陸各地にたくさんあるし、村の象徴として村起こしなんかで飾ってるところなんて言うのも聞いたことがあるわ。

でも、ここにいる《封印精霊》は、間違いなく強力なものよ。

学院創立以来、何人もの精霊使いが、契約に挑んだらしいけど、ことごとく拒否された伝説の精霊らしいから」

「って言っても、《封印精霊》なのは間違いないんだろ？　やめとけよ、《封印精霊》っていうのは、隙あらば自分の主人をも殺そうする危険な存在なんだぞ？」

「へぇ～？　男のくせに詳しいじゃない……。でも、私には目的があるの……その為に、強い精霊がどうしても必要なのよ」

「どうしてそこまで拘るんだ……？　お前が使っていた炎精霊も、かなり強力なものだったろう……。

そいつを育てればいいじゃないか……」

「……《スカーレット》は大事な友達よ……。でも、それとこれとは話が別」

クレアはなにやら呪文のようなものを唱えると、指先で封印に触れ

た。
その瞬間、ガラスが割れたような音が聞こえ、目の前の封印が解けた。
「っ?!」
封印を解除するほどの神威と、その呪文を知っているとなると、クレア自身が、優秀である事を証明している。
祠の中に入っていくクレア。
一夏はそれを後ろから見て、ため息を一つ……。
その後、クレアの後を追って、一夏も祠の中に入っていった。
中は暗く、光が射していない。
まぁ、当然といえば当然なのだが、クレアは右手を出すとその手のひらに小さな炎を灯した。
「炎よ、照らせ」
ボウッ、と火が起こり、辺りに明かりを灯した。
「なんで付いてくんのよ。どうなっても知らないわよ」
「さっきもいったろ？　お前がいないと、学院までの道がわかんないんだって」
「まぁ、別に付いて来てもいいけど、本当に死んでも知らないからね？」
「ああ……。自分の身くらいは自分でなんとかするよ……」
そう言って、一夏は腰にぶら下げていた剣の柄をコツンと叩く。
「そういえば、なんなのその剣？」
「ああ、これか？　ここに来るずっと前に、ちょっと変な奴らに絡まれてな。

しょうがないから、そいつらをぶちのめした後に、中々の業物だったんで、戦利品として俺が貰った」
「……呆れた。覗きの変態に付け加え、泥棒とはね」
「聞き捨てならないな。相手は山賊だったんだ……なら、自分の持ち物が奪われることくらい、覚悟の上だろうさ」
「ふん……」

そっぽ向いて、スタスタを歩いていくクレアを、一夏は後から追う。

「しかし、本当にやるのか？　《封印精霊》との契約なんて……」
「あんたもしつこいわね……。そう言うあんたも、死にたくないなら帰れば？」
「……なに、大丈夫だろ。手懐ける自信が、お前にはあるんだろう？」
「あ、当たり前じゃないッ！」
「なら、ついていっても問題ないよな？」
「勝手にしなさい」

少々意地を張っている様にも聞こえたので、少し心配になる。
そう言っている間に、暗い洞窟を抜けて、二人は《封印精霊》が封じられている祭壇へと到着した。

「……」
「あれが……このに封印されている精霊か……」

祭壇には、台座の上にまっすぐ刺さった剣が一振り。
封印されてから、かなりの年月が経っているのか、どう見てもボロボロのガラクタにしか見えないが……。

「すー……ふぅー……」
「おい、一応気をつけろよ？」

「わかってるわよ……！」

クレアはゆっくりと祭壇へ近づいていく。

「行くわよ……クレア・ルージュ……ッ！」

自分自身を奮い立たせる様につぶやく。

そして、左手で剣の柄を握り、そこに思いっきり神威を注ぎ込む。

それと同時に、契約の儀式へと入った。

「古き聖剣に封印されし気高き精霊よ、汝、我を主君と認め契約せよ。さすれば我は、汝の鞘とならん！」

突如、激しい光が噴き出し、辺りに強い衝撃を生む。

「っ……！　凄まじい神威だ……！　言うだけのことはあるな！」

「我は三度汝に命ずる‼？　汝！　我と契りを結び給え！！！！」

光がより一層強くなった。

そして、その左手には、引き抜いたと思われる聖剣の姿があった。

「ぬ、抜けたっ?!　抜けたわッ！！！！」

「マジかよ……っ!?」

これは正直誤算だった。

《封印精霊》はそう簡単に契約できるものではない……いくらクレアが優秀な精霊使い出会ったとしても、賭けとしては分が悪かったはずだ……。

だが、こうして抜いたということは、精霊の方もクレアを認めたと

いうことに……

キンッ……

「ーーーーえっ？」

認めたということには……ならなかった。

「危ないッ！」

「きゃあっ!?」

剣の切っ先がクレアに向いていたので、もしかしたらと思い飛び込んだが、案の定、クレアの顔めがけて、剣は高速で移動してきた。

あのままクレアを庇って飛び出していなかったら、今頃クレアは串刺しになっていただろう……。

「おい、大丈夫かっ!?」

「ううっ……な、なに？　あたしの封印精霊は？」

「……なんつーか、こいつは主君に忠誠を誓うなんて感じじゃないぞ……！」

クレアの後方に突き刺さったままの聖剣は、また一人でに浮き上がると、その姿を変えていった。

先ほどまでボロボロの刀身と姿をしていた聖剣は、まるで脱皮するかの様に、周りの外装をパラパラと剥がしていく。

そこから現れたのは、『伝説の聖剣』……そう謳われてもおかしくないレベルで研ぎ澄まされた剣の姿だった。

「っ！　やばっ、伏せろっ！」

「ふぁあっ?!」

聖剣の美しさに魅了されていたが、また襲ってきた為、一夏はまたクレアの体を捕まえ、地に伏せる。
その頭上を、再び聖剣が通過する。

「ちょっ！　何勝手に触ってのよぉ～！」
「うるせ……！　あまり騒ぐなよ……。くっそぉ……完全に暴走してんぞ、アレ……！」

一夏はクレアの手を取り、祠の出口へと向かって走った。

「ふぁっ!?」
「いちいち可愛い反応すんな！　さっさと逃げるぞ！」
「か、可愛いってなによっ!?」
「今のうちここから出ないと、こんなところで襲われたらシャレにならーーーーうおっ!?」

外に出た瞬間、真横から剣の切っ先が一夏の顔面付近を通る。
咄嗟に身を仰け反って、剣の直撃を避ける。

「反抗的な子ね……！　キッチリ調教してあげるわ！」
「お前な……！」
「あんたは逃げなさい。あたしは、あいつをなんとしてでも手に入れる……っ！」
「よせ、今はまだ寝ぼけているが、完全に覚醒でもしたら、間違いなく死ぬぞ！」

クレアの手を取り、聖剣から遠ざけようとするが、クレアはその手を振り払う。

「邪魔しないで！　なにも知らないくせに！」
「なんで……！　なんでそこまで、強い精霊にこだわるんだ！」

「あんたになんか、わからないわよ……。あたしには、強い精霊が必要なの……どんな精霊にも負けないっ……最強の精霊がッ！」

彼女の言葉には、重みと、何か覚悟に似た何かが見て取れた。

「紅き焔の守護者よ！　眠らぬ炉の番人よ！　今こそ血の契約に従い、我が下に馳せ参じ給えッ!!!!」

「あれが……炎精霊の本体か……！」

精霊魔装《炎の鞭―フレイムタン》から、炎が吹き荒れ、その炎の中から、紅い火猫が現れる。

「狩りの時間よ、スカーレットッ！　引き裂けッ!!!!!!」

「ニャーッ！」

空中をかける火猫。

自由に飛び回る剣めがけて、スカーレットは猛ダッシュだ。

反抗として剣の方から攻撃を仕掛けてくるが、スカーレットは自慢の牙と爪、反射を生かして、果敢攻めていく。

「ニャオー！」

「ナイスよ、スカーレット！　くらえッ！　《灼熱の劫火球》ッ！」

クレアが生み出した火炎球。

高威力の炎の塊を、剣に向けた放った。

直撃した瞬間に、大爆発。

爆破の衝撃がその場に響く。この威力は、そうそう出せるものではい。

「凄い威力だな……！」

キィイイ……

「っ……？」

やったかと思ったが、突然、剣の方から不協和音が聞こえた。

キュオオオオオーーーーン!!!!

「うおっ!?」

「きゃあっ!?」

耳をつん裂く様な高音。

スカーレットに限らず、その場にいた一夏とクレアも両耳を抑える。

「ッ……高周波っ!?」

あまりの音に身を固める二人。

その間に、聖剣は姿を変え、ただの片手剣だったものが、片刃のバスターソードへと変わる。

（っ！　……あの精霊、自分の意思で姿を変えられるのかっ?!）

聖剣は高速で飛翔し、高周波の影響で体勢が崩れているスカーレットを斬り裂く。

「ニ〃ャーー?!」

「スカーレットッ！」

斬られた部位に、弱々しく灯る炎。

斬られた衝撃で、ほとんど動かずに落ちてくる相棒を、クレアは急

いで駆けて受け止める。

「スカーレット!?」

弱ったスカーレットが、現世に留まれなくなったのか、小さな炎を噴き上げて、クレアの前から消えていった。

「そ、そんな……っ！」

（たった一撃で、現世に顕現する力を奪ったのか……っ!?）

大切な相棒が、今目の前から消えたのだ。

その損失感は、自分の半身が消えた様なものだ……。

「桁違いじゃねぇーか……っ！　完全に覚醒してる……そのまま寝ぼけてて良かったものを……！

おい、何してるっ！　早く逃げろッ!!」

スカーレットの損失のせいか、クレアはその場で座り込んでしまう。

そんなクレアの背後から、聖剣の切っ先が向いた状態で、ものすごいスピードで落ちてくる。

「くそっ！　やるしかねぇかッ！」

選択肢は……無かった。

右手を突き出し、聖剣の切っ先に対して向ける。

「古き聖剣に封印されし、気高き精霊よッ！　汝、我を主君と認め契約せよ、さすれば我は汝の鞘とならんッ!!ーーーー」

額に汗を浮かべながら、決して口にしてはならない精霊契約のため

の《契約式―コンダクトル》を詠唱する。
まっすぐ向かってくる剣の切っ先が、一夏の右手の手のひらの皮膚を穿ち、激痛と共に、赤い鮮血が飛び散る。

「ぐあああぁぁぁぁッ!!!!?」

凄まじい神威を体全身に叩き込まれ、風圧で押しつぶされそうになる。
加えてかなりの激痛が襲うため、意識が一気に飛びそうになるが、ここで堪えなければ、一夏はクレア共々真っ二つになる。

「ーーーー我は三度、汝に命ずるッ！」
「うそ……！　精霊契約っ!?」

一夏の背中を見ながら、クレアが驚きの声を上げた。
そして、より一層強い神威を全身に浴びる一夏。
最後の力を振り絞って、契約式を唱えた。

「ーーーー汝ッ！　我と契りを結び給えぇぇぇぇッ!!!!!」

その刹那の瞬間。
剣の刀身が青白く輝き、激しい閃光と轟音によって、一夏の意識は塗りつぶされてしまった。

「ねぇーーーーねぇ、大丈夫？」
「んっ……んんっ……！」

体を揺らされる感覚と、わずかに聞こえた少女の声。

一夏はゆっくりとまぶたを開ける。すると、その視界には、真っ赤な髪が映った。
この髪の持ち主は、一緒にいたクレアのものだと、すぐにわかった。
何かを言っているようだが、先ほどの轟音のせいで、あまりよく聞き取れない。
しばらく休んだ後、一夏は己の右手を見た。

（やっちまったなぁ……）

右手の手の甲には、くっきりと、精霊契約に成功した証である《精霊刻印》が出ていた。
二本の剣が交錯したような形の刻印。
間違いなく、先ほどの《封印精霊》のものだろう。

（彼女との約束を、完璧に破っちまったなぁ……）

罪悪感からなのか、左手が疼いたような気がした。
かつて、自分と共に歩んだ彼女と交わした約束を、ここで破ってしまった……。
だが、ああしなければ、クレアが死んでいた。
あの時は、こうする他なかったのだ。
クレアは一夏か目覚めたことに気づくと、いきなり襟首をつかんで、ぐっと顔を近づけた。

「ど、どうしてよ……！」
「え？」
「どうして、男のあんたが精霊と契約できるのよっ！」
「……」

一夏は答えることなく、ゆっくりと立ち上がった。
無視されたと思い、クレアはむっとなって、一夏を睨みつける。

「あ、あたしの剣精霊はっ!?」
「悪いな……たった今、俺が契約しちまった」
そう言って、一夏はクレアに己の右手を見せる。
そこにくっきりと表れた、精霊刻印を……。
「な、なな、な、なぁ〜〜〜っ!」
(まぁ、当然の反応だよな……)
精霊契約は、本来、清らかな姫巫女にしか与えられない特権。
男で精霊と契約した者など、この大陸において、たった一人しかいない。
千年前、世界に破滅と災いをもたらし、《魔王》という呼び名をつけられた精霊使い。
その名も《魔王　スライマン》だ。
そんな彼と同じ性質を持つ一夏は、クレアたち姫巫女にとって、恐怖の象徴になっただろう……。
一夏はクレアの事を考え、その場から立ち去ろうとした……のだが……。
「ちょっと、待ちなさいよ!」
「ん?」
「あ、あんた……」
魔王の生まれ変わりなの……?　とでも聞きたいのだろうか。
当然、答えはＮＯだと告げたいが、それで信じてもらえるだろうか……。
だが、彼女から出た言葉は、あまりにも予想外な物だった。
「あんた、あたしの精霊を横取りしたんだから、ちゃんと責任をと

りなさいよねッ！」
「……はぁ？」
「だ、だから！　責任よ、責任！　本当はそれ、あたしが手に入れるはずだったものよ！　それをあんたが横から掻っ攫って行ったんだから、当然じゃない！」
「……ごめん、お前何言ってんだ？」
「だからっーーーー」
クレアは、ビシッと人差し指を一夏に突きつけて、はっきりと言った。
「あんたがあたしの契約精霊になりなさいっ！」

「兄……さん……」
勉強を中断し、自分のベッドに横たわる三春。
その手には、兄と一緒に写っている写真があった。
二人とも、剣道場の道着を着ていて、手には竹刀を握っている。
「兄さん……どこ？　どこにいるの……っ？」
双子の兄は、突然姿を消した。
何も、自ら消えたわけではない。
ある事件があり、それ以来、兄・一夏の姿を見た者が、世界中どこ

にもいないということだ。
世間は兄の捜索を諦めた……でも、三春は……。
「私は見つけるよ……必ず……っ！　兄さん……」
どこに行ったかもわからない兄のために、三春は、ＩＳ学園への進学を、確固たる決意で決めたのだった……。

第2話　黄昏の魔女

「あぁ～～……ひどい目にあったなぁ……」

ため息をつきながら、ローブに身を包み、建物の廊下を歩く一夏。
今一夏がいるのは、《アレイシア精霊学院》の校舎内の廊下だ。
外から見ても思ったが、中々に金を使っていそうな建物だ。
壁一つ、天井にぶらさがってるシャンデリア一つ、窓の近くに置いてある花瓶や、調度品の一つ一つが、見ただけでも高額な物だとわかる代物ばかりだった。

（さすがはお嬢様学校なだけあるなぁ……）

この学院を作るだけで、一体どれくらいの資金を要したのだろうか……。
まぁ、だいたいの想像はつくのだが……考えるのはやめておこう。
金持ちとの価値観の違いというものを、嫌という程浴びせられることになるのだから……。

「にしても、あいつは……どこまで本気にしてんだ？」

ここに来る少し前……一夏は、一人の姫巫女、クレア・ルージュの命を救うために、学院の近くにあった祠に眠っている《封印精霊》と契約した。
本来、男で精霊と契約が結べる人間はまずいない…。
いや、かつてはいたのだ。
しかしそれは千年以上も前の事。当の本人も、討ち滅ぼされたという話があることから、今この世にはいない。
故に、世界でたった一人の精霊使いは、一夏だけということになる。
さて、話を戻すが、その《封印精霊》との契約に成功してしまった一夏は、クレア・ルージュに『自分の精霊を奪ったのだから、責任を

取って自分の契約精霊になれ！』と言われた。
彼女の精霊魔装である《炎の鞭》で縛られて、この学院前まで連れてこられた。

「ようこそ！　アレイシア精霊学院へ♪」
「……」
「何よ、なんでそんな無反応なわけっ!?　あたしが直々に案内してやったんだから、もっと感謝しなさいよねっ！」
「ああ……そのことに関しては礼を言うよ、ありがとう……。でもよ、これはどう見ても『案内』じゃなくて『連行』だからなっ！」

体に巻き付いた鞭。
それを嬉々として引っ張るクレアの後ろを付いて行きながら、ようやくたどり着いた学院。
その前には、学院都市という場所を通らないといけなかったため、多くの衆人環視の中を、その状態で歩いてきた。
もはや、それでは周りの人たちに、悪い印象しか与えなかっただろう。

「何よ、別にいいじゃない。あんたはあたしの契約精霊になったんだし……。ねぇ、この覗き魔の変態精霊」
「その呼び方！　そろそろやめろよ、恥ずかしい…。俺の名は一夏！　織斑　一夏だ！」
「オリムラ……イチカ……？　変な名前ね。クイナの出身？」
「いや、もっと東方にある、島国だよ……」

まぁ、もっとも……この世界に『日本国』と呼ばれる国があればの話なのだが……。

「変な名前とは失礼だな……。そういうお前の名前だってそうだ

ろうよ……クレア・ルージュ」
「気安く呼ばないで……！　どうせ変な名前よ」
「そうか？　俺はいい名前だと思うぞ……クレア・ルージュ」
「な、なんなのよ……っ！　そ、そんな事言ったて、許してあげないんだからね……！」

一夏の嘘偽りのない言葉に、少し恥ずかしくなったのか、クレアは急に前を向いて、鞭を引っ張った。
だが、先程に比べて、感覚が軽くなった事に気づいて、ふと後ろを向いた。
すると、そこにはもう、一夏の姿はなかった。
「ああーーーーッ!!!!!!!!!」
来た道を振り返って、全力で駆けていくクレア。
そんな様子を、一夏は近場にあった木の影に隠れて見ていた。

「あの状況で逃げ出さないとでも思ったのかよ……」

ほんと、世間知らずのお嬢様だったみたいだ。
そして、改めて、一夏学院の門をくぐり、呼び出し人であるグレイワースがいるであろう、学院長室へと向かった。
そして、一番初めの状態に戻るわけだ……。
クレアが必死に一夏を探しているであろう時に、一夏は学院の廊下を歩いていた。
今はまだ休憩時間なのか、廊下には学院生たちがおおく出ており、一夏の姿を見た瞬間に、廊下の端へと散り散りに広がっていく。

（まぁ、当然の反応だわな……）

この学院にいるのは、ほとんどが、異性との交流に疎い、箱入りお嬢様方だ。
そして学院には、女生徒しかいない。
なので、そんな中に、自分たちと同年代の男が現れたのなら、警戒心むき出しで接してくるのは当然だ。
ましてやそれが、貴族のご子息というわけでもない。ただの旅人風の男だ。黒いローブに身を包み、なおかつ剣まで持っているとなると、より一層警戒されることになる。
しかしそんな中、一夏は違うことを考えていた。

（クレア・ルージュ……か。あれは多分偽名だな）

クレアについてだった。
クレアほどの精霊使いならば、そこそこ名の通った家名であるはずだが、オルデシア帝国に、『ルージュ家』と呼ばれる貴族の家名は聞いた事がない。
まぁ、それを知った上で、学院長であるグレイワースは、彼女の所属を許しているのだろうが……。

（まぁ、隠しておきたい事なんて、誰にでもあるだろうしな）

不意に、視線が左手へと落ちた。
そうだ……隠し事なんて、誰にでもある。
一夏もそれを持っている内の一人だ。

「さてと、学院長室は……おっ、あれだな」

一際目立つ重厚な扉。
視界上部の方にあった表札にも、ちゃんと『学院長室』の名が刻んだある。

一夏は一瞬ため息を吐き、扉をノックしようとして……。

「学院長！　私は納得できません！」

（おっと……先客がいたか……）

突然、部屋から大きな声が聞こえてきた。

ややトーンの高い、少女のアルトボイス……。しかも、どうやらお取り込みのようだ。

（仕方ないな……しばらく時間潰すか……）

「何故、神聖なる姫巫女の学び舎に、お、男などを迎えなくてはならないのですかっ!?」

（……ん？　男ぉ～？）

扉から離れようとした矢先に、そのような言葉が聞こえてきた。

あまり気は進まなかったのだが、ここに至っては仕方ないと思い、一夏は扉のそばで聞き耳を立てる。

「この私が必要だと言っているんだ。理由はそれだけで十分だろう？」

（魔女め……相変わらず寒気がするような声だなぁ……）

「わ、私たちでは力不足だと……そうおっしゃるのですか……？」

「無論、騎士団の力を軽んじているわけではないさ……。だが、あいつは『特別』なんだよ」

「男であるにもかかわらず、精霊と交換できることが、ですか？」

「それもある。が、それだけじゃないさ」

「それはどういうーーーー」

（……ヤベッ！）

少女の声が途絶えたと同時に、一夏は急いで扉から離れた。

すると、一瞬の沈黙を破るかのように、扉が勢いよく開かれた。

「何者だっ！」

おそらく、少女は曲者だと思ったのだろう。
扉を蹴りで強引に開けたため、一夏の視界に入ってきたのは、すらりとした美脚ともった、ポニーテールの少女。
切れ目の双眸と、凛々しい顔立ち。
制服の上から、銀色の胸当てをしていることから、騎士のような出で立ちであることがわかる。
しかし、問題はここからだ。
学院の生徒である以上、制服を身につけていることは当然だが、その制服のスカートが短いため、蹴り破ったことによって、プリーツスカートの裾が捲れ上がり、中のレース付きの下着が堂々と目に入ってしまったのだ。

「く、黒っ!?」
「なっ!? お、おおおのれっ！ この不埒者っ！」

思わず声を上げた一夏の腹部めがけて、少女の渾身の一蹴が叩き込まれた。

「ぐほぉっ!?」

見事に入った一撃に、一夏はそのままよろけてしまい、そのまま少女に組み伏せられてしまう。
少女はそのまま腰に帯びていた剣を抜き放ち、その刀身を一夏の顔へと突き立てた。

「ッーーーー！」

まるで射抜くかのような鋭い視線。

鳶色の双眸が、しっかりと一夏の顔を捉えていた。
しかし、一夏の顔を認識したところで、少女の顔はだんだんと赤く染まっていった。

「き、貴様、お、男かっ!?」
「あ、あぁ……まぁ、な」

この子も箱入りお嬢様なのだろう。
先ほどのクレア同様に、男に対しての免疫がないと見える。
そして、そんな時ーーーー

「ずいぶんと遅い到着だな、織斑　一夏」

学院長室の奥から、不機嫌さ丸出しの声が聞こえる。
一夏は少女に組み伏せられたまま、視線だけを奥に向けた。
そこには、最後に会った三年前と全く変わらない姿した、魔女の姿があった。
ゆるりと波打つアッシュブロンドの髪。
妖艶な大人の色気を含んだ美貌。
小さな眼鏡の奥で、髪と同じ色をした灰色の瞳が、ジッとこちらを見つめていた。

「出やがったな……魔女め」

久しぶりの再会にもかかわらず、一夏はそう毒付く。
《黄昏の魔女ーダスク・ウィッチ》ーーーーグレイワース・シェルマイス。
姿こそ妖艶な美女ではあるが、その正体はオルデシア帝国の《十二騎将ーナンバーズ》に名を連ねたこともある歴戦の精霊騎士。
最高位の精霊使いは、年齢を超越すると聞いたことがあるが、噂は本当だったのかもしれない。

「三年ぶりか……ずいぶんと人相が変わったな、一夏」
「あんたが変わらなさ過ぎるんだよ、グレイワース」

倒されたまま、皮肉混じりに言ったつもりだったのだが、魔女はそれすらも微笑で返す。

「織斑　一夏っ!?　では、こいつが例の……！」

ポニーテールの少女が、より一層警戒を強めたように眉をキリッと上げた。

「な、なぁ……そろそろ、退いてくれないかな？」
「なんだと、この破廉恥な不届き者がっ」
「いや、その……一応は、お前のためなんだけど……」
「何？……どういう意味だ」
「いや、だから……さっきから、その……お前の太ももが当たってな……」

普段から鍛練を積んでいるのだろう……程よく引き締まっている柔らかな太ももが、先ほどから一夏の体に触れている。
他者から見たら、羨ましいお思われる光景かもしれないが、実際の所、そんな事を思う余裕すらない。

「〜〜〜っ！　き、貴様っ！」
「どおわっ!?」

少女の顔が、一気に赤く染まったと思いきや、スカートを抑えて後ろに飛び退き、さらには抜いていた剣を遠慮なしに一夏に対して振り下ろしてくる。
一夏も咄嗟に反応して、その一撃を躱して見せた。

「お、おい、やめろ！　危ないだろうがっ！」
「だ、黙れっ！　お、おおおのれ破廉恥なっ！　そこになおれ！
サーモンマリネにしてくれるっ！」
「だあーっ！　やめろってのっ！　それと俺はサーモンじゃない
からなっ！」

再び振り下ろしてきた剣を、一夏は自分の剣を抜いて受け止めた。
刀身は細く、片刃の直刀のような剣。
目に一片の曇りのない、本気の一撃。受け止めていた剣から、その
衝撃が伝わってくる。

（なんで俺はまたこんな目にあってんだ……?!　これも魔女の呪いな
のかっ!?）

そうではないと言い切れないから怖い。
そう思いつつも、なんとか抵抗していた時だった。
今まで事態を見ていたグレイワースの方から、声がかかった。

「剣を収めろ、エリス。学院内での私闘は禁じているはずだ」

グレイワースの言葉に、エリスと呼ばれた少女の動きが止まった。

「し、しかし、学院長ーーーー」
「私に二度同じ事を言わせるつもりなのか？　エリス・ファーレ
ンガルト」
「い、いえ……申し訳ありません」

エリスは一度だけ一夏を睨みつけて、剣を鞘に納めた。
しかし再び、魔女が火に油を注ぐ。

「しかし、お前もそういうのを気にする歳になったのだな。まぁ、甲冑の中で押さえつけられているエリスのわがままボディに触れてしまっては、大抵の少年たちは我慢できんだろうがな」
「なっ!?　が、学院長!?」
「待て！　変に誤解を招くような事を言うなっ！」

ここでまた斬りかかってこられても困るので、一夏は早々にその事を否定した。

「ふんっ……貴様など、学院長の客人でなければポトフにしてやるというのに……！」
「サーモンの次はポトフかい……」

例えがよくわからないのだが、さっきから美味しそうな料理名を言う。
もしかして、料理が好きなのだろうか……？

「下がれエリス。あまり目の前てイチャラブされても不愉快だ」
「し、しかし！　この男と部屋で二人きりなど……。この男が、自分の欲情に身を任せて、その、学院長に対して不埒な行動をーーーー」
「ありえねぇーよッ!!　万が一にでもそれだけは無えっ！」

あまりにも突拍子もない言葉に、さすがの一夏もツッコんだ。

「ふむ……それなら別に構わんさ。私はいつも勝負下着を履いているぞ？」
「はぁっ!?」
「ほほーん？　顔が赤くなったぞ少年。なかなかに可愛いな、ちなみに色はーーーー」
「聞きたくねぇーよっ！」
「冗談だよ……何をそんなに本気になっているんだ？」

「このっ……魔女め……っ！」

くすくすと愉快そうに笑うグレイワースに、一夏は殺気がこもった視線をぶつけた。

「し、しかし学院長！　護衛もなしに、このような男とーーーー」

「エリス・ファーレンガルト」

「っ!?」

静かな声色が、ここまで響くものだろうか。

グレイワースの声に、エリスはビクッと体を震わせた。

「私に同じ事を二度言わせるつもりなのか？」

「も、申し訳ありません、学院長！」

グレイワースがよほど恐ろしいのか、エリスは早々に廊下へと立ち去ってしまった。

エリスが下がったことで、学院長室には、一夏とグレイワースの二人だけになった。

ようやくいろんな意味で危険から脱したようで、一夏はホッと胸を撫で下ろす。

「しかし、甲冑なんで着込んでたけど、あの子も学院生なんだよな？」

「彼女は《風王騎士団―シルフィード》の団長なんだ。学院の規律と秩序を守っている」

「ふーん……風紀委員みたいなもんか……。なら、もうちょっと取り締まりを強化しておいたほうがいいと思うぞ？」

森の中で猫娘に襲われる事だってあるだろうし……。

「ふむ……まぁ、一応参考にしておこう。しかし、まだ随分と到着が遅れたな？」
「あぁ……。ここに来る途中で、騒がしい火猫のお嬢様に絡まれてな」
「ほう……。では、その傷も、その火猫にやられたのか？」
グレイワースの言う傷……それは、一夏の右手の甲にある物を指した言葉だった。
（魔女め……やっぱり気づいたみたいだな）
隠し通せるとは思っていなかったが、こうも早く看破されるとは思っていなかった。
「そのまぁ、なんて言うか……。ここに来る途中、剣の封印精霊と契約しなくちゃ聞けない場面があってな……成り行きで」
「ほう？　お前が〝彼女〟以外の精霊と契約するとはな……。ようやくあの『亡霊』と決別できたというわけか……」
「っーーーー!!!!!」
グレイワースの言葉に、一夏は怒気を含んだ視線を向け、腰に差していた直刀と抜いて、グレイワースに切っ先をつけた。
「あいつは亡霊なんかじゃないっ……！　言葉には気をつけろ、魔女……っ！」
「ふん……では、あいつはお前のなんだというのだ？　家族か？　恋人か？　それとも姉弟か？」
「違う。あいつは、俺にとって……大切な……っ」
大切な相棒だった。
だが、そんな大切な相棒が、三年前、忽然と姿を消したのだ。

彼女を探すために、一夏は旅を続けた。
彼女の居場所を突き止めるために……。

「そう無下にすることもないだろう……。〝異世界〟からやってきた少年が、美しい少女の精霊と恋に落ちる……。
中々にロマンチックな筋書きだと思うが？『魔王の迷い子』よ」

「……」

グレイワースの言葉に、一夏は眉をひそめる。
そう、一夏は元々、この世界の住人ではなかった。
まだ10歳にもなっていない時に、ひょんな事から、この世界へと表れた。
それが、何を意味しての事だったのかは、グレイワースも、ましてや、一夏本人もわからない。
『魔王の迷い子』という言葉は、三年前に、グレイワースと知り合った際に、グレイワースが名付けたものだ。
まぁ、男でありながら精霊を使役している時点で、確かに、魔王の要素は含まれているだろう。

「まぁいい……。それで？　あんたの寄越したコレ……本当なのか？」

一夏は突きつけていた直刀を下ろし、鞘に戻した。
代わりに、ズボンのポケットにしまっていた手紙を取り出して見せた。

「ああ、本当だとも……。魔女は嘘をつかない」
「ああ、そうだ。あんたは嘘をつかない……だが、決して真実も口にはしない……だろ？」
「ふふ……」

「話を戻すぜ。あんたの知っていること、すべて教えろ」
「前戯もなしでいきなりだな……。それが人に物を頼む態度なのか？　三年前のお前は、もう少し可愛げがあったのになぁ……」
「三年もあれば、猫も虎に変わるさ……。いつまでもあんたの飼い猫ってわけじゃないぜ、グレイワース」
「猫が虎に変わることはないよ……」

グレイワースはわざとらしく肩をすくめて、一夏の目をじっと見た。
その威圧的な視線に、一夏もわずかに気圧された。
「それに書いてあることは本当だ……。〝お前の契約精霊は生きている〟」
「っーーーー！」

グレイワースの言葉に、一夏は息を呑んだ。
「あいつは……レスティアは今、どこにいるんだ‼？」

思わず声を荒げてしまう。
グレイワースの座る椅子の前に置いてあった、執務机に身を乗り出すほど、グレイワースに近づく。
だが、グレイワースは微動だにすることなく、代わりに書類なの束を、一夏の鼻先に突きつけた。
「……なんだ、これは？」
「この書類に目を通せ……。交換条件だ、ここにサインしてもらう」
「……いきなり何訳の分からない事を言ってんだ、あんたは？」
「訳が分からないという事はないだろう？何のためにお前を呼び出したと思っている。この黄昏の魔女が、善意で情報を提供するとで

も？」
「あんたに悪意しかないのは知っているさ……」
一夏はおもむろに、その書類の束を取ると、思いっきり執務机に叩きつけた。
クリップでまとめられた、アレイシア精霊学院ほ編入届の書類を……。
そこに書かれていたのは、間違いなく、一夏にとって、都合の良いプロフィールだった。

「何の冗談だ、これは？」
「お前には今日から、この学院に編入してもらう。各種の手続きは済ませてあるから、安心しろ」
「何をもって安心しろなんて言っているのかは知らないが、こんなんで安心なんかできるかよ……！　どういう事なのか、はっきりとした説明をしろ！」
「お前が必要だ。以上」
「は？」

魔女の言葉はいつも気まぐれで、いきなりだ。

「あんたの冗談はいつも突拍子もないよな、黄昏の魔女。男の俺を編入って、そんな事、できるわけがないだろう！」
「私の権限でなんとかする」
「ふざけるなっ！　三年前とはわけが違うんだぞ！」

そこまで言った瞬間、グレイワースの瞳から、光が消えた。

「感違いするなよ、少年……。誰がいつ、お前に選択しろなどと言った？」
「ツーーーーー!?
!!!!」

背筋が凍るような声色。
魔女の本性を現した瞬間だ。
この恐怖を煽るような底冷えする声……三年前と変わらない、気味の悪い声だ。

「これまで好きに泳がせていたが、精霊使いは本来、協会に管理されるべきものだ……この私とて、その例外でない。
それはお前も知っているだろう……」
「そ、それは……」

オルデシア帝国では、精霊使いは様々な特権を享受できる代わりに、協会へと登録を義務付けられている。
その理由は、反帝国の思想を掲げるはぐれ精霊使いの存在を許さないからだ。
もしそんな存在がいたならば、国家にとって、もっとも危険極まりないからだ。

「いずれお前の存在も、帝国は嗅ぎつけてくるだろうよ……。男の精霊使い、織斑　一夏の名を。
言っておくが、帝国の精霊騎士の腕を甘く見るなよ？　三年前ならばまだしも、今のお前では、絶対に勝つ事はできない。
それに、うっかり私がばらしてしまう可能性もなきにしもあらずだしな……」
「何が　〝うっかり〟　だよ。要するに脅迫じゃねぇか」
「ふふっ、理解が早くて助かるよ」
「ちっ……あんた、本当にいつか刺されるぞ」
「おや？　心配してくれるのか？　優しいな、一夏」
「誰があんたの心配なんかするか。むしろ襲ってきた連中に同情するよ、俺ならな」

一夏が吐き捨てるように言うので、グレイワースはさも心外そうに肩をすくめる。

「一体何がそんなに気に入らないんだ？　本物のお姫様が集まる乙女の園に、男がたった一人……どこをどう見ても酒池肉林のハーレムではないか」

「はぁ……あのなぁ、俺はーーー」

「なんなら、学院生の一人をお前の好きなようにして良いぞ？　そうだなぁ……さっきのエリス・ファーレンガルト。

あいつなんてどうだ？　生真面目で堅物なところはあるが、うまく調教してやれば、一生お前に尽くしてくれるだろうさ。

そうなれば、どんな過激なプレイでも応えてくれるのではないか？」

「俺はそんな鬼畜じゃねぇよっ！　何言ってんだ、あんたはっ！」

「冗談だよ。私にそんな権限があるわけないだろう」

「あんたの冗談は冗談に聞こえないんだよ……」

一夏は堪らず目頭を抑えた。

「んで？　なんで今更俺を呼んだんだよ……しかも学院に編入までさせて、何をさせるつもりだ？」

「お前は話が早くて助かるよ」

「ぬけぬけと言いやがる……魔女相手に、逆らっても無駄だからな」

一夏の投げやりな言葉に、グレイワースは「ふふっ」と笑い、改まって話し始めた。

「二ヶ月後、元素精霊界で、《精霊剣舞祭―ブレイドダンス》が開催される。それにエントリーしろ」

「はぁっ!?」

ーーーー精霊剣舞祭。
それは数年に一度、元素精霊界で執り行われる最大の神楽儀式。
大陸中の精霊使いが集まり、《五大精霊王―エレメンタル・ロード》に剣舞を奉納する祭儀だ。

「これまたいきなりだな……」

精霊剣舞祭では、優勝したチームを擁する国に対して、数年間にわたって、精霊王の加護が与えられ、国土の繁栄を約束される。
そして、大会の優勝者には……望む《願い》を、一つだけ叶えることができるのだ。

「優勝しろ、一夏。もっとも、今のお前では、到底無理だろうがな」
「俺は……」

一夏は口をつぐみ、拳を強く握りしめた。

「俺はもう、二度と精霊剣舞祭には出ないって……そう決めたんだ」
「いや、お前は出場するさ。そうでなくては困る」
「あ？　どういう意味だよ」

グレイワースの言葉に疑問を抱いたが、当の本人が、改まって手を組み、ジッと一夏の目を見て、言い放った。

「お前以外に、あの最強の剣舞姫を倒すことはできないのだからな」
「なっ……！」

その名前を聞いた途端、一夏は絶句した。

最強の剣舞姫……その称号で呼ばれる精霊使いは、この大陸にたった一人しかいない。
三年前、わずかに14歳にして精霊剣舞祭に出場し、個人戦トーナメントを勝ち続け、その頂点に至った少女。

「おい……っ、それは、まさか……！」
「ああ……。彼女が戻ってきたんだよ」

驚いて呆気にとられている一夏のことなんか御構い無しに、グレイワースは淡々と話を進める。

「最強の剣舞姫ーーーーレン・アッシュベルが、少女の姿をした闇精霊と一緒に……な」
「ッ!!!!!!!!」

グレイワースとの話を終えて、一夏は外で待っていたエリスとともに、学院内を歩いていた。
グレイワースから渡された、学院の制服に袖を通してはみたものの、それが驚くほどぴったりだった事に、一夏は疑念を抱いていた。
(制服まで特注済みかよ……。どんだけ根回しいいんだ、あの魔女は。しかもなんで俺よりサイズ知ってんだよ……)

基調となる色は、他の学院生と同じ純白。
無論、下はスカートではなく、聖性を織り込んだ特注のズボンを履いているのだが、これが思いの外着心地がいい。

（まんまとグレイワースに乗せられたな……こりゃあ）

所々癪ではあるが、あんな言葉を聞いては引き下がることなどできない。

「教師棟と学生棟は二階の廊下で繋がっている。食堂は一階だ」

エリスが直々に学院内を案内してくれている。

先ほど制服に着替えている際に、グレイワースが呼びつけたらしい。

最初はあからさまに嫌そうな顔をしていたのだが、元が生真面目な性格であるため、断ることもせず、律儀に案内をしてくれている。

先頭を歩くエリスの後を追いながら、一夏はグレイワースの言葉について考え込んでいた。

（レン・アッシュベルに……闇精霊……か）

ふと、自身の左手に視線を落とす。

今は革手袋で覆われた左手を見ながら、一夏は考えた。

（彼女か？……いや、違う……そんなはずは……。だが、なぜこんなタイミングで……）

考えても考えてもわからない。

それが本当に、一夏の追い求める彼女なのか、それとも、単なるデマなのか……。

しかし、グレイワースがガセネタを拾う可能性は低いはず……。

魔女は真実を口外はしないが、決して嘘もつかない。

それは一夏もよく知っていることだ。

いまいち信憑性に欠けるが、どこか確信めいた部分もある。

（まぁいい……どの道、彼女を探していたのは本当なんだ。それが嘘か真か、この目で確かめてやる……！）

「おい、君」

「えっ？」

そこまで考え込んでいた時、不意に前方を歩くエリスから声がかけられた。

エリスは訝しむような表情で、こちらを見ていた。

「君のために説明してやっているんだが？」

「あ、ああっ、ごめん。その、ちょっと考え事をしてた」

「考え事？」

一夏の言葉に、何を思ったのか、エリスは急に顔を赤らめると再び警戒心むき出しにして、一夏から距離を取った。

「き、きき貴様っ！　私の後ろ姿を見て何を考えていたというのだっ!?」

「はぁっ？　何言ってんだよ？　って、剣を抜くな！　剣を！」

抜いてそのまま一夏に斬り込んでくるエリス。

騎士団に所属していることもあってか、その剣戟を鋭い。

ましてや、ファーレンガルト家は、『武門』の家。

これくらいの事は容易いのかもしれないが、あまり振るわれると身がもたない。

一夏も持っていた剣を抜いて、剣戟を止めた。

「くっ！　私の剣を止めるなど……！」

「落ち着けっての！　別にやましい考え事じゃないから！」

その言葉を聞いて、エリスは剣を鞘に戻した。

「言っておくが！　君を案内しているのは、学院長のご命令だからだぞっ！　勘違いするなよ！」
「わかってるよ……。でも、そんな邪険にしなくてもよくねぇ？　これからは一緒の学び舎で勉強する生徒同士なんだしさ」
「ふんっ」
「ううっ……」

どうやら、相当警戒されているらしい。
まぁ、今まで乙女の園だったところに、いきなり同学年の男子が入ってきたのだから、ウサギの群れの中に、凶暴なライオンでもぶち込んだイメージだろうか……。

（気持ちはわからなくもないだけど……）

グレイワースの命令には、精霊剣舞祭で優勝しろとの命も入っていた。
そして、今年の精霊剣舞祭は、チーム戦。
五人一組になって戦わなくてはならない。
しかしこのままでは、五人集めるのだけでも一苦労だろう。

（どうにかしないとなぁ……）

そこまで考えたところで、一夏はあることに気がついた。

「なぁ、エリス」
「なんだ」
「俺、今日はどこで寝泊まりすればいいの？」
「ああ、それならこっちだ。さすがに現地に行くのも時間がもったいないので、君の宿舎が見える場所まで行こう」
「ああ、頼むよ」

よかった。最悪野宿も視野に入れていたのだが、精霊の森で野宿は、さすがに身の安全を保障しかねない。
この学院には、生徒のための宿舎があると言う話だし、空いている一室でもあれば願ったりだ。
しかし、そんな希望は、容易く打ち壊された。

「この窓から見える……。あれが、君の宿舎だ」
「どれどれ……」

エリスが指差す方角を見た。
しかし、そこにあったのは、木製の小さな小屋。
それも……

「いやあれ馬小屋じゃねぇーかッ!!!!」
「何を言っている。君の目は節穴か?」
「はぁっ?」
「よく見てみろ」

よく見ろも何も……ただの馬小屋にしか見えないのだが?
そう思いながら、一夏はよ〜く目を凝らして馬小屋を見た。
するとどうだろう……その馬小屋の隣に、小さな小屋があった。

「えっ?」

もしかしてと思い、一夏はエリスに尋ねた。

「もしかして……」
「ああ。あれが君の宿舎だ」
「今度は掘っ建て小屋かよっ!? 馬小屋の方がまだ立派じゃねぇーか! っていうか、あんなの3日もあれば誰でも作れるだろ

う」
「三時間だ。私の契約精霊の力を甘く見るなよ」
「お前が作ったんかいいいっ!!　意外にクオリティーが高いから余計にムカつくんだけど！」
遠目からでも、綺麗に作られているのは見て取れた。
生真面目な性格が表れている。
「それで？　風呂とかトイレは？」
「どちらも馬と共用だ」
「馬と共用って……俺は馬と同等かい」
「何を言っている……馬の方が重要に決まっているだろう」
「……ヒドい……」
何故こんな仕打ちを受けなくてはならないのか。
いかに男の精霊使いが危険な存在だと思っていても、これはやり過ぎではないだろうか……。
「言っておくが、万が一にでも君が学院の施設に入ろうものなら、私の契約精霊がキノコソテーにするので、そのつもりでいろよ」
「マリネにポトフにキノコソテー……どんどんレパートリーが増えていくな。
ひょっとして、料理とか好きなの？」
「ああ……。いつか自分と生涯を共にする殿方の為に、日夜鍛練している」
「へェ～。それは食べてみたいかも……自分以外で料理作ってくれる人の飯は、美味しいと嬉しいものだし」
「そうか。では、いずれ君にも振る舞ーーーー」
そこまで言って、エリスは気づいた。
振る舞う殿方が一夏だと、自分と生涯を共にするのはーーーー

「って！　君になど、絶対に作らないからなっ！」
「うおっ!?」

抜剣から一瞬で振り切る。
あと少し一夏が体を後ろに退いていなかったら、間違いなく首が飛んでいただろう。

「っ!?　ファーレンガルト家に伝わる秘剣を躱すとはっ……！」
「なにサラッと秘剣出してんだよっ！　死ぬってのっ！」
「ええい、もう行くぞ！　これから授業も始まることだし、君の所属する教室まで案内する！」
「あ、おい！　待てよ」

スタスタと歩いていくエリスを追いかける一夏。
学生棟に入り、ようやく教室らしき場所に来たと思える。

「なぁ、なんで教室と教室が、こんなに離れてるんだ？」

元の世界……日本の学校では、教室と教室はすぐ隣にあったが、この学院の教室は、一部屋一部屋の間隔が異常なくらい開いている。
しかも、全フロアだ。

「ここは貴族の乙女たちが集う場だから。ただでさえプライドの高いもの達が多いし、家名同士の因縁などもあるから、決闘沙汰にならないようにとの配慮なのだろう。
基本的に、この学院での決闘は禁じているが、それでも決闘沙汰は起こるのだ」
「なるほどねぇ～」

貴族という者との接点がないため、一夏にはわからない世界だが、

色々と大変なのだろう。

「だがまぁ、そんな秩序と風紀を乱す輩を取り締まるのが、我々《風王騎士団》の役目だ」

（どちらかといえば、お前が一番秩序を乱してると思うんだけどなぁ……）

そう思いながらも、一夏はエリスの事を考えていた。

自分だって、先ほど火猫のお嬢様にやられたばかりだったので、こういう事を、毎日取り締まっているだと思うと、とてもそんな事を言えなかった。

（こいつも、こいつなりに頑張っているんだな）

生真面目で堅物……だがそれは、決して悪いものではない。

一番信用のおける人物だという証拠だ。

そう思っていたら、自然と微笑んでいたようで、またエリスが訝しむ目で見てきた。

「何をニヤニヤとしている」

「ああ、いや……その、ありがとな、エリス」

「な、なんだ、いきなり！」

「いや、ただ単純にお礼を言いたかっただけだよ。騎士団長自らの案内に、心から感謝してるのさ」

「ふ、ふんっ！　そんなにおだてたって、私は靡かんぞ」

「はいはい」

「まぁいい。だが、君も問題は起こしてくれるなよ？　君がこれから所属するのは、〝優秀な問題児〟　が集まるレイヴン教室なんだから」

「優秀な問題児……ねぇ」

「ん？　なんだ？」

「いや、ちょぉ～と心当たりがな……。ところで、エリスも同じ教室なのか？」
「なっ!?　馬鹿にするな！　私は　〝最優〟　のウィーゼル教室だ！」
「ああ、いや！　だって、問題児を取り締まるんなら、同じ教室の方が良いんじゃないかと思ったから……」
「はぁ……。あそこのお嬢様達は、みな自由奔放過ぎるんだ。だから、君を気をつけるように」
「わかりました」

エリスの案内も、最後となり、一夏はこれから自分が所属する教室……『レイヴン教室』の目の前まできた。
丁寧に作りこまれた木製の大きな両開きの扉。
ここから、二ヶ月後の精霊剣舞祭に出場するための準備をしなくてはならない……。

「ありがとう……ここまでいいよ。あとはクラスの子に聞くからさ」
「わかった。では、私はここで失礼する」
そう言って、エリスは自分の教室へと戻っていった。
「さて、鬼が出るか蛇が出るか……！」
教室を目の前に、一夏は大きく深呼吸した。

第3話　それぞれの始まり

年が明けてからの、中学三年生は、とても忙しい。
それもそのはずだ、何故なら、自分の将来を決める進路の一つ……『高校受験』が待っているからだ。

「三春、本当に行くのか……？」
「もう～……こんな時にまでそんな事言うの？　せめて受験の時くらい、応援してくれてもいいじゃん……」

受験当日の朝。
中学の制服に袖を通した三春は、早々に準備を済ませて、受験票や筆記用具……お守りなどが入った学校指定の鞄を持って、玄関のほうへと向かう。
そんな後ろ姿を、レディースーツ姿の姉、千冬が見ていた。
だが、千冬はあまり三春の受験に乗り気ではないようだ。

「別に、私が受験したって、問題ないでしょ？」
「問題はないが……」
「国立校だから、お金は国が負担してくれるし、卒業の進路の幅を考えれば、少しは妥当な選択じゃない？」
「そういう事を言っているわけじゃない。お前はそれでいいのか？」
「もう～、またそんなこと言う……」
「言うさ……。お前は私の家族だ……家族の今後の事を真剣に考えて何が悪い？」
「……何が心配なの？」
「お前はまだ、一夏のことを……」
「……」

それから先は、何も喋らなかった。
また同じ事を言われると思ったからだ。
そんなことは、言われなくてもわかっている……。
もう五年以上姿をくらました兄を探すなど、本来ならばしないし、やったとしても諦めている。
だが三春は、未だに諦めきれない。

「たとえ兄さんのことが無かったとしても……私は同じように進んでいたよ。
でも、やっぱり兄さんの事を忘れるなんてできないし、そんな事したくない……！
兄さんの記憶を、失くしたくはないから……」
「……たとえＩＳ学園に行こうが、あいつが見つかるとは限らんぞ？」
「わかってる……それでも、私は進むよ」
「……わかった。そこまで言うならば、もう止めない」
「うん……ありがと」
「ふん……頑固なところだけは、一夏に似ているからな」
「それは姉さんもでしょ？」
「一緒にするな」

それだけ言うって、千冬は居間へと向かった。

「まぁ、お前の学力ならば、筆記は大丈夫だろうが、実技でヘマをするなよ？
ＩＳは使えなければ話にならんからな」
「誰に言ってるの？　私は姉さんの妹だよ？　受かるに決まってるじゃない」
どことなくそう思える自信はあった。

特に理由はないのだが、筆記、実技が、ともに受かるというビジョンがすでに見えていたのだ。
それだけ言って、三春は玄関のドアを開けた。

「気をつけて行けよ」
「うん。行ってきます」

三春を見送って、千冬も仕事に行く支度をする。
居間に入った瞬間、ふと目に入った写真を見る。
姉、弟、妹の三人で写った写真。
その真ん中にいる、弟の写真を見ながら、千冬は祈った。

「頼む、一夏……三春に、力を貸してやってくれ……！」

三春が進路を決めた理由の大半は、弟・一夏の事が関係している。
姉である自分がいかに言って聞かせようとも、三春の考えが変わる事はない。
弟の一夏の事が好きで、いつも後ろをくっついて歩いていた……。
一夏が剣道をやると決めたら、自分もやると言いだしたり……。
好きという感情も、どこか兄妹というよりも、一人の男として好きなのではないか？　と思えるほどに……。
自分の妹ながらに、変な性格になってしまったと思ったが、いずれ、その思いにも決着をつけるだろうと、これまで何も言わなかった。
その選択が正しいのか、間違っていたのかは、今でもわからない。
ただ、今ここにいる妹だけは、何としても守りたい。
千冬の心は、その事に満ち溢れていた。

「じゃあ、私も行ってくるよ、一夏」

千冬は鞄を取り、玄関の方へと歩いて行った。
ドアを開け、空を見る。

雲が少々覆っているが、その隙間から降り注ぐ陽光が見て取れる。
昨日の天気予報では、雨の可能性があったのだが、本当に晴れてよかった。

「さて……私は私の仕事をせねばな」

ドアに鍵をかけて、千冬も仕事場に向かった。
かつて最強のＩＳ使いと言われた彼女の、新しい職場……。
ほぼ海に面した、島のようなところに存在する、教育機関の施設へと……。

「ふぅー……寒っ……」

厚手のコートにマフラー、手袋と、完全防備で出かけたが、まだまだ気温は低い。
今日は雨だという予報だったが、この土壇場で晴れた。
実に運がいい。

「さてと、電車に乗る前に……寄っていかなくちゃ」

三春は、足早に駅とは違う方向へと向かっていた。
自宅からは、そんなに離れていないため、目的地は視認できるほどの場所。
雑木林が茂っているところで、とても静かなところだ。
大きな石造りの鳥居があって、その奥には、本殿が見える。
そう、三春が訪れたのは、『篠ノ之神社』というところ。
幼い頃、剣道の稽古や、夏祭りの際に何度も訪れた場所だ。
ここ最近は、あまり来ていなかったため、随分と久しぶりに感じる。

「最後の合格祈願！　やっぱりここじゃなきゃ嫌だなぁ」

他の神社にも、中学の友人たちと行ったのだが、やはりここが一番落ち着く。

本殿の方へと向かい、賽銭を入れて、二礼二拍手一礼をする。

「よしっ！」

気合いを入れ直して、三春は駅の方へと走り出した。

これで大丈夫。

今日の受験は、絶対にうまくいくと、確信を持てた表情で、三春は走っていった。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか……！」

自分がこれから所属する教室を前にして、一夏は大きく深呼吸をした。

エリスから学院内を少しばかり案内してもらい、最後に来たのが、一夏も所属する事になるレイヴン教室。

何でもここには、優秀な問題児達ばかりが集まるという。

（っていうことは……）

一瞬、自分の脳裏に火猫のお嬢様の姿が鮮明に映し出される。
やだなぁ～と思っていた瞬間、いきなり足元をすくわれた。

「ぬおっ!?　だぁはっ！」

扉を開けようとしていた為、周囲に全く気を向けてなかった。
そんな瞬間を狙っていたのか、一夏の左脚に鞭が巻きつき、一気に引っ張られた事によって、一夏はそのまま床に顔面をぶつけた。

「ぐおおっ～～!!?」
「ようやく見つけたわ、この奴隷精霊……！」
「んんっ……！」

両手で顔を覆い、痛みに悶絶していると、自分から見て左側の廊下から、少女の声が聞こえた。
おそらく、この鞭の持ち主である事に間違いない。そして、聞き覚えのある声だった為、一夏はうんざりしたような気分で、少女の方へと視線を向けた。

「さっきはよくも逃げてくれたわね、この奴隷」
「やっぱりお前だったんかい……」

半分わかってはいたが、予感が的中してしまい、気持ちが沈んでしまう。

「さて、言い訳くらい聞いてあげるわよ?　何でさっき、あたしの前から逃げたのよ?」
「あの状況で逃げないのはただの馬鹿だろ……」
「この奴隷ってば、本当に口が減らないわね……！」

このままだと、またさっきのように鞭による攻撃がくる……。

そう思った一夏は、何とか話題を逸らそうと、またアレをやってしまった。

「落ち着けクレアっ！」
「何よ！」
「この角度だとギリギリパンツが見えるぞ」
「ひゃんっ!?」

この話題を出せば、必ず日和ってくれると思った。
現にまた顔を赤くして、スカートの裾を抑えながら、一夏と距離を置いていく。

「こ、ここの奴隷……っ！」
「早まるな、お前に黒はまだ早い！」
「黒なんかはいてないわよ！　白よ、白っ！　って、な、何言わせんよバカァ～～っ！」

ある意味での誘導尋問だったのだが、これがまた効果抜群だ。
クレアはその場に座り込むと、両目から溢れる涙を拭う。
しかし、両目からは次々と新しい涙が出てくる。

「ああ～！　ご、ごめんって！　ちょっとした冗談のつもりだったんだよ！もう泣くなっての……」
「うぅぅ～～……」
「その……ほんと悪かったって……。ちょっとからかおうと思ってやってしまっただけだから……」
「こ、この奴隷精霊……！　本当に消し炭になりたいようね……だいたい、何であんたがここにいるのよ」
「俺も、今日からこの学院の生徒になったからだよ」
「へぇっ？　う、嘘よ！だってあんた男じゃない！」
「嘘もなにも、お前は自分の目の前で、俺の正体を見たじゃないか

……。俺は男の精霊使い……世界でたった一人だけのな」
「嘘……本当に？」
「本当に。それに、俺は目の前の教室に、これから所属する事になるから、今ここに居たってわけだ」
「……」

今日初めて会った男が、自分たちと同じ精霊使いで、しかも同じ学院の同じクラスに編入してくるという事らしい。
ここまで来て、色々な情報が入ってきた為か、クレアも混乱しているようだ。
しかし、一夏の言った、『男の精霊使い』という単語を聞いて、ようやく我に返った。

「そ、そうよ！　あんた、私が契約するはずだった精霊、横取りしたじゃない！」

この学院に来る前に、一夏はクレアを助ける為に、古い聖剣に封印された精霊と契約した。
その事を知ったクレアが、一夏自身が、自分の契約精霊になれと言いだしたのだ。

「だけどお前、あの時俺が精霊と契約してなかったら、あのまま死んでいたんだぞ」
「っ……！」

そう……。あの時、精霊は完全に暴走していた。
そしてクレアの契約精霊であるスカーレットを、一撃で仕留めるほど強力な力を見せた。
ならば、後の展開は見えている……。

「わかったわよ……認めるわよ！　でも、それとこれとは話が違うわっ！」
「お前……」
「あたしには、どうしても強い精霊が必要だったの……。それを、あんたが奪ったんだから、責任を取るのは道理だわっ！」
（こいつ……）

あまりの言動に、さすがの一夏も頭にきた。
恩着せがましくするつもりはないのだが、ここいらでお灸を据えとくか……。

「オーケー、わかったよ。お前と契約すればいいんだな？」
「ん……？　へぇ、ようやく分かってきたようね。そうよ、私と契約しなさい」
「オーケー……じゃあ」
「へ、へぇっ？！」

一夏はクレアに近づくと、そのまま壁際まで追い込んで、ほとんど密着するのではないかというくらいにまで迫る。
おかげでクレアの顔は赤く染まり初めて、身動き一つすら出来なくなったようだ。

「精霊騎士を目指す精霊使いなら、高位の人型精霊との契約方法は知っているよな？」
「なっ、そ、それは……」
「そう……〝口づけによる契約〟　だろ？」
「っ～～～～～!!!」

顔が沸騰しそうなくらいに赤くなっているのがわかる。
ほんと、こういう類の話や行為には耐性がないらしい……。

「あいにく、俺は奴隷精霊という名で契約する事になるみたいだが、それでも俺は人型だぜ？
　なら、当然その契約方法も……」
「そ、そんな、ちゃ、ちゃんとしたやつじゃなくてもいいって言うか……」
「何だ、怖いのか？」
「こ、強くなんてないわよ！　誰が怖がってーー」
「ほう？　じゃあ、さっさと口づけしてもらうか」
「ひゃんっ!?」

一夏の右手で壁を抑え、左手でクレアの顎をクイっと持ち上げる。
そうなると必然的に顔が上がり、ちょうど一夏の顔が視界全体に映し出される。
話す機会なんて全くなかった男の顔が、今自分の目の前にあると思うと、心臓が破裂しそうなくらい、クレアはドキドキしていた。
体全体がわずかに震えているのが見えたので、一夏はここでダメ押しの一撃を放つ。

「ほら、そんなに強張ってちゃダメだろう？　もっと力を抜けよ……」
「ご、ごめん……ごめんなさい……！　あ、謝るから、その、もう……」
「なに？」
「お、お願い……！　ゆ、許しーーーー」
「もう遅えよ……」
「ひ、ひゃあぁぁ……！」

初めてを奪われる……。
そう思った瞬間に、クレアは目を閉じ、強く体を強張らせた。
それを確認した一夏は、クスッと笑い、少しずつクレアから離れる。

（まぁ、このくらいでいいだろう……）

箱入りお嬢様には、ちょっとした過ぎたお灸だったかもしれない。

だが、今後いい薬になるだろうと思い、クレアに話しかけようとした、その時だった。

「なぁ、キミ」

「っ!?」

突然背後から、別の女性に声をかけられた。

今度は女性のような高い声ではなく、もっとしっかりとした、大人の女性のような声だった。

一夏は後ろを振り向き、その声の主に視線を向けた。

「初めまして、レイヴン教室担当のフレイヤ・グランドルだ」

長い黒髪を一本に纏めて結んでおり、眼鏡をかけた、いかにも教師と思える人物。

教師らしく、レディースーツを着こなし、その上から白衣を着ている。

そんな大人なフレイヤ教諭は、訝しむ目で、一夏の事を見ていた。

「君のことは学院長から聞いているよ。学院始まって以来の男の精霊使いだそうじゃないか」

「あぁ……ええ、まぁ……。織斑　一夏です……」

「そうか、よろしくな、織斑　一夏。それで？　君はこの神聖なアレイシア精霊学院の学び舎の中で、一体何をしているのかな？　ん？」

笑いながらの問いかけだが、目が全く笑っていない……。

「あぁ……えっと……」
「……」
「その、彼女が、目にゴミが入ったって……」
「……」
「っていうのは、ダメですよね……。ごめんなさい」

フレイヤ教諭の怪訝そうな視線にやられ、一夏は即行フレイヤ教諭に謝罪し、クレアにも謝罪した。
クレアは何事かと目をパチパチとさせていたが、フレイヤ教諭に言われ、先に教室の中に入った。

「別に君の行動全てを否定するわけではないが、限度というものがあるからな？」
「は、はい……以後、気をつけます……」
「よろしい……。では君も中に入りたまえ……ＨＲを始める」
「はい……」

なんとも幸先の悪いスタートだ。
こんな状態で、今後の学院生活は無事でいられるのか、少々不安になってきた一夏であった。

「立花中学、織斑　三春です」

「はい……。では、二階に上がって、三番と書かれた部屋に入ってください」
「わかりました」

現代日本……。
三春はとうとう、試験会場へと到着した。
高校受験は、本来ならば、受験する高校で試験を受けるものなのだが、あいにくと、ＩＳ学園は国レベルで治外法権となっているのが教育機関な為、学園内に入ることはできない。
そのため、試験会場は三春が住んでいるところから電車で駅を三つ超えたところにある、多目的会場だった。
しかも、想像以上に受験者数が多かった。
まぁ、ＩＳ学園は国立校であり、今やこの世界の象徴とも言えるＩＳを扱うための学園だ。
もともとが宇宙開発の目的で、開発されたＩＳ。
だが、その目的や技術は、未だに進歩しておらず、今はスポーツとしての地位にある。
そして、そのスポーツの祭典として行われる《モンド・グロッソ》と呼ばれるＩＳの世界大会で、最強の名を得たのが、三春の姉である織斑　千冬だ。
その姉の影響もあって、ＩＳ学園の受験者は、年々増加しているらしい。

（にしても、ちょっと多くない？）

施設内に入っても、出会うのは受験者ばかり。
しかし、その数に驚いた。
人混みに酔うという言葉があるが、まさに今それだ。
見ているだけで人酔いしそうになる。

「なんでこんなに……んっ？」

あたりを見回してみる。
すると、なにやら立て看板のようなものを発見。
そこには、『藍越学園受験者』と『ＩＳ学園受験者』と書かれていた。
そして、藍越の方は、矢印が左で、ＩＳの方は右を向いている。

（なるほど、藍越学園の受験者もここにきてるってわけか……！）

そう言えば、去年か一昨年くらいにカンニング事件があったとかテレビで言ってたなぁ～と思いながら、三春は右側の通路へと進む。

（とうとう来てしまったなぁ……）

兄・一夏が失踪してから、ずっとこの時を待ち望んでいた。
世界中で捜索が行われたが、一夏の発見に至らず、世界はその捜索を諦めた。
だが、三春からしてみれば、その行動自体が許せない。
大事な家族を見捨てられて、黙っていられるはずもなかった。
だから自分が、その国家権力の一部でも得られたのなら、その捜索ができる。
そう考えた。その結果、最も近しいのは、ＩＳ操縦者になること。
国の代表まで登りつめれば、それはもう、国の顔役。
そんな人物になれば、ある程度の制約などはつくだろうが、今の自分よりは自由に動ける。

「まずはここをしっかりと越えなきゃね……！」

両手で頬を二回ほど叩いて、気合を入れ直す。
言われた教室のドアを開け、三春は空いている席に座った。
筆記用具と受験票を出し、時間ギリギリまで教科書などを見る。

その眼差しは鬼気迫るほどに、真剣なものだった。

レイヴン教室担当教諭、フレイヤに連れられて、一夏はレイヴン教室へと入った。

まるで劇場のようなつくりをした教室。

階段のように机や椅子が置いてあり、そこに生徒たちが座っていた。

なので、一番下にある教卓の前で自己紹介をしている一夏には、否応なしに様々な視線が突き刺さる。

「あれが男の精霊使い？」

「やだぁー、なんだが目つきが怖いわぁ……人とか殺してそう」

「あのクレア・ルージュをもう手篭めにしたらしいわよ」

「て、手篭めってなに？」

「わ、わからないけど、とにかくエッチなことよ！」

「ええ～、でも、なんか不良っぽくてカッコ良くない？」

「ダメよ！　男なんてみんな魔王なんだから、油断してたら、すぐ虜にされるわよ！」

「噂では、エリス・ファーレンガルトもお手つきになったらしいわ」

「ええっ!?　あの生真面目な騎士団が？　で、お手つきってなに？」

「わからないけど、と、とにかくいやらしいこと！」

（散々な言われようだな……おい……）

まぁ、男の精霊使いで彷彿とするのは、千年前に存在したと言う、破

壊と破滅をもたらした精霊使い……《魔王スライマン》だろうし、こういう反応はむしろ当然だ言えるだろう。
これはこれで仕方のないことだと割り切っていると、不意に、殺気のこもったような視線を感じた。

「消し炭消し炭消し炭消し炭消し炭消し炭消し炭消し炭消し炭ーーーー」
（おうおう……めっちゃ呪詛漏れてんぞ……。さっきのは確かに俺が悪かったけど……）

クレアだった。
先ほどからかった事を根に持っているらしい。
まぁ、なんだかんだでクレアもお嬢様なわけで、馬鹿にされれば、貴族としてのプライドが許さなかったのだろう。
だが、もう許してくれてもいいんじゃなかろうか……？

（後でもう一回、ちゃんと謝ろう……）
「燃やし燃やする燃やすればーーーー」
（……許して……くれるかなぁ……）

まぁ、どう考えても許してくれそうにはないな……。
そんな事を考えていると、教卓をトントンと二回叩く音が聞こえる。
担当のフレイヤ教諭が、手に持っていた冊子で、教卓を叩いたのだ。

「あー、囀るな静かにしろ……。単位減らすぞ、貴様ら」

何気に冷酷だな、この人。

「ほら、お前もとっとと自己紹介をしろ」
「あ、はい……」

やる気があるのかないのかわからないが、とりあえず、ここは穏便に自己紹介をして、少しでもクラスメイトに打ち解けなければ……。

「ええっと、織斑　一夏って言います。歳は１６歳……。男の精霊使いではあるんだけど、どうか怖がらずに、普通に接してくれると、嬉しいかな」

無難にやったつもりだったのだが、思いの外クラスメイトたちは静まり返った。

キョトンとした表情のまま、一夏の事を見ている。

「なんか、ふつー」

「うん、ふつーね」

「ふつーだわ……！」

「全然魔王っぽくないね」

（あれ？）

「でも、なんかキュンと来ちゃったよね♪」

「あ～わかる～。ツンツンしてて、なんかこう、保護してあげたくなる感じ？」

「捨てられた子犬的な？」

「それだっ！」

（なんだ……？　この甘くふわふわしたような感じは……）

思った以上に普通の反応だった。

というより、もっと非難されるのでないかと不安になっていたのだが……。

そう思っていた時、フレイヤ教諭が、一夏の耳元で囁いた。

「ここにいるお嬢様達はな、一般市民に比べて感覚が少しずれて

いるんだ……。何しろ人間にとって最も不可解な隣人である精霊と、いつも触れ合ってるからな。
　ま、お前が精霊使い云々という前に、同世代の男との触れ合いに、興味津々なのさ」
「な、なるほど……」

そう言うことなら、少しは気兼ねなく接していけるかもしれない。

「あ、あの……一夏……君？」
「ん？」
「えっと、す、好きな食べ物ってなに？」
「え？　好きな食べ物？　まぁ、特に好き嫌いはないけど……強いて言うなら、グラタンかな？」
「ふつーよ！　ふつーだわ！」
「女体盛りとか答えるかと思った！」
「可愛い！」
（普通……でいいんだよな？　っていうか、普通女体盛りとか答えねぇだろ……！）

というよりも、何故女体盛りなどという言葉を知っているのだろうか……？
いや、一応健全な女子である為に、そういう知識くらいは知りたいという好奇心があるのかもしれないな。
そのあとも、いろいろと質問が飛んでくる。

「どこの出身なのっ!?」
「ス、スリーサイズは？」
「お風呂に入る時、どこから、あ、洗うの？」

もう既に一夏の体の事についての質問に変わっていた。
最後の質問をした子なんか、顔を真っ赤にしながら質問してくるし

……。

なんだか、質問されてるこっちが恥ずかしくなってきた。

「一夏君、チームはもう決まったの？」

「え、チーム？」

「決まってるでしょ、今回開催される精霊剣舞祭のチームよ」

「ああ～」

毎回、精霊剣舞祭の開催日と、その対戦方式は精霊王が決める。

過去の例を見てみると、１５年前の『無差別戦闘』……つまり、バトルロワイヤルというものと、３年前は『個人戦トーナメント』だった。

そして今回が『チーム戦』。五人一組のチームを作って戦う戦闘方式だ。

「ああ～えっと、まだ見つかっていないけど、これから探す予定かな」

「じゃ、じゃあっ、あの誰も手懐けられなかった封印精霊と契約したって噂は本当なのっ!?」

「えっ？」

何故そんな事を彼女達が知っているのだろう……？

それは今朝起こったことで、まだ誰も知らないはずなのに……。

だが、そんな疑問にも、即行で答えてくれる人物が現れた。

「そうよ！　そして、その精霊を手懐けた一夏を手懐けているのが、このあたしっ！」

「やっぱり、お前だったのか！」

いきなり立ち上がり、精一杯体を沿って、無い胸を主張するクレア。

わざわざ言わなくてもいいことを言いふらしたらしい……。

そんなクレアの言葉に、クラス内は黄色い悲鳴が飛び交った。

「ねぇねぇ、クレアと一夏君って、どういう関係なの？」

「ご主人様と奴隷精霊っていう関係よ！」

「「「きゃあああ～～～～ッ!!!!」」」

「嘘つくなっ！　俺はお前の奴隷にも精霊にもなった覚えはねぇよ！」

「なによ、ご主人様に楯突く気なの？」

とうとうこの事まで言ってしまった。

全く、どこまで我儘なお嬢様なのだろうか……。

しかし、そんなクラスメイト達を見ていたフレイヤ教諭が、再び冊子で教卓を叩く。

「静かにしろ。まったく……ほら、お前もとっとと好きな席に座れ」

「は、はい……」

そう言われて、一夏は急いで席に座ろうとするのだが、問題は場所だ。

まず間違いなく火猫お嬢様の隣はやばい。

あとは、どの席にもクラスメイトが座っているので、どこかで相席させてもらうことになる。

なので、一夏はクレアから離れるように、遠い席へと行こうとしたのだが……。

ヒュウーーーー！

「っ！」

風切って、何か来る音がした。

咄嗟に反応して、右手で庇ったのだが、右手もろとも首に黒い鞭が絡みついた。

「どこに行くのよ。あんたはあたしの隣の席っ！」
「誰が行くか！　そんな危険な席に！」
「ほんっと、躾のなっていない奴隷ね！」
「もはや精霊ですらなくなってるだろうがっ！」

なんとしてもクレアから逃れたい一夏は、そのまま後ろの席の方へと向かうが、クレアが巧みに鞭を操って縛り上げる。
わずかに右手を挟んだため、窒息はしないが、それでも息苦しい。
この状態が、まだ続くかと思った矢先、突然鞭による拘束が解けた。
勢い余って、目の前の階段に倒れそうになるが、それをなんとか堪えて、一夏は後ろを振り返った。
すると、教室の床に、妙なものが突き刺さっていた。

「氷の矢……？　氷の精霊魔装か……！」

矢の刺さり方からして、撃たれたのは上方。
しかし、一夏が視線を向けるよりも速く、クレアの方が口を開いた。

「どういうつもり？　リンスレット・ローレンフロスト……っ！」
「ん？」

クレアの視線の先……教室の階段最上部の方から、蒼い長弓を手にした少女が降りてくる。
綺麗な金色の長髪が、毛先の方でクルクルとカールをまいており、優雅さと気品さを持ったような顔立ちと出で立ち。
これこそ、まさに貴族のお嬢様と呼べるくらいの人物だった。

「おやめなさい……はしたないですわよ、クレア・ルージュ」

「はぁ？　なんであんたにそんな事を言われなきゃいけないのよ！」
「諦めなさいな、彼はわたくしの隣の席に座りたいと言っているのです」
「そんな事、一言も言ってないんだが……まぁ、助かったよ、ありがとう」

降りてくるリンスレットに、一夏は素直に礼を述べた。
だか、リンスレットは一夏に近づいて、至近距離で顔をマジマジと見つめる。
それはもう、何かを見定めるように物色しているようにだ。

「うーん……顔はまぁまぁですわね……」
「えっと、あの……」
「あなた」
「はい？」
「わたくしの下僕にならない？」
「……はぁ？」

聞き間違い……ではなさそうだ。
だがしかし、急に下僕になれとは……。
クレアは『奴隷』、リンスレットは『下僕』ときた。
もう言い方の問題であって、ほとんど条件に変わりはないようだが……。

「ちょっと！　あたしの奴隷に手を出さないでよね！」
「誰が奴隷だっ！」

リンスレットの発言に我慢できなかったのか、クレアが必死に一夏の右腕を掴む。

だが今度は……。

「あら？　別にあなたの所有物というわけではないのでしょう？」

「もう、なんなのよっ！　離れなさいよ！」

「あなたこそ！　目障りですわっ！」

「お、おい……っ！」

もはや掴むだけではダメだと思ったのか、クレアとリンスレット、二人同時に一夏の左右の腕を強引に組む。

しかし、そのせいで、一夏の左右の腕には、体感したことのない感触が……。

（くっ……！　クレアのは小さいくせに、なんだか微妙に柔らかい……！　だがっ、リンスレットのは、もっと……っ～～！）

ぷにぷに、ぷよぷよの感触が、両肘あたりで感じられる。

彼女たちが男に対しての耐性がないのと同じように、一夏も女に対する耐性は低い方だ。

今まで感じたことがなかった感触に、心臓の鼓動が速まる。

（ヤ、ヤバイ……！　心臓が張り裂けそうだっ～～～！！！！）

いつまでこの状態が続くのだろう……。

そう思っていたときだ。

「お、お嬢様！　おやめください、編入生さんが困っていますよ！」

「は？」

また新たなる女性の声。
視線を再び上に向けると、リンスレットが座っていた席から、一人の女の子が走ってきた。
それも、メイド服をきた着た女の子が、だ。

「メイドっ!? なんで、ここにメイドがいるんだっ!?」

ここはお嬢様学校のはず……。なのに、何故メイドさんがここにいるのだろう。
だが、お嬢様と呼び、リンスレットと同じ机に座っていたあたり、リンスレットのメイドなのだろう。
一夏は、このメイドさんの行動を、心から支持した。
きっと彼女ならばらこの状況を打開してくれるに違いない……と。
しかし、そんな期待は、呆気なく砕かれることになるのだが……。

「お嬢様、そろそろお席につかないと、また先生に……あっ!」

言葉が途中で止められた。
それは何故か……。階段を降りてくる途中で、見事に足を滑らせたからだ。

(ああ〜〜……またこの流れ行っちゃう?)

リンスレットのメイドが、まっすぐこちらに向かって落ちてきた。
当然、腕を掴まれているため、逃げることができず、一夏めがけてメイドがそのまま倒れこんできた。

「ぐおおおおおっ!!!!!???」

階段のほぼ最上階から一番下まで転落した。
背中などを強打し、呻いていたところに、上からさらに何かが覆い

かぶさってくる。

（んんっ?!　な、なんだ、この妙に柔らかい感触……！）

「きゃああっ!?　ご、ごめんなさいいいっ！」

「うおおっ?!　バカッ、動くなっ!?」

上から覆いかぶさってきた感触……それは、落ちてきたメイドの豊満な胸だった。

しかも、メイドもメイドで男に対する耐性がないのか、一夏から離れようと必死なのだが、なんせお転婆なものゆえ、立ち上がるどころか再びスカートの裾を踏んで転んできた。

「むううっ!?」

「ひゃあぁぁっ!!?」

「あ、あああ、あんたっ！　何してんのよ、この変態っ！」

「なっ!?　待てよ、どうみたって俺悪くないだろうっ!?」

「うるさいっ！　そこに直りなさい、この淫獣っ!!」

スパァン！　っと、鞭が床を叩く。

そして、クレアの言葉に便乗してから、クラスメイト達も悲鳴をあげていた。

「きゃあああっ!!　淫獣よ、淫獣ッ！」

「やっぱり魔王だわっ！」

「気をつけて、私たちもあんな風にされるわよ！」

「するかっ!!　どうみても今のは事故だろうが！」

慌てて否定するも、時すでに遅し。

そして背後には、怒り心頭の火猫のお嬢さんと、その後ろで赤い顔をしてメイドを守ろうと抱きしめる氷のお嬢さんが……。

「この奴隷ッ！　いいからそこに直りなさい！」
「だああっ、もう！　だから俺はーーーー」
「うるさいっ！　消し炭なりなさーーーーいっ!!!!!」
「ぐあああっ!!?」

容赦のない一撃が、再び見舞われた。
その様子を、フレイヤ教諭はため息をついて、見守っていただけだった……。

「これにて、筆記試験の方は終了となります。続いて、実際にＩＳを装着しての起動試験を行いますので、皆さんは屋内競技場へと集合してください」

試験官の言葉に従い、三春は、他の受験者たちと共に階段を降りて、一階にある屋内競技場へと向かった。
正直言うと、五教科のテストは自信があった。
もともと勉強は出来ていた方だし、入念な試験準備のおかげで、高得点を取れた自信がある。
あとは、この起動試験を難なくクリアできれば、なんの障害もなくなる。
（まぁ、楽勝でクリアできる可能性の方が高いけどね……）

事前に行っていた簡易適正テストでは、『A』判定を示していたため、問題なくパスできるはず。
その後、試験官の指示に従い、ＩＳ学園の受験者達は屋内競技場に集まった。
そこで、ＩＳ学園の教師達が監視する中で、五つあるＩＳを、一人ずつ乗り、起動させるというものだった。
そして、高判定を出したものは、また別の会場で、実戦形式での戦闘試験もあるらしい。

（戦闘試験……ふふっ、そういうの大好き……！）

日頃から剣の修行をやっているためか、少々血の気が多いのが玉に瑕だと、姉である千冬に言われたことがある。
だが実際に、剣術勝負は楽しいし、それが強い者との勝負ならば尚のこと嬉しい。
そんな事ばっかり考えていると、いつもの間にか、三春の番になっていた。

「織斑　三春さん？　急いで装着してもらってもいいですか？」
「あっ、はい！」

検査官に促されて、慌てて三春はＩＳを間近に、呼吸を整え、その手に触れてみた。
するとどうだろう……触れただけで、純日本産の量産型第二世代ＩＳ『打鉄』から、とてつもない光が吹き荒れた。

「っ!?」
「こ、これはっ……!!?」

検査官の女性も、この現象に驚いているようだった。

そして三春の頭の中に、『打鉄』から送られる大量の情報があった。

「くっ……！　こら、そんなにっ…暴れちゃ、ダメでしょ……！」

大容量の情報が一気に送られたからか、三春は少し体勢を崩した。だが、ＩＳに触れる手を退けることはなく、しっかりとＩＳに触れて離さない。

「ゆっくりで、いいからっ、落ち着きなさい……ッ!!!!」

ただの機械鎧であるＩＳに、言葉を投げかける三春の姿は、他の者達から見たら、何を血迷ったのだろうと思われるかもしれない。

だが、その三春の言葉に反応したかのように、ＩＳの光の奔流が収まり、気がついた時には、三春の体にしっかりと装着されていた。

「そ、そんなっ……いつの間に……っ!?」

「あの子、いつＩＳに乗ったのっ?!」

「いや、そもそも触ってただけじゃん……！」

周りからは驚きの声が聞こえた。

それは三春も同じようで、ＩＳを装着した自分の姿に驚いていた。

「……なるほどねぇ～……ＩＳに乗るって、こういうことなのか……！」

何かに得心したように、三春は頷き、そのまま飛行してみた。

あいにくとＩＳを自由に飛び回させることができない空間なため、あまり高速飛行はできないのだが、それでも十分に飛んでいる感覚を得た。

「凄い……っ！　これが、ＩＳで飛んでいる景色なんだ……！」

兄や探すために、その為だけに、ＩＳに触れて、ＩＳを使いこなそうと思っていた。
だが、この快感……この感触を覚えてしまったら……。

「もっと、もっとこの子と、飛んでみたいなぁ……！」

改めて広がった三春の世界。
ＩＳという相棒の存在に、思いの外心が躍っている感覚だ。
そんな様子を、会場にいた受験者、教員達がしっかりと目にしていた。
そして、三春の検査の担当をしていた検査官が、自身の目の前にある測定器を見て、仰天した。
なぜならそれは……

織斑　三春ーーーーＩＳ適性値　稼働時測定ランク　『Ｓ』

第４話　猫と狼と騎士

「はぁあ……ひどい目にあった……」

学院への編入が済んだ日の夜。
一夏は用意されていた宿舎の中に入った。
まぁ、宿舎といっても、簡易的に作られた掘っ建て小屋なのだが……。
だが、意外と中はしっかりと作られていた為、そこはエリスの生真面目さに感謝しなくてはならないかもしれない。

「まぁ、家畜臭いっていうのが難点なんだが……」

隣は馬小屋な為、どうして家畜の臭いが凄い。
これは慣れるしかないと思いつつも、この学院での扱いがひどい事には変わりない。
一夏は考えることをやめて、藁葺きのベットに横になった。
一応は藁のフカフカさが生きている為、寝心地は悪くない。

「にしても、たった二ヶ月で昔の感を取り戻せとはな……随分と無茶言ってくれるぜ、あの婆さん」

今日、このアレイシア精霊学院への編入を言い出した張本人である、グレイワース・シェルマイスから、一夏はある情報を得た。

ーーーー《最強の剣舞姫》が戻ってきて、少女の姿をした闇精霊を連れていた。

《最強の剣舞姫》……それが意味する名を冠する精霊使いは、この世にたった一人だけだ。
三年前の精霊剣舞祭の時、まるで彗星の如く現れた、無所属の１３

歳の少女。
闇属性の精霊を使役し、その精霊魔装である漆黒の魔剣を振るい、圧倒的強さで世界を魅了した人物。
その名は、レン・アッシュベル。
だが彼女は、精霊剣舞祭が終了したのとほぼ同時に、忽然と消えてしまった……。
そんな彼女が、再び戻ってきたと言う……。
しかも、一夏の探し人と共にいるというのだ。

「くそっ……どの道、他に手がかりなんて無かったし、ちょっと癪だが、魔女の話に乗せられてやるか」

本当はグレイワースの言葉に踊らされているのではないかとも思ったのだが、魔女は真実を口にしない代わりに、絶対に嘘はつかない。
故に、本当である可能性が高いわけだ。
ならば、早く代表メンバーになってくれる生徒……つまり、五人一組のチーム戦を行う為の、メンバーを集めなければならない。
だが、今日起こった出来事のせいで、その行為自体がら難しくなった。
不可抗力とはいえ、女性に押しつぶされてしまい、クラスメイトたちには警戒され、はたまた勝手に奴隷精霊扱いするクレアからは鞭による暴行までもらった……。
もはや、五人どころか一人を集めるのも至難の技になりつつある。
そして、最後に大暴れしたクレアは、担当であるフレイヤ教諭によって説教されて、今は説教部屋で反省文でも書かされているのかもしれない……。

「はぁ～……これからどうしろってんだよ……」

ぎゅうううう～～……。

「……くそぉ～～……腹減ったなあ……」

そう言えば、今朝から何も食べてないのを思いました。
いや、一応昼は何か口に入れようと思った。
しかし、肝心の食堂に行き、メニューを見た瞬間に、一夏の目は飛び出そうになった。

「なんだよあの金額……っ、0の桁がおかしいだろ……スープ一杯が平民の1日分の平均賃金っておかしくない？」

だがまあ、このアレイシア精霊学院がお嬢様たちが集まる乙女の花園である限り、これくらいが当然なのだろう。
あいにく、一夏には全くわからない世界ではあるが……。

「うーん……明日はエリスに学院都市を案内してもらおうかな。いずれ生活していくなら見ておかなきゃいけなくなるし……」

そしてそこで安い食材などを買い込めば、数日、いや、一週間は堅い。
それに久々にまともな料理というものをしたいと思っていたところだ。
いつもいつも焼き魚や焼いた肉なんかを食べていた為、少しは揚げ物やパスタなんかも食べたい。

「パスタか……うーん、ベーコンとキノコのトマトスパ。トマトは缶詰でいいとして、パスタと残りの食材は……」

ぎゅうううう～～～～!!!!

「くそぉ～～……余計に腹が減ってきたぁ～～」

もう食べ物のことは忘れて、すぐにでも眠ろうと藁にうつ伏せになった、その時だった。

「クンクン……この匂いは……っ！」

微かに香ってくる匂いに、一夏の鼻が反応した。
ほのかな香り、食欲をそそるような、それでいてスパイスの香りも強い……。

「なんだ……？」

匂いの発する方を辿って行ってみる。
どうやら、小屋の入口の方から匂ってくるみたいだ。
一夏は恐る恐るドアをスライドさせて、外を確認する。
すると、摩訶不思議な光景がそこにあった。

「……は？」

何もない地面に、たったひと皿のスープ。
それもとても高そうな皿に入ったスープだ。
鶏肉の手羽元部分を使って、香ばしい焼き目とスパイスの香る『鶏肉と野菜のスープ』。

「なんだこれ……！　幻覚……か？　もしかして、とうとう俺にも天の御恵みが来たってことか……っ!?」

まぁ、それが何であれ、貰っておけるのなら貰っておいて損はあるまい。
一夏はゆっくりとスープの乗った皿に手を伸ばし、それを一掴みしようとした時……。

ヒョイ。

「あれ？」

ヒョイ。

「……」

何故だろう。皿の方から一夏の手を逃れるように動く。
これはよくあるイタズラなのではないか……そう思った一夏は、すぐに視線を上にあげた。

「ふっふっふ……どうやらお腹が空いているようですわね、織斑一夏？」

そこにいたのは、先ほどクレアと共に一夏を奪い合い、騒動を起こした要因にもなった人物の一人。
綺麗な長い金髪を優雅に掻き上げて、這いつくばる一夏を堂々と見下ろしている一夏のクラスメイト。
リンスレット・ローレンフロストの姿がそこにあった。

「……何の用だ？」
「ふふっ……そんな態度を取っていいんですの？」
「どういう意味だ？」
「だってあなた、お腹が空いているのでしょう？」
「ああ」

一夏は素直に頷いた。

「ならば、『ワンっ』と鳴いてわたくしの下僕になると誓えば、このスープをさしあげますわ」

得意げに胸を反らしてみるリンスレット。

ならば、一夏の答えは……

「じゃあ、いいや。バイバイ」

「あっ！　ちょ、ちょっとお待ちなさいっ！」

閉めたドアをドンドンダンダンと蹴りつける音がする。

一夏はため息を一つついて、再びドアを開けた。

「なんだよ……スープくれるのか？」

「ええ。わたくしの足を舐めさえすれば……あっ、だからなんでドアを閉めるんですのっ！」

再びドアを閉めようと思った瞬間に、リンスレットは自分の足を割り込ませて、強引に開こうとする。

「ええいっ、お前は借金取りかっ!?」

「わたくしの慈悲を無下にするなんて……っ！」

「何が慈悲だよ……っ！」

「っ、い、痛いっ～！」

「だあぁぁ～、もう！　足入れるからだよ」

痛がっているので、一夏はドアを開けた。

後ろから付いてきていたメイド……後で名前を聞いたが、『キャロル』という名前らしいが……。

そのキャロルがリンスレットの元へと走ってくる。

「だ、大丈夫ですか、お嬢様っ!?」

「ううっ～～」

リンスレットは相当痛かったのか、若干涙目でこちらを睨みつけてきた。

「わたくしの慈悲の手を拒むだなんて……っ！　なんで無礼な男ですのっ!?」

「どこに慈愛が入っていたんだよ……」

ここのお嬢様たちはみんなこんなのしかいないのかと思うと、少しばかり落胆してしまう。

まぁ、人間よりも精霊と一緒にいる機会の方が長いから、そういうのに疎いのはわかるが、少しどころか結構感覚がズレているように見える。

「って、あなた……」

「うん？」

「な、なぜ、馬小屋で寝泊まりしているんですの？」

若干引きつったような顔で見てくるリンスレット。

さすがに貴族のお嬢様には、このような場所で寝泊まりするのは考えられないのだろうか……？

「馬小屋はあっちだ。それで、ここが俺の宿舎なの。ほれ、意外と住めば都だぜ？」

「……」

「いや、そんな可哀想なものを見る目はやめてくれよ……なんだか悲しくなってくるじゃんか」

憐れみ……も含まれているだろうな、これ。

リンスレットはため息をこぼし、呆れたように一夏を見る。

「全く、こんなところで寝泊まりなんてせずに、わたくしの部屋にきなさいな。
その代わり、あなたはわたくしの下僕になるんですのよ」
「素敵ですねぇ～。メイド服なんて着せたら、きっとお似合いですよ～！」
（なるわけないじゃん……。っていうか、この子も結構ひどい事言うな）

天然が入っているのか、はたまたわざとなのかはわからないが、キャロルの発言に一夏は耳を疑ってしまう。
だがまぁ、確かに、ここで彼女のいいなりになれば、食事と寝床は確保できる……。
だが……。

「悪いが、お断りさせてもらうよ。プライドまでは捨てる気になれない」
「ふんっ、後々後悔しても知りませんわよ」

さっ、と振り返るリンスレット。
しかし、その手に持っていたスープだけは、一夏の前に置いていく。

「えっ？」
「せっかくキャロルが作ってくれたのに、余らせるのはもったいないと思いましたので」
（ん？……もしかして）

一夏はリンスレットの行動に不審を感じたのだが、もしも、一夏の考えが正しかったのならば……。

「なぁ、リンスレット」

「っ!?　な、ななんですのっ!?　いきなり名前で呼び捨てなんてっ……！」
「お前、本当は心配して来てくれたんだろ？」
「うっ……そ、そんなんじゃありませんわっ！　わたくしは、あなたをわたくしの下僕にするために来たんですのよ！」

顔を真っ赤にして、真っ向から否定するリンスレット。
しかし、その後ろではメイドのキャロルがクスクスと笑っている。
下僕にするかどうかはともかくとして、本当は心配して来てくれたんだろう。

「べ、別にわたくし、あなたのことなんて全然心配はーーーー」
「ありがとう、リンスレット」
「っ～～!!!!」
「なぁ、リンスレット」
「な、な、な、なんですの……」

完全に茹でダコのように顔を赤くしてしまっている。
とりわけ何かをやったわけではないのだが……。

「俺、お前の下僕にはなれないど、友達にならなりたいな」
「へっ？」
「いや、ここじゃあ俺はよそ者だからさ、何か分からないことと
か、困ったことになったら、相談出来るような相手が欲しくってさ
……。
　だから下僕は無理だけど、友達としてなら、俺は大歓迎だぜ？」
「な、なな……っ！」

やはり男に対する免疫がないのか、ちょっとやそっとの言葉で顔を赤くしてしまう。
これはこれで面白い……。

「ま、まぁ？　あなたの方からわたくしにお願いするというのであれば？　わたくしとしては問題ありませんわよ？」
「ああ、それでいいよ。これからよろしくな、リンスレット」
「え、ええ。よろしくですわ……」

照れた表情を隠すように、リンスレットは一夏に背を向けた。

「リンスレット・ローレンフロストッ！」

と、そこにもう聞き慣れたあの声が聞こえてきた。
一夏は内心、「あー、またややこしいのが来たなぁ～」と思いながら、声の主の方へと視線を向けた。
焔のような紅いツインテールをなびかせて、クレアはこちらに向かって走ってくる。
どうやら、フレイヤ教諭の説教は終わったらしい。

「あたしの奴隷精霊を勝手に餌付けするなっ！　この泥棒犬っ！」
「なっ!?　ど、泥棒犬ですってぇっ?!」
（まぁーた始めやがった……）

ため息をつきながら、一夏は二人のやりとりを傍観する。

「なによ、あんたの家の家紋は犬じゃない」
「なっーーローレンフロスト家の家紋は犬でなく、誇り高き白狼ですわっ‼?」
「白狼？　チワワにでも変えた方がいいんじゃない？」
「っ！」

そんなクレアの挑発に、リンスレットが受けて立った。

「クレア・ルージュ……っ、本気でわたくしを怒らせましたわね……！」

低い声で唸ったリンスレット。

その声に反応してか、周りに霜が降り始め、あたりの気温が一気に下がり始めた。

「お、おい、まさか精霊をーーっ」

クレアの時は空気が変わり、灼熱が吹き荒れたが、リンスレットの使う精霊は氷の属性。

ゆえに、大気は凍え、地面は少しばかり凍てつく。

「凍てつく氷牙の獣よ、冷徹なる森の狩人よ！　いまこそ血の契約に従い、我が下に馳せ参じ給え！」

リンスレットが召喚式を唱えると、あたりに激しい氷の嵐が吹き荒れる。

そして、その中から現れたのは、白銀の毛皮を纏った美しい白狼が一匹。

「あれは……」

「リンスレットお嬢様の契約精霊ーー魔氷精霊《フェンリル》ですわ」

キャロルがにっこりと笑いながらそういった。

白狼……フェンリルから漂う雰囲気は、そんじょそこらの低位精霊とは違う。おそらくは中位……Bランク精霊と見て間違いだろう。

「ふん、相変わらず毛並みだけは立派な犬ね」

「なっ!?　ま、また犬と言いましまわね、この残念胸っ！　ローレンフロスト家の侮辱は、絶対に許しませんわっ！」
「誰が残念胸よ！　スカーレット、行きなさいっ！」

クレアも負けじと応戦する。
炎の猫と、氷の狼が激突する。
相反する二つの属性を持った二体の精霊同士、どちらも優れた精霊であるのだが、若干クレアのスカーレットが押され気味だ。
（まぁ、今朝の剣精霊との戦いで、だいぶ消耗しているだろうしな……それでもこれだけの力を持っているなんて……）

スカーレットとフェンリルがぶつかり合うたびに、激しい衝撃が襲う。

「今日こそは叩き潰してあげますわ！　そもそも、毎回毎回あなたは目障りなんですわっ！」
「それはどっちがよ！　毎回毎回あたしに突っかかってくるのはあんたの方でしょうっ！」

もはや勝負や決闘というよりも、ただの喧嘩にしか見えない。

「うふふっ、お二人とも仲がよろしいですわね」
「それは皮肉なのか？」

一夏の隣で微笑むキャロル。
これが仲がいいと言えるのだろうか？

「お二人は、小さい頃からこんな感じですよ？」
「あいつらは、昔からこんな事やってたのか……」

呆れてものも言えない……。
一夏がため息をついたその時、なにやら変な匂いがした。
そして、なぜかパチパチと何かが弾けているような音も……。
「なんだ？　なんか焦臭ーーーー」
後ろを振り向いた瞬間、一夏の顔が絶望に染まった。
「あああああああぁぁぁぁっーーーー!!!!?　俺の家がぁぁぁぁぁぁッ!!!!?」
豪快に燃えている……一夏がこれから住むはずだった掘っ建て小屋が……。
「スカーレットの火が移ってんじゃやねぇかぁぁぁぁッ！」
「ちょ、リンスレット、ストップストップッ！　火事よ、火事！」
「ふっ、そんなことでこのわたくしを油断させようなどと……って、あらまぁ、本当ですわね」
パチパチと燃えている掘っ建て小屋の入り口付近に倒れていた剣を、一夏は急いで回収し、今度は火を消すための水を探す。
「おいっ！　なんとかしろよ！　お前が燃やしたんだろう！」
「し、知らないわよ！　あたし水なんて出せないし!?」
「仕方がありませんわね」
そう言って、優雅なステップを踏んで、リンスレットは一歩前に出た。
そして、右手をパチッと鳴らすと、フェンリルの姿が虚空へと消え、リンスレットの左手に、蒼い長弓となって現れた。
今朝にも見せてもらった氷の精霊魔装だ。

「凍てつく氷牙よ、穿て！《魔氷の矢弾（フリージング・アロー）》ッ！」

氷の矢が生成されて、それを放つリンスレット。

氷の矢弾は高速で飛翔しながら、細かい無数の氷柱状に変形し、燃え盛る一夏の宿舎に命中した。

「うおっ!?」

「ふっ……まぁ、ざっとこんなものですわ」

ふあさっ、と髪をかきあげながら、誇らしげに言うリンスレット。

しかし一夏は両膝を着いて落胆し、クレアにいたっては呆れた様な表情でリンスレットを見ていた。

「なにが『ざっとこんなもの』よ……。あんた、力の加減も出来ないわけ？」

「ん……？」

クレアに言われて、改めてリンスレットは目の前の光景を確認した。

確かに火は消えた。

しかし、それと同時に、一夏の宿舎までも全壊させてしまったのだ。

「お……俺の、家が……」

木っ端微塵になった家を前に落ち込む一夏。

その後ろでは、今でもクレアとリンスレットの喧騒な声が聞こえる。

あまりの仕打ちにとうとう何か言ってやろうかと思ったその時だった……。

「何を騒いでいるんだ、お前たちはっ!!」

こちらに向けて放たれた鋭い声。

この声にも、聞き覚えがあった。

凛々しくも可愛らしさが残るアルトボイス。

青い長髪をポニーテールで括り、伝統である騎士団の甲冑を身につけた少女が、軽快な足取りでこちらに向かってきた。

《風王騎士団》団長のエリス・ファーレンガルトだ。

「お前たち、学院内での決闘は禁じて……な、ななっ!?」

決闘の仲裁に入るのは昔からあったが、今エリスは目の前の状況に絶句していた。

自分が作ったはずの掘っ建て小屋が、見るも無残に破壊されていたからだ。

焼け焦げたような臭いと、木っ端微塵になった掘っ建て小屋の残骸……その周りを覆い尽くす水。

何がどうしてこうなったのかと、問いただしたい所だったが、その掘っ建て小屋の前で両膝をついていた一夏に視線がついた。

「き、きき貴様ぁぁぁぁぁッ!」

「うおっ!?」

腰に下げていた剣を抜き、思いっきり一夏に斬りかかる。

一夏も咄嗟に手に持っていた直刀を抜き、エリスの斬撃を止める。

「ちょっ、なんでっ?!」

「これはどういう事だ! せっかく私が作ってやったというのにっ……! これはあれか? 私に対する抗議なのか? そうなのだなっ!?」

「落ち着けよ！　掘っ建て小屋の出来は意外に良かったから文句なんてなかったよ!?　それよりも、これ壊したの俺じゃないしッ！」
「な、なに……？」

一夏の言葉に、エリスは首を捻った。
では一体誰が……？
そんなエリスの疑問に、後ろに控えていた二人のお嬢様方が答えてくれた。

「このバカ犬が吹っ飛ばしたのよ」
「先に燃やしたのはこの残念胸ですわ」
「なによっ、残念胸ってッ！」
「あなたこそ！　バカ犬とは聞き捨てなりませんわねッ！」
「また貴様らか……レイヴンの問題児」

クレアとリンスレットの態度に、エリスはため息をついた。
しかし今度は二人がエリスに対して不機嫌な視線を送る。

「〝また〟　とはご挨拶ですわね、騎士団長」
「〝また〟　だろう？　全く、君たちはいつもいつも問題を起こしてくれるな」

本当に迷惑していると言わんばかりに、エリスは頭を抑えて苦渋の顔をする。
まぁ、確かに……。
すでにクレアとリンスレットという問題児が二人いるわけで、その他にもレイヴン教室の面々は、いろいろと問題児が多いとエリス自身が言っていた……。

「団長〜！」
「ここにいましたかっ！」

「遅いぞ、ラッカ、レイシア」

と、エリスの後方から、新たに二人の騎士団員がやってくる。
長い髪を三つ編みに結った少女と、活発そうな雰囲気を持つ短髪の少女の二人。
三つ編みの方が『レイシア』で、短髪の方が『ラッカ』というらしい。

「あっ！　レイヴンの問題児！」
「火猫のクレアと、氷魔のリンスレット！」

キッ、とクレアとリンスレットを睨みつける団員の二人。
どうやらエリスだけではなく、他の団員にも目をつけられているらしい。

「あんたが男の精霊使いかい？」
「ん？　あぁ、そうだ」
「へェ～」

一夏の事が気になったのか、ラッカとレイシアは一夏に近づく。

「男の精霊使いなんて初めて見たけど、中々いい顔してるじゃない」
「団長から聞いてはいたけど、本当にいるんだな……」
「ちょっと！　そいつはあたしの奴隷よっ、勝手に近づかないで！」
「いいえ、わたくしの下僕でしてよ」

と、今度はクレアとリンスレットが絡んでくる。
リンスレットには先ほど下僕にはならないと言ったばかりなのだが……。

「あらあら……誰ともチームを組んでもらえなかったからって、今度は男を誑かしに来たわけね。
さすが、辺境の田舎貴族は、やる事がせこいわね」
「なんですって……？」
「ふんっ、火猫の方なんて、貴族どころか　〝反逆者の妹〟　じゃないかっ。なんでこんな奴が学院にいるんだよ……」
（反逆者の妹……？　どういう事だ？）

この学院にいるのは、由緒正しい貴族のお嬢様たちばかり。
クレアの名前は偽名であるというのはわかるが、貴族どころか反逆者の妹と来ては……

スパァーーーン!!!
!!

だが、そんな思考も、クレアの鳴らした鞭の音によってかき消されてしまう。

「黙りなさいっ……消し炭にするわよ……ッ！」
「「っっ……!!」」

燃え盛る煉獄の炎のような目をしていた。
それがただ単に睨みつけているわけではないと、一夏は瞬時に理解した。
あれは、本当に殺意を持った者の目だった。

「お前たち、もうやめろ。さすがに言いすぎだ……。だが、この事は学院に報告しなくてはならない。我々も忙しいのでな、もうこれ以上暴れまわるのはやめておけよ……」

騎士団長として、エリスはラッカとレイシアの二人を止める。

このまま穏便に済ませれる……そう思ったのもつかの間だった。

「あら？　逃げるの？」

「……クレア・ルージュ。いま、なんと言った？」

その場を立ち去ろうするエリスに、クレアが突然後ろから殴りつけるような言葉で挑発する。

「あら～？聞こえなかった？　騎士団も案外拍子抜けなのねって言ったのよ」

「……騎士団への侮辱は、さすがに見過ごす事は出来んぞ？」

「上等じゃない……！　あたしはもとよりそのつもりよ……。あたしの事は、どんなに蔑んだって構わない。

でも、姉様の事を悪く言う奴は、絶対許せないわっ……！」

クレアはキッと表情を強くし、エリスたち騎士団に対して、右手人差し指を突き出した。

「決闘よっ、エリス・ファーレンガルトっ！　そこの二人もね！」

「ほうっ？」

「わたくしもその意見には賛成ですわ、クレア・ルージュ」

「リンスレット……」

「ローレンフロスト家への侮辱は、わたくしに取っても不愉快極まりないものですので……。

それに、『ローレンフロスト家の名を愚弄した者には復讐の牙を』……我が家の家訓ですの」

クレア、リンスレットがともに騎士団へ決闘を申し込んだ形になった。

ここまでされては、さすがのエリスも我慢できなかったようだ。

「ここで決闘を受けずに、逃げたと思われては、騎士団の名折れ……。

いいだろうっ！　その決闘、受けて立ってやる！　さすがにここ最近の君たちの行いには、目に余るものがあると思っていたところだ……っ！」

「あらそう。あたしだって、騎士団の横暴には嫌気がさしていたところよ……っ！」

「わたくしも、ですわ……っ！」

加熱する三人の間に、一夏が割って入る。

「おいおい、私闘は禁じられてるんだろう？」

「〝学院内での私闘はな〟　。無論、ここでやりあうつもりない」

「はぁ？　どういう意味だよ？」

首をかしげる一夏を無視して、エリスは続けた。

「試合形式はどうする？」

「一対一……は面倒ね。三人一組でどう？　そっちの方がわかりやすいでしょう」

「いいだろう……。では深夜二時……〈門（ゲート）〉の前だ。そこで決着をつけてやるっ」

「いいわ、やってあげる」

ようやく交渉が終わった。

エリスはラッカとレイシアの二人を扇動してその場を離れ、その後ろ姿を見ながら、クレアとリンスレットはエリス達の言葉に憤慨していた。

「わたくしとわたくしの家に対しての侮辱となると言葉を吐いた事、すぐに後悔させてあげますわ」

「あたしもよ……。特にあの短髪の奴は許せないわっ……！」

これは、クレアにしかわからない事なのだろうが、相当怒り狂っているように見えた。

「というわけで、今回はあんたと組む事になるけど、これはあくまで一時的になんだからねっ！」

「当然ですわ。こんな事がなければ、誰があなたなんかとチームを組むものですか」

「はぁ……飯は食えず、家も壊され、しまいには決闘騒ぎかよ……勘弁してくれ……」

ここに至っても、この二人は相変わらずと見える……。

しかし、そこで疑問が一つ……。

（ん？　三人一組って言ったよな……？）

決闘を受けるのはクレアとリンスレット。

向こうは確かにエリス、ラッカ、レイシアの三人いたが、こちら側のあと一人のメンバーは一体誰が……？

「というわけで、さっそくあんたの力、見せてもらうからね！」

「やっぱりそうなるよねぇ……」

ここにいる精霊使いもまた三人。

クレア、リンスレット……そして、世界でたった一人しかいない男の精霊使い……織斑　一夏。

学院編入初日から、とんでもない騒動に巻き込まれてしまったと、一夏は肩を落としながらため息をついた。

第5話　少女の願い

「はぁ……」
「あんた、まだそんな事やってんの？」

落ち込む一夏に対して、クレアは露骨に呆れたような表情で見てくる。
元はと言えば、誰かさんのせいでこんなブルーな気持ちになっているのだが……。

「あーあ……俺の家、無くなっちゃったなぁ……」
「うっ……」
「リンスレットがせっかく作ってくれたスープも、結局は食べられなかったし……」
「……」
「飯なし風呂なし宿なしとはな……天はとうとう俺を見放しやがったに違いない……」
「っ～～～～!!!!」
「あぁ……俺がいったい何をやったというんだ？　俺はそんなにも、罪深い事をしたのだろうか……」
「ぐっ、くくっ～～!!」
「はぁーあー……こんな時、俺はいったいどうすれば～……」
「わかったっ！わかったわよッ！あたしが悪かったわよッ!!」

ようやく認めたようだ。
というよりも、元々の原因はクレアとリンスレットが互いの契約精霊で決闘をしたのがいけなかったのだ。
その過程でクレアの契約精霊である《スカーレット》の炎が木製の掘っ建て小屋に引火……。
そしてリンスレットの契約精霊である《フェンリル》の精霊魔装による攻撃……もとい、消火活動によって、火は消えたものの、小屋が

跡形もなく吹き飛んでしまったのだ。

「仕方ないわね。ほら、こっちよ」

「ん？」

「なによ。あんたはあたしの契約精霊なんだから、ご主人様の言うことはちゃんと聞きなさいよ。

あんたの寝床を用意してあげるから、こっちに来なさい」

「来なさいって……」

一夏はクレアが歩いていく先を見た。

そこには立派な建物が建っており、たくさんの部屋が用意されている。

所々から光が漏れていることから察するに、誰かが生活していることは明白。

そして問題なのは、この学院が女子しかいないお嬢様学校だということ。

「お前、ここ女子寮だろ？　俺が入っていいのかっ!?」

「大丈夫よ。あんたはあたしの契約精霊って扱いになってるんだから、誰にも文句は言わせないわ」

「……いや、それはちょっと無理あるんじゃないか……？」

「なによ、この寛大なあたしが、あんたを部屋で寝泊まりさせてやろうって言ってるのよ？

感謝の言葉くらい言いなさいよね」

「……」

そもそも掘っ立て小屋を燃やさなければ、こんな事にもならなかったのだが……。

だがまぁ、現実に燃えて壊れてしまったのだからここはクレアの行為に甘えるしかない。

「それに、あのままだったら、またリンスレットがちょっかい掛けに来るかもしれないし……」
「ん？　なんか、言ったか？」
「な、なんでもないわよ！　それよりほら、早く行くわよ！」
「わかったよ、助かる。ありがとな、ご主人様」
「っ!?　ふ、ふんっ！　わかればいいのよ、わかれば」

ニコッと笑った状態でお礼を言う一夏の顔に、思わずドキッとしてしまったクレア。急に恥ずかしくなってきたのか、部屋へと向かう足の速さが変わった。
そして、ようやくクレアの部屋の前に到着し、家主であるクレアがドアを開け、一夏も中に入る。
明かりを灯し、部屋の全貌を見た瞬間、一夏は固まった。

「なっ……」
「何よ？　なんか言いたいことがあるなら言いなさいよね」
「いや、お前……部屋散らかりすぎだろ……っ!?」

脱いだ服などは床や椅子の背もたれに、本は読んだらそのまま。屑ゴミなどもそのまま放置している状態で、とても高貴な令嬢が住んでいる部屋とは思えない。

「うーん、まぁ確かに、ちょっと散らかってるわね」
「これがちょっとってレベルか?!」
「うっさいわね……。スカーレット」

クレアが名を呼ぶ。
すると、炎を纏った真紅の火猫が現れる。
クレアの契約精霊、炎精霊のスカーレットだ。

「お願いね♪」

「ニャー♪」

お願い……つまりは、この部屋の掃除を、精霊にお願いしているということだ。

まぁ確かに、一応クレアはご主人様なので、スカーレットがその命令を聞く権利や義務があるが、精霊に掃除を頼むご主人もどうかと思ってしまう。

「精霊が単なる小間使いとはな……」

「いちいちうっさいわね……。ほら、あんたも契約精霊なんだから、ちゃっちゃとやりなさいよね！」

「はいはい……」

せっせと紙くずを集めるスカーレットと、本やら服やらを片付け始める一夏。

一匹と一人の精霊は、無駄な動きなく部屋を片付けていく。

スカーレットは集めた紙くずに、尻尾の炎を点けて燃やす。

一夏は埃を取りながら、クレアの愛読書を片付ける。

「相当手馴れてるんだな、お前」

「ニャー？」

「まぁ、なんだ……。これからよろしくな、ご同輩」

「ニャー！」

クレアの契約精霊同士、どことなく絆のようなものがあった。

その後も、基本的に塵集めはスカーレットが、拭き掃除などは一夏が行った。

そして、だいたい終わったと思ったその時、一夏は本棚に戻していた本のタイトルに目を奪われた。

「『もっといじめてご主人様』……『メイドのいけない遊び』……

『禁断の主従契約』……
「ふあぁぁぁぁぁッ!!!!????」
タイトルを音読していたら、クレアが飛びついてきた。
こんな物を愛読しているとは……。
「な、なに勝手に見てんのよっ！」
「お前がちゃんと片付けないのが悪い」
「そ、それでもよッ！」
「無茶言うなよ……」
要は、よくあるティーンズ向けの小説のようだ。
高貴な令嬢ばかりが集まるこのアレイシア精霊学院の生徒たちは、皆一切の男女交際をしてこなかった超が付くほどの箱入りお嬢様たちだ。
しかし、その一方では、そういう物に対する好奇心というのも存在しており、それらを鎮める、あるいは満たすために購入しているのだろう。
しかし、クレアの本は、どうにもジャンルが偏っているようにも見える。
「も、もう掃除はいいから、ご飯にするわよっ！」
「はいはい……」
我がままお嬢様の望み通り、一夏たちはキッチンに入っていった。
元々が二人で活用する学生寮であるためか、キッチンはわりかし広めだ。
綺麗に整えられた棚には調味料なども豊富に取り揃えられているようだし、お皿なども一通り揃っている。
さすがはお嬢様学校だと感心していたのだが、一夏はクレアのとった行動に、唖然としていた。

ガラガラガラ……

「お、おい……これって……」

「ご飯よ？　ほら、好きなものを取りなさいよ」

キッチンテーブルに置かれたのは、大量の缶詰だった。

おかずになりそうなもの、デザートの類……いろんな種類の缶詰があった。

「缶詰ばっか……っていうか缶詰しかねぇのかよ……」

「うっさいわね。美味しんだから別にいいじゃない……」

「なるほどな……お前、料理できないんだろ？」

「なっ!?」

でなければここまで缶詰の生活はしていないだろう。

缶詰とはそもそも、戦場に行く兵士たちが食べていた非常用保存食だ。

それを日常的に食べているのは……。

「り、料理くらいできるわよっ！」

「ほほう……？　では、なんでフライパンなんかは新品同様の綺麗さを保っているのでしょうかねぇ～？」

「っ～～～～～!!!!!!!!」

おそらく使ったことはある。

だがクレアのことだ。

ほとんど使ったことがないのだろう。

「飯は俺が作るから、お前は部屋で待っていてくれ」

「えっ？　あんた、料理作れるの？」

「ああ。ガキの頃から料理はしてたからな。っといっても、最近は旅をしていたからな……まともな料理は久しぶりなんだけど」

彼女を探すために、いろいろな場所を巡っていた。
その間は、普通に野宿というか、キャンプのような事をしていたため、食事は基本的に自給自足。
森に入ってキノコや山菜を採ってきたり、うさぎや鳥なんかを捕まえたりしていた。

「あっそ……ならあたし、先にお風呂入ってくるから」
「ん？　お、おう……」

一応確認だが、この部屋には一夏とクレア以外誰もいない。
そんな中だ……クレアはお風呂に入ると言うのだ。
これはある意味、健全な男子としてはとんでもないイベントが発生してもおかしくはない。
すると不意に、今朝の出来事が蘇った。
森の泉で、無防備な裸体を晒していたクレア。
まだ成長仕切っていない青い果実のような体つきではあったが、白く透き通るような肌と、燃え上がるような紅い髪。
それらが水に濡れ、煽情的な姿になっていた……。

「ッッ!!!!!」

そこまで想像して、一夏はすぐに頭を振った。
余計な事を考えずにすぐに料理の準備を始めた。
が、そんな時に、ふと別方向から視線を感じた。

「ん？」
「ジィーーーー」

見ている。
なぜかジト目で睨んできているクレア。
なんなのかと思い、一夏は尋ねた。

「な、なんだよ……」
「別に……ただ、覗いてきたら消し炭だからね」
「覗くかっ！」

クレアはその浴室へ向かって歩いて行き、一夏はキッチンにある缶詰やその他の食材を漁る。

「あっ、そういえば火はどうすれば……」
「スカーレット」
「ニャー」

クレアの声に反応し、スカーレットが小さな火炎球を生み出した。
つまり、これを使え、という事だろう。

「おおっ……凄く便利だな」
「でしょ」

クレアは得意げな表情で浴室へと再び歩いて行った。
一夏はツナ缶にサーモン缶など、おかずになりそうな物を開けていき、保管室にあったパスタや、冷暗所にあったほうれん草などを取ってくる。

「ニャー」
「よしよし。美味しいご飯を作ってやるからなぁ～」

一緒に仕事をこなしてくれるスカーレットには、特別に良いものを作ってやろうと思った一夏だった。

シャーーーー。

たった一人、浴室でシャワーから出るお湯をその身に浴びるクレア。

この後行われる決闘に向けて、しっかりと身を清めておかなくてはならない。

先ほど、騎士団との言い争いと時に言われた一言が、クレアの中で絶対に許せなかったのだ。

ーーーー貴族どころか反逆者の妹じゃないかっ！

（あいつは、絶対に許さないっ……!!）

確固たる決意でそう誓った。

自分のことを馬鹿にされるのも、蔑まれるのも慣れている。

だが、自分の姉のことを知らない輩から、あれこれ悪意を持った言葉で責められるのは、どうにも我慢できない。

そう決意した時、ふと、クレアは過去のことを思い出した。

厳しくも、優しかった姉。

火の精霊姫に選ばれ、民や貴族たちにも認められていた。

正直いうと、クレアの憧れだった。

自分もいつか、姉の様に立派な精霊使いになると、その時に誓った。

だが、その姉は、精霊王に反逆し、忽然と姿を消した。

それからというものの、家は没収され、契約精霊も没取されそうになった時に、学院長を務めていたグレイワースよって、学院生としての日々を送っている。

（姉様……）

会いたい。
そんな思いを抱いていた、その時だった。
ピチャ……
「んっ？」
不意に聞こえた水音。
その水音に、クレアはハッとした……。

「う～ん、いい感じだな」
クレアが水浴びをしている最中、一夏は着々と料理を作っていく。
今はちょうど、パスタにいれる具材を炒めている途中だ。
スカーレットのしっぽの先から、直接火を噴いているので、かなりの火力だが、だからこそ、調理の時間を短縮できる。
「うん、うまい……」
「ニャー」
「ん？　なんだぁ、お前も食べたいのか？」
「ニャー！」
一夏はスカーレットのしっぽからフライパンをどけて、炒めた具材をスプーンですくう。
そしてそれを手のひらに乗せると、スカーレットの前に持っていく。

「熱いから気をつけろ」
「ニャー！」
一夏の忠告を聞いていたのかどうかはわからないが、スカーレットは飛びつくように一夏の手のひらにある具材を食べる。
「あっ、お前は火属性だから、熱いのは慣れてるのか……」
スカーレットは具材を食べ終わると、満足したのか、しっぽを左右に振る。
「そっかそっか、うまかったなら作った甲斐があったな……。もうすぐ出来るから、もう少し力を貸してくれよ」
「ニャー！」
クレアにこき使われるご同輩二人。
今のうちに仲良くなって置いて損はないだろう。
一夏は最後の仕上げで、パスタを茹でようかと思っていたその時だった。
「キャアアアッーーーー！！！！」
「っ!?!!」
突然の悲鳴。
それは言うまでもなく、クレアのものだった。
何事かと思い、一夏は浴場の方へと向かっていった。
「なっ!?」
あまりの光景に、一夏は目を疑った。

目の前には、またしてもクレアの裸体が……。
しかし、肝心なところは水によって遮られているため、見えない。
いや、問題はそこじゃない。
クレアにまとわりついている水……普通ではありえない

「クレアっ!?　おまっ、これはっ！」
「た、助けてぇ、一夏ぁ……っ！」

クレアの体に巻きついている水は、微妙にクレアの肢体を隠しているため、大事な部分は見えていないのだが、それがまた扇情的な光景に変えている。
しかし、そんな悠長なことも言っていられない。
シャワールームの水は、精霊使いたちの神威を使って操作しているものだ。
クレアはこう見えても、優秀な精霊使いであることに間違いはない。
そんな彼女が、こんな簡易的な失敗をするなんてことがあり得ない。

「『荒ぶる水の精霊よ、我が命に応じて鎮まり給え！』」

小声で鎮守の精霊語を唱えながら、右手に神威を込めていく。

「クレアっ！　俺の手をつかめっ！」
「や、いやぁん……！」

一夏の言葉に反応したクレアは、懸命に一夏の手に、自分の手を伸ばした。
そして一夏の手が触れた瞬間、神威の光が発光し、クレアの体に纏わりついていた水が一瞬にしてただの水に代わりに、そのままカーペットの上に落ちた。

「はぁっ……はぁっ……はぁ……」
「えっと……その、大丈夫か？」
「う、うん……なんとか……」
「しかし、一体どうしたんだよ……お前のほどの精霊使いが、この程度精霊を暴走させるなんて……」
「わかんないわよっ……でも、なんだか知らないけど、突然水の精霊が暴走したのよ」
「いきなり？」
「そうっ！　シャワーを浴びてたら、いきなりぐわっ、て襲いかかってきたのよっ……！」
「……」

クレアは嘘を言っている様子はなかった。
しかし、この学院の部屋にある水道の水は、学院の敷地内にある精霊機関で保管されている水のはず。
その水の精霊が、なんの変哲もなくいきなり暴走するのはおかしい。
ましてや、クレアは普段の生活や好戦的な態度とは裏腹に、優秀な精霊使いである。
そんな彼女が、低位の精霊の制御に失敗するなんて事なんて、ほぼほぼあり得ない。
ならば、外部からの犯行と言うことになるが、その目的がなんなのか……？

「まぁ、とりあえず無事でよかったよ……ほら、風邪ひくからこれでも羽織っろ」
「あ……ありがとう……」

一夏は自分の上着を脱ぐと、そのまま裸のクレアの体に羽織わせる。

まぁ正直、クレアが風邪をひいてもいかんとは言ったが、理由はそれ以外にもちゃんとある。
なんせ、会って数日にも満たない少女が、再び全裸で自分に抱きついているのだ……健全な男子からしたら、それはほとんど拷問にも等しい。

「ほら、とりあえず体拭け」
「あ、ありがと……ん？」

一夏の上着を着て、何故か顔を赤らめていたクレアが、今度は一夏の渡した布を見て、動きを止めた。

「どうしたんだよ？　速く体拭かないと、マジで風邪ひくぞ？」
「ねぇ、一夏……」
「あん？　なんだよ……」
「これは……っ、いったい何っ?!」
「はぁ？　何って……タオーー」

そこまで言って、一夏はようやく気がついた。
クレアに渡した布の正体に……。

「ル……だろ……？」
「へェ～……あんたの知ってるタオルって、こんなに小さくてっ、三角の形をしてるってわけっ……!!!!」
「……」

実際、その布がタオルかどうかなんて知らなかった。
ただ、クレアが全裸でシャワー室から出てきて、あんな風に水に纏わり付かれていた状況を目にして、とりあえず何か拭く物はないかと思い、その辺に落ちていた布を拾っただけだ。

「ねえっ!!　答えなさいよっ！　あんたにはこれがタオルに見えるわけっ!!??!!!」
「……!!……えっと、その……パンーーーー」
「口に出して言うんじゃないわよっ、バカァァァァァっ!!!!!!!!」
「ちょっ!?　バカ、やめろっ！」
「うるさいっ、うるさいっ！　消し炭になりなさぁぁぁーーーいっ!!!!!!!」
「ぐおおおっ!!!??!!!」

クレアの焔の鉄拳をくらい、一夏は吹き飛ばされた。

「はむっ……んぐんぐ……おかわりっ！」
「まだ食うのかよ……太るぞ？」
「太らないわよっ！　精霊使いは戦闘時に神威を消費するから、太らないのよ」

ようやく冷静さを取り戻したクレアは、急いで本物のバスタオルで体を拭き、制服に着替えた。
そして、ほとんど完成していた一夏の料理を見て、お腹が空いているのを思い出したようで、一夏を強引に起こして、料理の仕度をさせたのだ。
しかし、いざ食事をしてみると、一夏自身も驚くほど食べる。
クレアは小柄な体型で、ましてや女の子だ。
普通ならばあまり食べないが、これが驚異の胃袋でもしているのかと思えるほど、食べ物を口に運んでいく。
呆れた一夏は、本来ならば、女の子には絶対に言ってはならない言葉を言うが、クレアはそんな言葉では怯まない。
さっさとおかわりを持って来いと言わんばかりに、スープを入れる皿を一夏なら差し出す。

一夏はそれを受け取ると、鍋の中に入っているコンソメ風味の野菜スープを入れていく。

「ったく、ひどい目にあったぜ……」
「あんたが悪いんじゃないのよ！」
「俺は悪くないだろう。片付けないお前が悪い」
「うっさいわねっ！　このパンツ泥棒！　変態！　淫獣っ！」
「はぁ……」

クレアにおかわりを渡したり、パスタを皿に移してやったりと、早速従者業な板についてきたところで、クレアが口を開いた。

「まぁ、あんたのこの料理の腕だけは評価してあげるわ！」
「そりゃどうも……って言っても、ほとんどは缶詰をアレンジして作っただけだからな……。手抜き料理だよ」
「ふーん」
「まぁ、醤油があったら、もっとよかったんだけど……」
「醤油？　なにそれ、食べ物？」
「俺の故郷の調味料なんだ。まぁ、こっちだとそうそう手に入らない物なんだけどな……どっかに掘出し物屋とかないもんかなぁ……そう言うとこだと、異国の物を取り扱ってたりするんだけど……」
「故郷……か……」

ふと、クレアの表情が曇った。
故郷……その単語に反応したようだ。

「そう言えば、聞いておこうと思った事があったんだ」
「何よ？」
「お前、何でそんなに強い精霊に拘らんだ？　前にも言ったが、スカーレットだって、ものすごく強い精霊じゃないか」

「……」

さすがに核心をついた場面での話だったのか、クレアは変に誤魔化すことも、反発することもなく、ただうつむき、静かに答えた。

「どうしても、会いたい人がいるのよ……」

「会いたい、人……」

クレアの言葉に、今度は一夏が反応する番だった。

会いたい人……それならば、一夏にだっている。

三年前のあの日、突然姿を消した人がいる。

そして、その人を見つけるために、ずっと生きてきた。

そんなことを考えていると、クレアはため息を一つ……。そして、意を決したかのように口を開いた。

「あんたには、隠しておくのも嫌だから、話しておくわね」

そう言って、クレアは自分の首に掛けていたペンダントを一夏に見せてきた。

そこに描かれていたもの。

紅色をした業火の炎が、獅子の姿をしている。

「ん？　この炎の獅子……どっかで見たような？」

「これは……家紋なのよ」

「家紋……？　っ、まさかっ、これって！」

炎の獅子の家紋。

リンスレットの家、ローレンフロスト家の家紋は、白狼だ。

では、炎の獅子の家紋を有する貴族の家と言えば……。

「エルステイン家の紋章じゃないかっ!?」

「そうよ……」
「エルステイン公爵家っていえば、リンスレットのとこのローレンフロスト家と同じ、四大貴族の……っ！」
「正確には、四大貴族だった……が正解よ」
「っ……そうか、エルステイン公爵家は……」
「そう……四年前に公爵家の称号を剥奪されたわ」
「じ、じゃあ、お前がそれを持っていたって事は、お前は……っ！」
「そう……私の本名は、クレア・エルステイン。エルステイン公爵家の次女よ」
「っ……」

クレアと初めてあった時、その神威量からして、相当な精霊使いである事はわかった。
そして、彼女が由緒あるアレイシア精霊学院の生徒であるならば、名の通った名門貴族のお嬢様である事だって推測できる。
しかし、彼女が口にした名前……『ルージュ家』という貴族は、少なくとも、このオルデシア帝国内には存在しない名前だ。
ならば、考えられるのは偽名を使ったという事だが……。

（まさか、捨てていたのが、エルステインの名前だったとはな……）

想像していたよりも大きな隠し事をしていたクレア。
そして同時に、一夏はある言葉をふと思い出した。

ーーーー貴族どころか反逆者の妹じゃないかっ！

「クレア、お前がエルステイン家の人間って事は……」
「ええ、そうよ……四年前、私たちはエルステインの名を失った……その原因を作ったのは……」
「ルビア・エルステイン……」
「っ……」

その名前を聞いた途端、クレアの表情はさらに暗いものになった。
ルビア・エルステイン……その名を知らない者は、このオルデシア帝国内……いや、その外にある他国だっていないだろう。
四年前、突如として精霊王に反逆し、火の精霊王から最強の精霊を簒奪した。
その結果、世界中で未曾の大災害が起こった。
火の精霊王を怒らせたという事で、一時期帝国内では火を起こすことができず、火を使うには、火の精霊を山から連れて来て、火を起こしていたのだ。
その際に呼ばれることとなった、ルビアの二つ名が《災禍の精霊姫（カラミティ・クイーン）》

「私は……姉様に会いたいの。会って、あの時の真実を聞きたい……」
「……そうか」

しかし、姉のルビア・エルステインは、その日以来行方不明となった。
そんな姉を探すために、クレアは強い精霊を求め、そして、強くなることを願っているのだろう。
それは、一夏だって同じだった。
三年前のあの日、一夏はとても大事な人を失ってしまった。
掛け替えのない存在、代わりのものなんて絶対に務まらない存在……その人を探すために、三年間も宛のない旅を続けてきたんだ。
そして、その手がかりを見つけた。

（《精霊剣舞祭（ブレイドダンス）》にレスティアが現れるかもしれない……か。しかも……）

探し人だけではない。

今回の大会には、前大会優勝者のレン・アッシュベルも出場する。
しかし、その名前の精霊使いは、もう存在しないはずだった。

「そういえば、今回の《精霊剣舞祭》には、あのレン・アッシュベル様が出場されるみたいよ」
「むふぅっ!? こほぉっ!! おほぉっ!?」
「ちょっとっ?! な、何やってんのよ、大丈夫?」
「お、おう……」

まさか、クレアの口からその話題を聞くことになるとは思ってもいなかったため、少し動揺してしまった。
しかし、当のクレアは、一夏の事を心配した表情でこちらを見ているので、変に怪しまれているわけではなかった。
しかし、こういう時には優しく接してくるあたり、元々根は優しく性格をしているのだ。

「そ、そうみたいだな……」
「レン・アッシュベル様の剣舞……。私も、三年間にあの会場で見ていたわ」
「そ、そうなのか……」

一夏の額から、冷や汗が流れ出た。
まぁ、三年前のあの時《元素精霊界(アストラル・ゼロ)》で行われていた《精霊剣舞祭》の会場には、オルデシア帝国のみならず、他国の貴族たちが入場し、精霊使いたちの剣舞を生でその目に焼き付けていた。
ならば、レン・アッシュベルの剣舞だって、その当時は誰もが見ていたに違いない。

「彼女の剣舞は、とっても素晴らしかったわ……。あの会場で見た時、私は彼女のようになりたいと思った。
私たちと同じ歳でありながら、幾人もの手強い精霊使いを倒し

ていき、優勝という栄冠を勝ち取った。
あの日以来、私は彼女を目標にしてきて、同時に感謝もしているの。彼女の剣舞で、火の精霊王の怒りは静まり、再び世界に安寧がもたらされたんだから……。
だから彼女は私とって、恩人であり、憧れでもあるのよ」

その憧れの存在が、今目の前にいるなんて、口が裂けても言えなかった。
おそらくレン・アッシュベルという精霊使いの存在は、多くの精霊使い、強いては精霊騎士を目指そうとしている者たちには強く印象に残っているだろう。
そして、彼女のように強くなりたい、美しく剣舞を舞いたいと願う者たちもいるはずだ。
ならば、クレアのこの想いも正しく、当然なのだろうと思うのだが、目の前で自分への惚気話を聞くのは、意外と胃が痛くなるものだ。

「さて、私は決闘に備えて、少し寝るわ。時間になったら、起こしてちょうだい」
「って、俺は寝られないって事じゃないか」
「あんたは私の契約精霊でしょ。頼んだわよ」
「おいっ、って、もう寝てやがる……！」

静かな寝息を立てて眠るクレア。
寝付きの良さに驚きながらも、一夏は毛布を手に取り、クレアにゆっくりとかけてやった。
そして一夏も、少しは休んでおこうとクレアが寝ているソファーとは別のソファーに座り込んで、目を閉じた。
久しぶりに戦うことになるため、体を十分に休ませておかなければならない……。

「ふふふっ、ようやく見つけたわ……一夏」

アレイシア精霊学院の建物の屋根。
そこに、一人の少女が舞い降りた。
闇色のドレスが風によってヒラヒラと舞い、美しい黒く艶やかな翼が、月明かりに照らされて、なんとも神秘的だった。
ドレスと同じ闇色の長い髪をかきあげ、蠱惑的な瞳で見つめるその先には、一体何があるのか……。

「でも、貴方はまだ本当の貴方じゃない……。だから、私が目覚めさせてあげるわね」

少女はそれだけを言い残し、笑いながら姿を消した。
深夜０時を回った頃……迫り来る決闘の時間に、各々が示す信念が試される。
指定された時間まで、あと少しだ……。

第6話　真夜中の剣舞

「うーん……やっぱり夜になると、学院の雰囲気も変わるもんだな」
「当然でしょ。夜は精霊達の時間なんだから……」
「はぁ……よかったぁ、精霊の森で野宿なんかしなくて……」
「あんた、そのまま野宿してたら、精霊達に襲われてたわよ？」
「そんな危険なところに学院建ててるのもおかしいけどな……」

深夜……。
昼間は貴族淑女たちの活気に包まれている学院だが、彼女たちが寝静まってしまうと、今まで出て来てなかった精霊たちが活発になっていく。
そのため、人とは違う気配が、学院のあちらこちらに確認できる。
今、一夏たちは精霊の森の中を少し入っていった場所を歩いていた。
先導するクレアの後を追って、一夏が追随するといった形だ。
その目的はただ一つ。
今夜行われるエリスたち〈風王騎士団（シルフィード）〉との決闘のためだ。
クレアはもちろん、同じく決闘を申し込まれたリンスレットも戦う気満々だ。
一夏は巻き込まれた形になったのだが、こればかりは仕方がない。
クレアには部屋に泊めてもらうという恩もあるし、なによりも〝魔女〟の策略によって、この学院に強制的に編入させられたのだから、いずれは戦わなくてはならない。
それに、一夏自身の目的でもある〈精霊剣舞祭（ブレイドダンス）〉を勝ち抜くためにも、昔の感覚を思い出さなくてはならないのだから……。

「にしてもよ、この学院内では決闘や私闘は禁じられてるんだろ

？　どうやって戦うんだ？」
「ええ、学院内では禁止されてるわね……だから、学院の外で戦うのよ」
「それってどういう……」
「いいから、ついて来なさい」

クレアにそう言われて、しぶしぶついていく一夏。
すると、草木生い茂る森の景色が、一瞬にして開けた。

「っ……！　ここは……」

目の前にあるのは、まるで古代の遺跡のようなものだった。
イギリスの『ストーンヘンジ』、ギリシャの『パルテノン神殿』のような、古代の神話の時代からあったような遺跡。
しかし、ここは一夏の知っている世界とは全く別物の世界。

「これは……〈門（ゲート）〉っ!?」

〈門（ゲート）〉。
それは、一夏やクレアたちのいる世界と、精霊たち本来の住処たる〈元素精霊界（アストラル・ゼロ）〉とを繋いでいるものだ。
この門は世界各地に点在しているため、特に珍しいという事もないのだが、ここは学院の敷地の中にある。

「おいおい、〈元素精霊界（アストラル・ゼロ）〉で決闘するのかよっ!?　大丈夫なのか？」
「大丈夫よ……。ここには低位の精霊しかいないわ。でなきゃ、学院が放置しているわけないでしょ？」
「まぁ、たしかにそうだな……。だが、封印精霊を祀った祠に、《門》まであるんだからなぁ……ここは秘密基地かなんかか？」

一夏は愚痴りながらも、クレアの後に続いて、《門》を潜っていく。
体が光の門を抜けた先には、どこまでも広がる広大な森の大地がひろがっていた。
〈元素精霊界（アストラル・ゼロ）〉の世界ではよく見る《オーシャン・フォレスト》と呼ばれる場所だ。
一夏たちは〈元素精霊界（アストラル・ゼロ）〉側の《門》の前に立っていた。
そこから、決闘が行われる会場になる小劇場へと向かう。

（こっちに来るのは……ほんと、久しぶりだな……）

見える景色……何もかもが懐かしい。
もう三年も前になるのだと、一夏は懐かしんでいた。
そうこうしているうちに、一夏たちは決闘の場となる小劇場へと到着。
構造的には、すり鉢状の施設……狭い野球場のような建物だった。
小劇場と言ったが、屋根はなく、吹きっさらしの状態だ。
そんな会場には、すでに先客がいた。

「遅いですわよっ、クレア！」

金髪の縦ロールの髪を弄りながら、優雅に佇む一人の少女と、その傍にいるメイド服姿の少女。
クレア同様に、エリスに決闘を申し込まれたリンスレットと、彼女のメイドであるキャロルだった。

「あんた達、随分と早いわね……！」
「ふんっ、あの騎士団長をギャフンと言わせれると思うと、やる気が漲っただけですわ……！」
「ふーん……まぁ、それはあたしも一緒ね。あいつらを完膚無きまでに叩きのめして、姉様を侮辱したことを後悔させてやるんだから

！」

二人の意気や良し。
あとは、相手側であるエリス達を待つだけなのだが……。

「遅いなっ……8分も遅刻しているぞ、レイヴン教室！」
「っ!?　エリスっ!?」
「一体どこにっ……!?」

突如として、小劇場に響き渡る、凛とした声。
これは間違いなく、騎士団長エリスのものだった。
そして、劇場内で反響する声の、その発声源の方へと視線を向ける。
ちょうど、一夏達とは対面する方向から現れた。
堂々たる登場。
綺麗な青髪をポニーテールで結った騎士団長エリスと、その両側面後方に控える、騎士団員二人。
長い髪を三つ編みに纏めている方の少女は、『レイシア』。短髪のボーイッシュな少女は、『ラッカ』という名前だったはずだ。
そんな三人が、劇場の最上部にて、毅然として立って登場した。
ほんと、一体いつのまに居たのやら……。

「なんだ、負けた時にでも言う言い訳でも考えていたのか？」
「チィ、いつからそこにっ……」
「ぐぬぬっ……わたくしよりも目立っているなんて……っ！」
「えっ、そこなのか……?!」

流石は貴族のお嬢様たち。
考えが少しずれているような……。
と言うよりも、この場合だと、別の可能性があるのではないだろう

か？

一夏は呆れたかのように、エリスたちを見上げた。

「なぁ、エリス」

「なんだ、オリムラ・イチカ」

「もしかしてなんだけどさ……かっこよく登場する機会でも伺ってたんじゃないかなぁ～って……」

「「「「「……」」」」」

その場にいる、一夏以外のメンバー全員の場の空気が静まり返った。

あれ？　なんかやばいことあったかな？

しかしそんな空気も、クレアとリンスレットが容易くぶち壊した。

「プフッ……！」

「フッ、フフフフ……っ～～～!!!」

必死に笑いを堪えているのが分かる。

体をかがめて、笑っている顔を見せないようにしているのか、下を向いた状態で、体だけが小刻みに動いている。

「ち、違うぞっ!?　こ、これはそんな事のためにだなーーーー」

「そ、そうだっ！　別に、先に来て待っていたわけではないっ！」

「そ、そうよっ！」

（図星だったか……）

「なんだその生暖かい目はっ……!!　ほ、ほんとなんだぞっ！」

急に恥ずかしがり、取り乱す騎士団長以下3名。

そして、大いに笑ったクレアとリンスレットも、気分がいいのか、騎士団に対して挑発する。

「はあーあ……さっすがね、騎士団長♪」
「ほんとですわ……。団員のみならず、我々生徒の模範ともなるべき行動ですわね♪」
「っ～～～～!!!　は、早く精霊を出せっ！　決闘だっ！」

まるで子供の会話そのものだ。
一夏はため息をついて、視線をクレアに向ける。
クレアの手には、いつのまにか〈炎の鞭（フレイムタン）〉が握られており、リンスレットの手にも氷の弓〈魔氷の矢弾（フリージング・アロー）〉が握られてていた。

「クレア、勝算はあるのか？」
「それはあんたの実力次第ね……」
「えぇ……」
「正直、エリスの実力は、騎士団員たちの中でもピカイチよ。伊達に騎士団長を名乗っていないわ。
それに、ほかの二人だって、それなりに手強いし……実力的には私たちの方が上だとは思うけど、騎士団の連携は侮れない。気を抜いたら一瞬でやられるわ……。
それに、私の《スカーレット》は、今朝の封印精霊との戦いで、だいぶ消耗しているところがあるし……。あまり無理はさせたくないの……」
「……」
「っ、なによっ？」
「いや、中々の観察眼だと思ってな……。お前の性格からして、結構直情的なのかと思っていたんだが……」
「へェ～……」
（あ、地雷だったかな……？）

出会ってまだ間もないのだが、クレアの目尻にシワが寄った笑い方

をする時は、決まって怒っている時だ。
まぁ、そんな顔しかまだ見たことがないというのが本音であるが……。

「じゃああんたに、いっときの猶予と選択肢をあげるわ。前衛と丸焼き……どちらか好きな方を選びなさい」
「オーケー、前衛は任せろっ！」
「ふんっ！」

丸焼きを希望する者などいないだろうに……。
一夏はやれやれといった表情で、クレア達の前に立った。
意識を右手に集中して、今朝契約した封印精霊との意識をリンクしていく。

（ほんとは気が進まないんだけどな……）

一瞬、黒い手袋に覆われた左手が気になり、意識が疎かになるが、気を取り直して、もう一度集中していく。

『冷徹なる鋼の女王　魔を滅する聖剣よーーーー」
〈契約式（サモルナ）〉。
精霊との契約の時や、力を使う時などに使用する精霊語。
それを唱えながら、一夏は精霊とのリンクを確認していた。
だが……。

（んっ……？　なんだ？　いまリンクが途切れたような……？）

だが、今更召喚を止めることはできない。

一夏はそのまま続けて呪文を唱える。

「いまここに鋼の剣となりて　我が手に力を』っーーーー!!!」

眩い光が放たれる。

そして、その光が収まった時、一夏の手に、剣精霊が召喚されていた。

とても扱いやすく、軽そうな、〝短剣〟が……。

「「「「「っっっ……!!!!????」」」」」

全員が再び沈黙に包まれた。

今の今まで、誰とも契約をしてこなかった学院内伝説の封印精霊。

それと契約を果たした、男の精霊使い。

その実力や、契約した精霊の姿を目にできると、内心誰もが期待を寄せていたに違いない。

しかし、その結果がこれだ。

一夏の手にしているのは、たしかに神秘的なオーラを纏った剣だったのだが、しかし、それが短剣というのはどういうことだろう。

クレアの話した事が噂になり、学院内では、一夏がすでに優れた〝長剣〟の精霊と契約したことは知っている。

だが、今手にしているのは〝短剣〟……。

これは一体どういう事なのだろうか？

「ち、小っさ……」

思わず、クレアがそう呟いた。

もの凄い肩透かし感を感じたのだろう……。

「ま、待て待てクレア！　見た目はこんなんだが、一応は封印精霊だぞ？　なんか、もの凄い能力が秘められているかもしれないじゃないかっ！」
「そ、そうよねぇ～！　あれだけ凄い力があったんだもんねっ！」
「そ、そうだぜ！　ほら、こんな岩なんて、多分スパーンッとーーーー」

パキィィィィーーーーン……

近くにあった手頃な岩を見つけ、それに向かって短剣を振った。
しかし、刀身が当たった瞬間、短剣はものの見事に真っ二つにへし折れた。

「ほら……パキィィィンって……」

汗が止まらない。
ジト目で睨んできて、ズンッ、ズンッという効果音が似合うような歩き方で、クレアは一夏に近づいていく。
そして、両手で制服の襟を掴むと、問いただすように顔を近づける。

「っ～～～～!!!!!」
「あ、えっと……!!!!その、実は俺、精霊を使役するのは3年ぶりでな……その、まだ感覚が戻ってないっていうか……」
「はあっ!!?　何よそれっ！　あんたあんなに凄かった精霊をいとも簡単に手懐けてたじゃないのよっ!!?」
「いや、それはだな……お前を助けようって思って、もう無我夢中だったんだよ……。
その、正直どうやって契約したのかなんて、覚えてないんだ」
「な、何よそれぇ～～っ!!!」

非常に残念そうに落ち込むクレア。
一夏はブランクのせいだと言ったが、正直な話、原因は他にもある。
（俺が負い目を感じて、召喚どころか契約も拒んでいたからかな……）
憂いを秘めた瞳の先にあるのは、手袋に覆われた左手。
そこには、とても大切な人との契約の証があるのだ。
彼女以外と契約するなんて、本来ならあり得ないし、する必要がないと思っていた。

「もうっ！　なんなのよあんたっ!?　あんたの実力を期待してたのにぃ～～!!!」
「痛ってぇっ!?　ばっ、やめろっ!?　鞭で叩くな！」

クレアの容赦のない鞭攻撃を受けながら、一夏は近づいて来る二人の気配を感じ取った。

「ふふっ……可哀想ね《火猫のクレア》。精霊だけじゃなくて、入れ込んだ男にまで裏切られるなんてね」
「ふんっ、正直見損なったよ、男の精霊使い。その程度で我々に剣を向けるなんてなっ……！」

レイシアとラッカが、それぞれ自分の精霊を呼び出し、さらにはそれを武器へと姿を変える〈精霊魔装（エレメンタルヴァッフェ）〉を手にして近づいていた。
純化形態の中でも、より高度に最適化させられた形態。
レイシアの精霊の名は《オアンネス》。
そしてその〈精霊魔装（エレメンタルヴァッフェ）〉は、氷の刀身でできた細剣に近い形状の一振りの剣だった。
そして、ラッカの精霊の名は、地精霊《カブラカン》であり、〈精霊魔装（エレメンタルヴァッフェ）〉は柄の長い大鎚。
〈破岩の鎚（ロック・ブレイカー）〉だ。

二人はそれぞれの〈精霊魔装（エレメンタルヴァッフェ）〉を握りしめて、エリスは自身の腰に帯剣していた騎士団員全員が持っている騎士団の片手剣を抜く。

「まぁ……何はともあれ、舞台の役者は揃ったわけだっ……！
さあぁ、夜が明けないうちに終わらせようっーーーー!!!」

騎士団員たちの士気も上がった。
しかし、肝心のエリスがまだ精霊を出していなかった。

「エリスは精霊を出さないのか……？」
「ふふっ……！」
「っ!?」

エリスのこぼした笑みを見て、一夏は「はっ」となった。
すると、それとほぼ同時に、強烈な風が吹き荒れる。

「すでに召喚している……。紹介しよう、私の契約精霊……魔風精霊《シムルグ》だっ！」

一陣の風が通り過ぎ、その姿を晒す。
鮮やかな緑色の毛並みが綺麗な大きな鳥だった。
風属性の精霊の為、動きは素早く、ましてや、《シムルグ》が通過した後には風の刃が吹き荒れるため、容易に近づけない。

「くっ、速いなっ……！　うおっ!?」

《シムルグ》がまっすぐ一夏の頭上に落ちて来る。
一夏はとっさに飛び退いて躱しはしたものの、あまりの速さに、風までは避けきれなかった。
一夏の左肩付近が、風の刃によって斬り裂かれる。

「ぐっ、つぅ〜〜!!」

〈元素精霊界(アストラル・ゼロ)〉では、肉体による傷は存在しない。

そのかわり、精神へのダメージが蓄積されていくのだ。

そのため、血を流したりなどはしないが、受けたダメージは、一夏のいる世界と同様に、かなりの激痛を与える。

「ちぃっ……! 『神威よ　傷を癒せ』!」

精霊魔術を使い、一夏は即座に傷を治す。

だが、その間にも、高速で迫って来る《シムルグ》。

「一夏っ! さっさと〈精霊魔装(エレメンタルヴァッフェ)〉を展開しなさいよっ!

このままじゃ、ただやられるだけよっ!」

「わかってるっ!」

一夏はもう一度右手の甲に刻まれた精霊刻印に意識を集中するが、やはり、展開される武器は短剣だった。

「ちっ、こんなじゃ届かねぇだろっ……!」

一夏は短剣を左手に持つと、腰に差していた片手剣に右手を伸ばす。

片手剣の柄を握りしめ、抜剣。

片刃の直剣……直刀を振り抜き、構えを取る。

「『神威よ　我が刃に鋼の加護を』ーーーー!!!」

右手に握る直刀に、神威の光が流れ込む。

これにより、多少は丈夫な剣になった筈だ。

「あ、あんた、そんなんでどうするってのよっ!?」
「この短剣よりはマシだろうっ！」
「もうっ、仕方ないわねっ！　私が援護するから、あんたはーーーー」
「団長のところへは行かせないっ！」
「「っ!?」」

クレアは鞭の扱いと、精霊魔術には長けているため、中距離支援を行おうとするが、そこに鋭く割り込んで来た声が……。
それと同時に、氷の壁が出現する。
それにより、一夏とクレアは壁によって引き離された。
その壁を作り出したのは、言うまでもなく、騎士団員のレイシアだった。

「クレアっ！」
「あたしは大丈夫よ！　それよりも、あんたはエリスをっ！」
「ああっ、わかった！」

連携すると言ったそばから、すでに両断されてしまった二人。
クレアの力量から、一対一の状況ならば、まず負けることはないだろうが……。
一夏はクレアの指示に従い、エリスの方へと駆けていくのだが、それを遮るように、一夏の頭上を覆いかぶさる影が……。

「団長のところには行かせないよっ！」

大鎚を持った精霊使いラッカが、一夏の頭上から思いっきり大鎚を振り下ろす。

「ちっ！」
「ふんっ、逃げているだけか、男の精霊使いっ！」

正直、単純な武術での勝負ならば、一夏はラッカに負けない自信があったのだが、問題は精霊を使役できるかどうかだ。
いかに神威で補強しているからといって、ただの直刀と純粋に精霊を使役して作り出した〈精霊魔装（エレメンタルヴァッフェ）〉とをぶつけたら、直刀の方が簡単に砕け散るだろう。
左手に持つ一夏の〈精霊魔装（エレメンタルヴァッフェ）〉は短剣であり、そしてあまりにも脆い。
この短剣では、たとえ普通の武器に当たったとしても、簡単に砕けてしまうだろう。

「逃げるなっ！　ちゃんと戦え、男の精霊使いっ！」
「悪いがっ、お前の相手をしている暇は、ないっ！」

ラッカの放つ〈破岩の鎚（ロック・ブレイカー）〉を躱す一夏。
そして、重い一撃を放ったラッカの隙をついて、一夏はその場を離れた。
その瞬間を狙ったか、ラッカの胸部に、氷の矢が突き刺さった。

「ぐっ、ぐああーーっ!?」

〈元素精霊界（アストラル・ゼロ）〉では、受けたダメージは肉体には現れない。
全て、精神へと蓄積されるのだ。
故に、胸に突き刺さった矢が、ラッカの意識を奪うだけで、血が流れたり、死んだりするわけではない。

「ふぅ……さっきは助かったが、なんで狙撃手のお前が、そんな目立つ場所にいるんだよ……」

一夏が振り向いた先にいたのは、蒼穹の弓を携え、優雅に立つプラチナブロンドの髪をかきあげる。

「うふふっ……わたくしがクレアより目立つのは当然ですわっ！」

「さすがお嬢さまですわーーー!!!」

キャロルが両手に旗を持って応援するその先には、自信に満ち溢れた瞳を向けてきた。

少女、リンスレット・ローレンフロストは優雅に一夏を見下ろす。

「あんたはいろいろ動き回って、援護射撃しなきゃでしょーがっ!!!」

「ご心配なく、あのうるさい鳥精霊も、わたくしが撃ち落としてあげますわっ！」

リンスレットは空を飛び回るエリスの精霊《シムルグ》に対して、氷の矢を番える。

「凍てつく氷牙よ　〈魔氷の矢弾（フリージング・アロー）〉っ!!!」

放たれた氷矢。

しかし、それを《シムルグ》は容易く躱す。

「くっ！　ちょこまかとっ！　ならばっ！」

単発でダメなら多弾ならばと、氷矢をいくつも生成していく。

「〈魔氷の多弾（フリージング・バレット）〉ッ!!!」

いくつもの氷弾が《シムルグ》に向かって飛んでいくが、そこは風

属性の精霊……持ち前のスピードで全てを躱し、逆にリンスレットに迫る。

「きゃあっ!?」
「お嬢さまっ!?」
「ちっ！」
「一夏っ！　あんたはエリスをっ！」
「ああっ！」

一夏は迷いなくエリスに向かって走っていく。

「エリスっ！」
「ふんっ」

一夏は左手の短剣をエリスに向かって投げる。
が、エリスはそれを容易く打ち落として、切っ先を一夏に向ける。

「随分と脆い〈精霊魔装（エレメンタルヴァッフェ）〉だな。それで？　今度はそちらの剣で来るわけか……っ！」
「はあああっ!!!」

右手に持っていた直刀を振り上げ、エリスの頭上から振り下ろす。
しかし、エリスはその斬撃を真正面から剣で受け止める。

「ふんっ！」
「くっ！」

エリスの持つ騎士団の剣にもまた、神威が付加されている。
そのため、剣の切れ味、耐久性能では五分と五分。
ならば鍵となるのは、剣の腕だ。

「はああっ！」
「んっ!?」

一夏の重い剣戟を、体全身を動かすことで弾き返したエリス。
一夏は体勢を整えて、再び構えた。

（決して手加減はしていない俺の斬撃を真正面から受けて、あまつさえ弾き返した……。
それに今の動き、相当鍛練を積んだ者の動き……っ！）

エリスの家、ファーレンガルト家は武門の家。
それ故に、その娘たるエリスもまた、武術には秀でているわけだが……。

（彼女の能力を、少し見直した方が良さそうだな……！）

一夏がエリスを攻めあぐねている間に、クレアとレイシアの交戦も終えたようだった。

「はあああっ!!」
「やあああっーーーー!!!」
「なっ!?　ぐあああっ!!?!!」

氷の剣を振るい、クレアを仕留めようとしたレイシアだったが、逆にクレアの鞭が腕に絡みついて、そこから炎による精神的ダメージの蓄積によって、レイシアを戦闘不能に追い込んだ。
残る相手は、騎士団長、エリスただ一人。

「どうやら、言い訳を考えなきゃいけなかったのはあんたらの方

だったわねっ、エリス!!」
「ふんっ……ラッカとレイシアの二人を倒した事は褒めてやる。だが、私がそこの二人のように簡単に倒せると思ったら大間違いだぞっ……!!」
「へェ～？　じゃあ見てみたいものね。あんたがあの二人に比べてどれだけ保つのか、をね」
「ふんっ、わかりやすい挑発だな。だが安心しろ……君の程度の実力では、私を倒すまでは至らないだろうからなっーーーー!!!!」
「っ～～～～!!!　へェ～、言ってくれるじゃない……っ！」

エリスを挑発したつまりが、逆に挑発に乗せられた。
クレアの額には、ピクピクと動く血管が……。元々貴族の上にプライドも高いクレアだ。
自分の実力がエリスよりも劣ると言われて、さぞかし頭に来たのだろう。

「ならっ、吠え面でもかいてなさい!!」

クレアの右手に集まった炎。
それが巨大な火球となり、それをエリスに向かって放つ。
火属性の精霊魔術、〈灼熱の火炎球（ファイヤーボール）〉だ。
クレアが最も得意としている精霊魔術であり、火属性の中では、中級の精霊魔術。
火属性の攻撃魔術の中では基本的な技であるため、使い手の力量によって、威力などが変わるのだが、そこはクレアの実力も相まって、破壊力のある火炎球が放たれた。
いくらエリスでと、放った火炎球を真正面から受けて、無事でいられるわけもない。
しかし、エリスは避けようとするそぶりも見せず、ただただ自分の握っていた剣を鞘に戻し、右手を天空に向けて突き出した。

『凶ッ風よ　怨敵の心臓を貫く魔槍となりて　我が手に宿れ』!!!ーーーー」

《シムルグ》の姿が虚空に消え、代わりに、エリスの突き出した右手に集まっていく。

エリスの唱えた展開式に従い、シムルグは姿を変え、一本の長槍へと変化した。

「〈風翼の槍（レイ・ホーク）〉ッ!!!!!」

その長槍は、見るからにその神威たる輝きを秘めていた。

色鮮やかな緑色……それは《シムルグ》の毛並みと同じものだ。

そして、穂先が三方向に分かれ、日本の十文字槍と類似の形をした槍。

それを華麗に回し、構えるエリス。

「我がファーレンガルト流の槍術と《シムルグ》の前にっ、切らぬ物などないっ!!!!」

上段からの一閃。

エリスの宣言通り、クレアの放った巨大な火炎球を一刀両断……いや、この場合は〝一槍両断〟と言うべきか……。

ともかく、ものすごく破壊力のあるクレアの火炎攻撃を、見事に断ち切ったのだ。

（クレアの精霊魔術も大概だが、魔装にしたら、そのクレアの炎すら断ち切るのかよっ……！

あれを食らったら、一撃で終わりだな……！）

そして、リンスレットとはまた違う、凛として品のある動き……。

槍を再び回し、背中に回して構えるエリスは、とても綺麗に見えた。

「綺麗だな……」
「ふんっ……そうだろう？　君にもこの美しさがわかるか……」
「バーカ違ぇーよ。綺麗なのはお前の方だ」
「なっ!?　なにっ!?」

一夏の言葉に、急に取り乱したエリス。
その顔をは真っ赤に染まっており、今まで凛として決まっていた立ち姿も、今やオロオロとしているため、なんとも格好がつかない。

「え、ええいっ！　こ、ここの私が綺麗だとっ!?　ふ、ふざけた事を言うな！
私を侮辱するかっ!!?」
「なんでだよっ!?　普通に綺麗だと思ったから、綺麗だって言ったのにっ……！」
「い、いきなり何を言うかっ!?」
「なんだよっ!?　褒めたんだぞっ!?」
「ええいっ！　黙れ黙れっ！　やはり不埒で危険な存在だなっ、オリムラ・イチカっ！」
「なんで褒めたのにそんな評価になるのっ!!?」

武門の出ゆえに、している事と言えば槍の鍛練だ。
クレアやリンスレット……そのほかの貴族令嬢たちのように、女性らしさを磨くための所作をやっているわけではない。
無論、社交的な場にも出るため、ある程度の所作くらいは身につけているが、こと可愛いや綺麗などという言葉とは、無縁の世界で生きてきたと思っていた。
故に、今の一夏の言葉には、流石のエリスも狼狽えてしまった。

「そのような世迷言を吐けなくするためにも、君をここで倒して置かなくてはならないなっ！」
「くっ……！」
相手は〈精霊魔装（エレメンタルヴァッフェ）〉を展開していて、自分はただの神威を纏った直刀だ。
武器の性能からしても雲泥の差があるのに、武術の腕も相まって、いよいよ苦戦を強いられる事になった。
一応クレアがあるとは言え、生半可な攻撃では、先ほどのように簡単に断ち切られてしまう。
どの道、エリスと戦うのならば、それなりの覚悟をして置かなくては……。

「っーーーーーーー!!!!!!」
と、その時だった。

（なんだ、この感覚は……!?）
体全身に鳥肌が立つような……そんな感覚だった。
何か不吉なものが近寄ってきている……。

「なぁ、なんか空気が変じゃないか……っ？」
「何よ、怖気づいたんじゃーーーー」
「いや待て、クレア・ルージュ……確かに何かーーーー」

GUOOOOOOOOOOーーーーーー!!!!!!

「「「っ!!!???」」」

その場に響いた、奇怪な叫び声。
およそ人間の物とは思えない声だった。
そしてここは、〈元素精霊界（アストラル・ゼロ）〉だ……。ならば、その正体はーーーー

「なっ!?」
「え……」
「おいおい、嘘だろっ……!!?」

三人は、その正体を目撃してしまった。
決闘場に選んだ小劇場の最上段よりも上……虚空から、禍々しい姿をとった精霊が現れたのだ。
目や耳はなく、むしろ顔なんてどこにもない。ただあるのは、何もかもを食らいつくのではないかと思わせる、大きな口があり、そして、それがなんの精霊なのかもわからないほど、流動的な物になった肉体に、無数の腕。

「クレアっ……ここには低位の精霊しかいなかったんじゃないのかよ……っ！」

その精霊は、精霊使いならば誰もが知っている存在。
どの属性にも属さない、およそ人間の感性では知ることのできない

生命体。
故に、この精霊と契約できる精霊使いは、ほとんどいない。

「なんでここに、《魔精霊》がいるんだよっ……!!!」

第7話　精霊魔装

「なんでここに《魔精霊》がいるんだよっ……!!!」

突如として虚空から現れてた蠢く黒い生命体。

精霊には、本来『属性』と呼ばれるものがあり、それにより、どんな性質を持っているかを判断することができる。

例えば、クレアの精霊《スカーレット》は炎を纏う火猫……その属性は言わずもがな《火》だ。

リンスレットの精霊《フェンリル》は氷を発する白狼……その属性は《氷》で、五大精霊王たちの属性に換算すれば、《水》の属性を有している。

あとは、一夏の持つ精霊は一応《剣精霊》というものに分類されるため、その属性は《鋼》。

どの属性よりも強固で頑丈なのがわかる。

しかし、《魔精霊》という存在は、その誰にも当てはまらない。

見るからに禍々しく、精霊自身も言葉を発するわけではない……それ故に、この精霊と契約できるものは、ほとんど皆無と言ってもいいくらいだ……。

もしこの精霊と契約しようものなら、その者は『魔女』という名で呼ばれる。

（あのグレイワース級の精霊使いでもない限り、契約なんてできそうにないか……まともに戦うにしても、今の俺じゃあ……！）

一夏の知人であり、学院の主でもあるグレイワース・シェルマイスは、誰にも契約できないと言われた魔精霊と契約し、圧倒的な強さを見せつけ、かつての大戦を生き抜いた猛者だ。

それにより、彼女の強さに恐怖や畏怖を抱いた者たちが〈黄昏の魔女（ダスク・ウィッチ）〉という異名をつけくらいだ。

残念ながら、今ここにグレイワースはいない……そして、ただの学

院生に、魔精霊を手懐けられるほどの精霊使いはいない。
そんなことを考えているうちにも、魔精霊は着々と一夏たちに近づいてくる。
その影響はすぐに出始めて、一夏たちの立っていた地面や生えていた草などから、どんどん神威が吸い取られている。
その状況に、エリスも苦虫を噛み潰したような表情を取った。

「くっ……周囲の神威を吸い取っているのか……！　これだから魔精霊は……！」

一夏、エリスは一旦魔精霊から距離をとって、再び構え直した。

「ラッカ！　レイシア！　どうだっ、動けるか!!」
「す、すまない、団長……！　私は意識あるけど、レイシアは……！」
「くっ、動かそうか……？」
「ごめん、無理かも……！」
「なら、私と《フェンリル》が運びますわ！　キャロルっ！　手伝ってくださいな！」
「は、はい！　お嬢様！」
「すまない！　助かる」

後方では倒れているレイシアを抱きかかえて、フェンリルの背中へと載せるリンスレットと、なんとか意識だけは取り戻したラッカに肩を貸すキャロル。
あとは急いで〈門（ゲート）〉まで移動して、もの世界に帰れればそれでいい。
あとは、それを追ってくるであろう《魔精霊》をどう食い止めるかだが……。

「私が殿を務めよう……！　君たちは早く彼女たちと一緒に行きたまえ……！」

「何言ってんだっ……！　殿をやるなら、男である俺が残る！
エリスこそ早く逃げろ……！」
「私はそういう理由で疎外されるのが一番嫌いだ！　男だからとか、女だからと言って引き下がっては、騎士の名折れだ！
それに、今の君に展開できる〈精霊魔装（エレメンタル・ヴァッフェ）〉があるのか？
そんな片刃の剣に神威を込めた程度の武器では、あの魔精霊にダメージは負わせられないし、君の精霊は不安定と来ている……私が残るのが一番無難だ」
「くっ……」

痛いところを突かれたが、エリスの指摘は的を得ている。
一夏も早々に退散を始めようとした時だった……その場から離れようとしない人影がもう一つ……。

「っ……おい、クレア！」
「あ……!!!」

クレアだった。
クレアは食い入るように魔精霊の姿を凝視し、ゆっくりと近づいていく。

「あれほどの魔精霊……！　おそらくそこいらの精霊よりも何倍も強いわ……!!」
「クレア・ルージュ……！　君ってやつは……！」
「やめておけ……！あんな得体の知れない精霊となんか、契約できるわけないだろう……！」
「いいえ……いるわよ。ただ成功した人が少ないってだけで……」

そう……いる。

その人物が学院の長なんてやってなければ、そんな発想には至らなかったかも知れないが……。

「グレイワースの事を言ってるのか？　あいつは本物の魔女だ……！　あいつと俺たちとじゃ、実力差がありすぎる！

剣舞の強さもっ、精霊使いとしての才能もっ！」

「うるさい!!　だから何だってのよ！　その才能か私にもあるかも知れないでしょ!!」

「ダメ元でやっていい相手じゃないくらいっ、お前ならわかるだろ!!

それに、お前は今朝の封印精霊の時にも相当な神威使ったろうが！」

一夏は懸命にクレアを止めようとする。

しかし、一夏の伸ばした手をクレアは思いっきり振り払った。

そんな彼女目には、自然と涙が溢れていた。

「何よっ！　あたしの精霊奪ったくせにっ！」

「いやお前っ、あの時は……！」

「あんたには話したでしょう！　私が今までどういう扱いをされてきたのかもっ……どうして強い精霊が欲しいのかも……！」

「あぁ、聞いたさ……でも、あんな埒外のやつはやめておいた方がいい！　お前自身を滅ぼすことになるんだぞ！」

「うるさいっ！」

「っ……！」

もはや止める言葉など見つからなかった。

クレアの過去は聞いた。

どんな風に周りから思われていたのか、どんな気持ちでその中を生きていたのか……それは一夏自身が考えてもわからない事だ。

クレアの経験は、クレアだけのものだ。

同情はできても、同じ思いには至れない。

「あたしはどんなことをしてでもあの精霊と契約してみせるっ……！　そして、あのレン・アッシュベル様のように強くなってっ、必ず〈精霊剣舞祭（ブレイドダンス）〉に出て、姉様と会う!!」

そう言ったと同時に、クレアは魔精霊に向かって駆け出した。

こちらの止める声も聞かずに、ただただがむしゃらなまでに。

「弱いあんたらは、そこで大人しく見ていなさい！　行くわよっ、《スカーレット》!!」

主の呼びかけに呼応して、クレアの手には黒い革張りの鞭が現れる。

その鞭は炎を纏い、勢いよく上がる烈火とともに、縦横無尽に空を切り裂いていく。

「はあああッ!!!!」

勢いよく振り抜く鞭は、クレアに迫り来るおぞましい闇を秘めたような黒い腕を容赦なく斬り落とす。

その断面を見るに、超豪熱によって溶断されたのだというのがわかる。

腕を断ち切られると、魔精霊は悲鳴にも似た声を上げ、大きな顎を天に向かって開けて叫ぶ。

そんな隙だらけの状態を見逃すクレアではなかった。

「よしっ、効いてるわね！　さぁ、どんどんいくわよ、《スカーレット》!!」

更に炎が猛る。

黒い触手を鞭で捕縛すると、クレアの左手に神威が収束する。

「くらいなさい!! 〈灼熱の劫火球(ファイヤーボール)〉ッ!!!」

特大の火炎の球体。

近くにいてもその熱量に焼かれそうだというのに、それを魔精霊に直撃させた。

その規模、技量を見れば、その精霊使いの優秀さが見て取れる。

クレアは間違いなく優秀な精霊使いだ。

精霊魔術の習得、そしてそれを素早く行使できる技量……その魔術を大規模なものまでに発展させられるだけの神威の量。

そして、精霊使いならではの戦闘のセンス……クレア自身から聞いたが、たとえエルステイン家が取り潰されたとして、クレアがその名を名乗らなかったとしても、その血は脈々とクレアの体の中に流れているのだ。

「やったあぁぁぁーー!!!」

左手を握りしめて、喜びを露わにするクレア。

そこ姿を少し離れた位置で見守っていたエリスと一夏も、クレアの戦闘に魅入られていた。

「クレア……あいつ……っ!」

「普段の素行は、あまり褒められたものではないがな……しかし、彼女もまた、このオルデシア帝国に名を轟かせる貴族の娘であり、優秀な精霊使いだ……!

彼女の剣舞は、見事と言うしかあるまい……」

「あぁ……そうだな……」

彼女が強さを求める理由……。

それは一夏も知っている。だからこそ鍛練に打ち込み、強さを求めてひたむきに努力を続けてきたのだ。
周りの者たちからの嫌味や嫉み、嫌悪の雰囲気や言葉すらも耐え抜いて……。
だからこそ、いま一夏の目の前で気高く舞っている少女の姿から、目が離せなかった。

「お前は、十分強いじゃないか……クレア……」

不意に、左手を握りしめていた。
黒い革手袋で覆われた左手……そこにあるのは、一夏にとって大切な物。
しかし、今は無くしてしまった物でもある。
何があって、手放してしまったのか……当時のことは思い出せない。
しかし、この上ない喪失感だけが、一夏の胸に残っていた……。

（あぁ……だからなのか……）

どうしてか、クレアの事を放っておけない理由。
それは、自分もそうだったからだ。
無くしてしまった物の悲しみを、一夏自身も知っているから……だから否定なんてできないし、クレアの事をどうでもいいなんて割り切れない。
そして、だからこそ……目の前で行われている剣舞に、目を奪われてしまうのだ。
どこまでも気高く燃え上がる綺麗な炎。
それが、クレアの気高さであり、クレア・ルージュという精霊使いなのだ。

ＧＵＲＯＯＯＯＯＯＯーーーーー
!!!!!!

「「っ!!!??」」

しかし、勝利の核心を得た一同であったが、そんな雰囲気を切り裂く様に、魔精霊の怒号が響き渡る。

爆炎が徐々に晴れて行き、魔精霊の本体が姿を現わす。

多少の傷は付いているものの、倒すまでには至らなかった様だ。

「まったく、ご主人様に対して反抗的なのねっ……！　ならいいわ、とことん調教してやるわよ!!」

鞭を振り、魔精霊に対して攻勢に出るクレア。

それを見ていた一夏とエリスも、流石にこのままではいかないと、行動に出る。

「チッ、熱くなりすぎだっ、クレア・ルージュ！」

「エリスがあいつのサポートを！　俺も手伝う！」

「いいだろう！　しかし、自分の身は自分で守れよ？　どうなっても君の責任だからな！」

「わかってるさ、騎士団長！」

一夏は直刀を、エリスは槍を握りしめて、クレアの後を追う様に駆け出した。

そんな中、クレアは精霊魔術と〈炎の鞭（フレイムタン）〉を駆使して、魔精霊を一方的に攻める。

「このっ！　このっ！　さっさとあたしに跪きなさいよ!!」

ＧＵＲＯＯＯＯＯＯＯーーーーー!!!

「っ?!」

一方的だった戦況の中、突如として魔精霊の動きが変わった。
防御体勢だった動きが活発になり、四方八方から触手を伸ばしてくる。
当然クレアはその触手に捕まらないように、距離を取りつつ、右手の〈炎の鞭（フレイムタン）〉を振るい、左手で炎の精霊魔術を唱えながら、触手を迎撃していく。
しかし規模のデカイ爆炎は、相手だけでなく、自分の視界も遮ってしまうのだ。
もくもくと立ち込める黒煙から、触手が二本伸びてきて、クレアの右手首と、左足首に巻きついた。

「きゃあっ?!」
「クレア！」
「クレア・ルージュ!!」

触手に捕らわれてしまったクレアを救うべく、一夏とエリスが両サイドから回り込んで来る。
しかし、クレアに巻きついている触手を斬り裂くよりも前に、二人に対して飛ばしてきた別の触手が襲いかかる。

「くっ！」
「くそっ……！」

エリスは風の精霊魔術で後方に回避して、一夏は横に移動して、触手からの攻撃を躱す。

「クレアっ！　くそっ、この手、邪魔だ！」

躱しても次がやってくる。

こちらへと伸びてくる触手を、一夏は神威の加護が宿った直刀で斬り裂き、エリスもまた、精霊魔術と槍術による攻撃で撃退していく。

「凶ッ風よっ、狂えッ!!!」
「せぇやあぁッ!!!」

しかし、斬っても斬っても触手はその都度再生して襲ってくる。
これでは、クレアの救出ができない。

「チィっ、クレア!!」
「あ……あぁ……!!!」

一方のクレアの前には、大きな顎を開き、クレアを一飲みにしそうな勢いの魔精霊が、目前にまで迫ってきていた。
右手、左脚を掴まれている状況では、逃げることができない。
ましてや、地面に転倒している。
そこから起き上がったとして、逃げ出すにしても、鞭を封じられているため、即座に拘束を解くことはできないだろう。
眼前に、魔精霊本体が迫っている中、クレアは動かずにいた。
そこに迫っているのは、『死』だと言うことを、頭が……体が、理解したからだ。
恐怖に打ちひしがれてしまったクレアの体は、硬直してしまって動けない。
そんな時だった。

「シャァァァァーー!!!!!」
「っ?!!　スカーレット!!!!!?っ?!!」

鞭の形態になっていたスカーレットが、いきなり本来の火猫形態に変化。
そのままクレアに絡みついている触手に噛みつき、また鋭い爪で

引っ掻き、斬り裂いていく。

「《純化》しろなんて言ってないでしょうっ!!?　スカーレットっ！　戻りなさいっ！　早く鞭に戻ってっーー!!!」

精霊とは本来、主人である精霊使いの言うことを忠実に聞き、守るものだ。

しかし、スカーレットはクレアの命令には従わず、襲いかかる魔精霊に対して果敢に飛び込んでいく。

「スカーレットっ!!　お願いっ、戻って！　スカーレットってばぁッ!!!」

「ニャァオ……!!」

「へ……？」

一瞬だけ、スカーレットがクレアの方を見た。

そして、たった一言……クレアに向かって言い放ったのだ。

（なに……？　〝逃げろ〟……？）

その言葉の意味がどう言うものだったのか……その一瞬では全くわからなかった。

しかし、背後に迫る魔精霊の大きな顎が、その意味を物語っていた。

「っ!!　ダメッ！　スカーレットっ!!!!!」

バクゥンッ!!!!

「ッーーーーー!!!??!!?」

スカーレットの体が、顎に飲み込まれていった……。
溢れた火の粉は、虚空へと舞い上がって消えていく。
クレアは目の前の現実を受け入れられないと言った感じで、その場にしゃがみ込んで、右手だけを伸ばした。

「スカー……レット……？」

瞳からは光が消え失せ、伸ばした右手には、精霊との契約の証である精霊刻印の色が消え失せていた。
火猫の精霊……スカーレットは、消えてしまったのだと、クレアは悟った。

「スカーレットっ!!!!!!」

跡形もなく消えてしまった炎。
それを確認すると、クレアの瞳からは涙が溢れてきた。
伸ばした手は空を切り、目の前に魔精霊が迫り来る。

「いや……っ、いや……っ!!」

触手が勢いよくクレアに襲いかかる。
クレアは動けない。
死を覚悟した……その瞬間だった。

「クレアァァァーーーーッ!!!!!!」

一夏の声が木霊した。
クレアの体は、勢いよく横へと浮き上がり、さらに急激な衝撃が身

体中を襲った。

「きゃあっ!?」

「ぐうっ!!」

ギリギリのところで、一夏が触手とクレアとの間に割り込んできた。

転がるような勢いで飛び込んできたのだ……。

「あうぅ……くっ……!」

「はぁ……はぁ……間に合ったか……ぐぅ……!」

「あ、あんた……っ」

「逃げろっ、クレア……!」

「え……?」

「無駄にするなっ！　スカーレットが作ってくれた、最後のチャンスだったんだっ、それを無駄にするなっ!!」

「っ～～～!!!」

それだけ言って、一夏はまた駆け出していった。

クレアに迫り来る触手を排除するために。

両手で握った直刀には神威が込められており、鋼とはまた違った輝きが見て取れたが、その光も強まったり弱まったり……安定していない。

（チッ、まったく……なんて無様な神威だ……!!）

襲いかかってくる触手を斬り裂きながら、一夏は苦い表情をしていた。

今はまだ対抗できる。

しかし、このままでは絶対に押し切られてしまう。
そして何より……。
（こんな姿を、あの婆さんが見ていたら……また毒づかれるんだろうけどな……）

三年という期間の長さ。
その間に、どれだけ自分が腑抜けてしまったのかを痛感してしまう。

「ぐっ、おぉっ?!」

自分の頭上から、強烈な攻撃が降り注いできた。
触手を勢いよく振り下ろしてきたのだ。
避けるにも避けられない間合い……一夏は回避しきれないと判断して、すぐに防御体勢に入る。
が、触手が防御体勢の一夏に直撃した瞬間、直刀は砕け散り、触手は一夏の体を吹き飛ばした。

「ごはぁっ……!!!」

視界が回る……いや、回っているのは自分の体全てだ。
〈元素精霊界（アストラル・ゼロ）〉では、肉体に直接的なダメージはない。
全てが自分の精神に帰ってくる。
今にもブラックアウトしそうな精神が、周りの景色を捉えている。

（何やってんだ……俺は……？）

三年もの間……たった一人の精霊を追い求めて、各地を旅して回っていた。
手がかりなど何もない……探す宛てもない……だが、探さずにはいられなかった。
なのに……。

（やべぇ……これ、死ぬかもな……）

全くの無駄足だ。
いきなり知己の存在であるグレイワースに呼び出され、強制的に学院へと入学させられて……何を血迷ったのか、今こうして精霊を使役して、戦っている……。
彼女以外の精霊と契約して……。

（レスティア……）

「イチカァァァァッ!!!!!!!!」
「っ……!」

少女が名を呼ぶ。
その叫び声に、意識が戻った。
しかし、すぐさま壁に激突。
決闘場には、〈元素精霊界（アストラル・ゼロ）〉に元々ある決闘場の壁や隆起した岩などが点々としていた。
おそらくは、そこに体をぶつけたのだろう。

「がはあっ!!??」

肺から一気に空気が吐き出される。

そして再び意識が遠退きそうになるが、今度は一夏自身で唇を噛み締めて、痛みで意識を取り戻す。

「ごふっ……あぁ……！　くそっ、痛ってえ……！」

背中からぶつけたから、まだ体へのダメージはそこそこだが、そう長時間も戦ってはいられない。

（くそ……やっぱりあいつを倒すには、〈精霊魔装（エレメンタルヴァッフェ）〉じゃねぇと無理か……!!）

噛み締めて、両脚に力を入れる。

なんとか立ち上がろうとしている最中にも、魔精霊はクレアを執拗に狙っている。

クレアにもう、スカーレットがいない……エリスは触手を相手にしているため、迂闊には動けない。

魔精霊の大きな顎が開き、触手がクレアの四肢を掴んで離さない。

もう、一刻の猶予もない……。

（くそっ、やるしかないっ!!）

全ての意識を脚に集中して、なんとか立ち上がった一夏。

それと同時に、自身の右手に刻まれた刻印に視線を移す。

「おい……聞こえてんだろ？　だったら、俺の願いもわかってるはずだ……!!」

誰に発した言葉なのか……その場にいる者たちは理解できていない。

それは、一夏自身にしかわからない事だからだ。

視線を右手の甲に刻まれた、二本の剣が交差したかのような模様の

精霊刻印に……。
左手で、右手を強く握りしてる。
「知ってるぞっ、お前の力はこんなもんじゃないだろう！　だったら、その全てをっ、俺に使われてくれッ!!!」

覚悟の決まった瞳。
右手をそのまま魔精霊に対して突き出し、一夏の口から呪文が唱えられた。

『冷徹なる鋼の女王ッ!!　魔を滅する聖剣よっ!!　いまここにーー」

バチィィィィッ!!!!

「ぐうっっ!!??」

突如、左手に強烈な痛みが走った。
僅かだったが、まるで雷にでも撃たれたかのような衝撃も感じた。
これは彼女の力なのだろう……。

（悪いなレスティアっ……いま必要なのは、お前の力じゃないっ……いま必要なのはッーーーー）

痛みをこらえ、一夏は駆け出した。
その瞬間にも、右手に神威が集まっているのがわかる。
強大な神威の塊か収束して、剣の柄が形成される。

（ーーーーあいつをっ、クレアをっ、守る力なんだっ!!）

決意の表れ……。
それを頷けるように、一夏は綴った。
「ーーーーいまここに鋼の剣となりてっ、我が手に力をッ!!!!!」
光輝く閃光を握りしめて、その力を抜き放った。
「おおおおッーーーー!!!!!」
勢いよく振り上げた一閃。
閃く斬光が、虚空を斬り裂いた。
クレアを捉えて触手を、一瞬のうちに全て斬り裂いたのだ。
触手から解放されたクレアを、一夏は脅威的なスピードで駆け出し、地面に落下するよりも速く受け止めて、一旦その場を離れる。
「あ……あんた……!?」
「もう大丈夫だ……あとは任せろ……!」
一夏の手に握られていた一振りの長剣。
何物にも染まらない純白……聖なる輝きを持ったその剣はまさしく、かの聖女《アレイシア・イドリース》が振るい、最悪の魔王《スライマン》を討伐した伝説の聖剣。
〈魔王殺しの聖剣(デモンスレイヤー)〉。
「よお、顎野郎……さっきは随分と暴れてくれたな……」
GUROOOOOOOーーーーーーー!!!!!!

触手を断ち切られたことに対しての怒りなのか、はたまた、あらゆる精霊たちを斬り伏せてきた《聖剣》の力に恐れ慄いているのか……。

「お前には悪いが、ここで退場してもらうっ……!!!!」

そう言った瞬間に、一夏の体は瞬時に動き出していた。

駆け出す脚は、まるでバネのように跳ねまわり、一瞬にして間合いを詰める。

神威による一種の肉体強化の術。

迫り来る触手を一瞬にして斬り裂き、魔精霊の行動を奪っていく。

「そろそろ決めさせてもらうっ!!!!」

まるで風と一体化したかのような錯覚を覚える。

それほどまでのスピードで、一夏は地面を蹴った。

しかし、今度こそ魔精霊は一夏の動きを予測していたのか、体から発した触手を増やして、一斉に一夏に向けて飛ばしていく。

四方八方から触手が囲んでやってくるその様子を、クレアとエリスは一番近くで見ていた。

その光景は、ある意味で絶望的状況。

高速で放たれた触手たちが、一斉に一夏に襲いかかった。

「イチカっ!?」

「オリムラ・イチカッ!」

土煙が吹き上がるほどの強い衝撃……。

しかし、煙が晴れた瞬間に、クレアとエリス……いや、攻撃を行った魔精霊すらも驚く。

何故なら……衝撃地点に、一夏の姿がなかったからだ。

「ーーーーこっちだ、バカ」
「っーーーーー??!!!!」
声が聞こえた方へと、視線を移す。
そしてその視線の先には、いつのまにか、上方へと飛んで躱していたのだ。
飛びながらも、しっかりと体勢は斬撃を放てる体勢を保っている。
そしてそのまま、重力に任せた自然落下とともに、煌めく聖剣を振り切った。
「おおおおおッ!!!!!!!」
白き斬閃が虚空を閃き、魔精霊の体を光が一閃していった。
いや、魔精霊だけではない。
その巨体の下にあった地面ですらも斬り裂いていた。
つまり今の一振りで、地面ごと割断したのだ。
ＧＵＲＯＯＯＯＯＯＯーーーーー!!!!!???
胴体を真っ二つに斬り裂かれてしまった魔精霊は、姿形を保つことが出来ずに、そのまま虚空へと霧散して消えていった。
「ふぅ……もう二度と出てくんなよ、顎野郎……っ!!!」
右手に持った聖剣を右手に振り払う。
風を薙ぎ、神威の光を四散させる……そこに映るのは、鏡のように澄み切った刀身。
その姿だけでも敵を萎縮させてしまうであろう威光。
これが長きにわたり、誰とも契約せずに時を過ごしてきた伝説の聖

剣の本来の姿なのだ。
一夏は〈魔王殺しの聖剣（デモンスレイヤー）〉に流していた神威を止めて、聖剣を虚空へと消し、右手の甲に刻まれた刻印へと戻した。
そして、自身の後方で座り込んでいるクレアの方へと歩み寄る。

「クレア……」
「……」

一夏は俯いているクレアに対して話しかける……が、クレアは何も答えてはくれない。
それもそのはずだ。
大切な契約精霊であった《スカーレット》が消えてしまい、今の彼女は傷心しているのだ……。

「その……無事でよかった……」
「っ……じじゃ、ない……よ……!!」
「え？」
「っ～～～～!!」

何と言ったのかが聞き取れず、一夏が前かがみになろうとした瞬間に、クレアは勢いよく立ち上がると、そのまま一夏の制服の襟を両手で掴む。
ようやく露わになった表情は、泣き顔だった。
ルビーを思わせる綺麗な紅い瞳からは、大粒の涙が次々にあふれてきていた……。

「っ！　全然無事なんかじゃないわよっ!!　なんでっ!?　なんでよっ！　あんたっ、そんな強い力も持ってるのにっ……！　なのにっ……！」
「クレア……」

「いいえ、違うわ……」

強く握りしめていた両手の力が解けて、再びクレアはその場に座り込んでしまう。

「あたしがっ……！　あたしが馬鹿だったから……！　スカーレットっ……ごめん、ごめんね……！」

なんと声をかけてあげればいいのか、今の一夏には分からなかった。

ただ、契約していた精霊が、突如として自分の下からいなくなる……その喪失感は今も一夏の胸を焦がすような感覚を与えてくる。

「クレア……っ、!?」

クレアに手を差し伸べようとした瞬間、一夏の視界がグニャリと曲がっていった。

（な、なんだ、これ……体が……！）

視界で捉えている光景……。

体は前方へと倒れて行き、クレアのすぐそばで倒れてしまっている……。

突然の出来事に、クレアが慌てて体を揺すってくるのがわかる……遠くから、エリスが駆け寄ってくるのがわかる。

だが、それだけだ。

体がピクリとも動かないのだ。

そして、体の感覚が失われていった後は、意識が遠のいていくのがわかった。

この現象を、一夏も知っていた。

（神威切れ……かよ……っ、たった一回、全力を出しただけでこれか……）

無論、その前にしていた決闘の影響もあるだろうが、それにしたって、いきなり神威が根こそぎ奪われたのはおかしい。

魔精霊に吸い上げられたわけでもないし、決闘の時も、ある程度はセーブしていたはず……。

となると、答えは一つ。

（くそ……何つう燃費の悪い精霊なんだよ、こいつは……）

自身の右手の甲に刻まれた精霊刻印を見つめる。

二本の剣が交錯しX字になっている模様の刻印……伝説の聖女が携えていた聖剣の精霊刻印。

それを最後に、一夏の意識はついに途絶えた。

神威切れによる意識の損失。

その症状は単なる貧血などに近いもので、慌てる事はないが、しばしの静養が必要なのは確かだ。

倒れた一夏を、エリスが肩を貸して背負い、その場から引き上げていった。

「ふふっ……なんとか　〝目覚め〟　まではいったみたいね？　イチカ……。

でも、まだまだね……本当のあなたはそんなものじゃない……私が知っているあなたは、もっともぉっと凄いはずなんだもの……！」

宵闇の空……。
月明かりだけが、唯一の光源である《オーシャン・フォレスト》の大地に、複数枚の羽根が散らばった……。
淀みや混じりっ気のない、綺麗闇色の羽根。
かつて幼い〝彼〟が、とても綺麗だと言ってくれた自慢の羽根、そして自慢の翼だ。

「待っててね、イチカ……すぐにあなたを、〝本来のあなた〟に目覚めさせてあげるわ……!!
ふふっ、あはははッ!!! ふふふふっ!!!」

綺麗な音色と思わせるような妖艶な声色。
背中に翼を生やした少女は、学院へと帰っていく彼を見ながら、妖艶に笑った。
そしていつのまにか、自身の羽根と同じように、闇の中へと忽然と姿を消していったのだった……。